
青き龍に願いを込めて

泡沫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青き龍に願いを込めて

【Nコード】

N9708L

【作者名】

泡沫

【あらすじ】

そう俺は神様にお願いをした。いや、神様がどうかは分からない。でも、願いは通じたはず。何故ならその願いは叶ったのだから。その代償に空から神様が落ちてきた!?「願いを言いなさい。叶えてあげるから。それと恋愛限定ね。面白くないから。んゝそうね私が楽しければいいの。なにかしなさい」上から目線の嫌な奴。しかし、認めたくない程の美人! この後俺はどうすれば!? 神様と人間が繰り広げる爽快ラブコメディー…ってラブコメなの!?

空からの神様召喚（トラブルメーカー）

今、天月^{あまつきお月}大空こと俺は自宅のテレビの前に座ってくつろいでいる。そんな俺の横に今1人の女の子がソファにくつろいでいる。その子はとてつもない美人で身長は165くらいだろうか。出るころしつかりと出ていて、足まで届く蒼髪に蒼眼がトレードマークなかなーり目立つ風貌。

「どうした大空？ また何か考えておるのか。まったくそんな暇があったら私のために働けばいいものを」

「まったく…」

この偉そうなのは青神龍^{あおがみたつみ}美。名前を見ただけ分かるだろうか？ 青い竜の神様。こいつは青龍、らしい。というのも実際神様っていう証拠が無い。

だからといって信じない訳ではない。本人がそう言っているわけだからそれを前提としようじゃないか。それにこいつの破天荒ぶり、世間知らずぶりといったらそれはもう絶滅寸前のお嬢様レベルで俺の手に負えるべきものではない。

そもそもなんでこいつが俺の家にいるのかそこから説明しなければならぬだろう。

あれはそう高校受験の合格発表の日だ。中学教師から無謀だとは言われなかった私立高校に合格し浮かれていた時だった。

空から人が落ちてきた。いや、俺の上に着陸…いや、やっぱり落ちてきた。

俺の上に被さるように乗っているのは、蒼い色のドレスを着た蒼髪蒼眼の美少女。落ちてきた時に見えそうだったパンツまでが蒼色だったかまでは俺の知るところではないが。

というか、どんな状況だ？ 飛行機から落ちてきた外国の方？ それとも電波な異次元^{ファンタジー}な方？

とその時落ちてきた蒼色美少女が目を覚ました。俺は慌てて英会話モードに切り替える。合格ギリギリの英語力なめんなよ？

「ど、ドモ！は、はうわーゆー？」

「それは何語だ？日本語で話さんか」

俺の英語力は皆無だったようだ。って日本語？この人日本人ですか？こんな髪でこんな眼をしていて日本人？

「お主もしかして、異国の者なのか？」

「いやバリバリの日本人ですけど…」

「だったら最初から日本語で話さんか。このバカ者！」

初対面なのにバカ者呼ばわりですかー。それはそれは素敵な性格の持ち主のようで。

「あのー失礼かもですが…どこの国の方ですか？」

「神の国に決まっておるだろう。お主が私に願いを懸けたのだろう」はい。後者の電波な方でした。僕ちゃんかなりシヨックといひかなんというか。

「って願いを俺が？」

「そうだ。そして私は願いを叶えた。だからお主は”じゅけん”とやらに合格したのだから？」

俺は必死に記憶を辿ってみると確かに一週間前に神社で御参りはした。

「もしかしてそんな時か？」「まったくようやく思い出したのか？とにかく疲れた。お主の名前はなんだ？」

「大空だ」

「…名前負けか」

「二度と言いやがるな。で、そつちは？」

「青神龍美だ。それでも青龍という偉大な神なんだぞ？ふむ、さて行くとするか」

「まさかとは思うが俺の家に行くとかいう電波な展開ではなからうな？」

「よく分かったな。なら話は早い。早速案内してくれ」

よし！日本語は通じるんだな！そして、話は通じない。見た目とギャップがありすぎる。ていうかもったいねえ。

「早くせんか、バカ者。私はお腹が空いた」

「はいはい、何か作りますよ」

こうして俺の家に電波な美少女龍美がやって来ることになったのだ。

しかし、知れば知るほどに世間知らず、というより一般常識を知らない。車が通った時は鉄の馬呼ばわり。テレビなんかが映った時は失神寸前。初対面にバカ者呼ばわり。

さてここで問題です。次に彼女が言い出すことはなんだと思います？答えは

「腹減った」

それでも神ですか。神様ってみんなそんなもんですか。くそつ。なんだかんだで飯の用意してる俺って。

発砲スチロールの容器にお湯を淹れて某巨大ヒーローが帰らなければならぬ時間を待つだけでラーメンが出来るという画期的な飯を提供してみる。

「なんだ…この食い物は」

「カップヌードル。手軽に食えて上手くて安いという素敵フードだ」

「やはり大空は日本人ではないのか？」

いきなり呼び捨てかよ。まあいいけどさ。

「青神さんはいつの時代の人なのかな？」

「ふむ、最後に願い叶えたのは誰だったか…。そう、狸のような奴でこの国を治めたな」

まあ待て。見た目狸で日本を治めたのって…

「それって徳川家康って人じゃない？」

「そう、その人だ」

あーあ。さっきまで浮かれていた自分が嘘のようだ。今ではもう全てがどうでもいい。

「その徳川家康の願いを叶えちゃうような青龍さんが俺に何のご用

で？」

「お主の願いを叶えようと思って来た。文句があるのか？」

「帰れ。そして二度と来るんじゃない」

「無理だ。そもそもお主の命令を聞く私ではない」

「じゃあ願いだ。帰ってください」

「それも無理」

「願いを叶えるんじゃないのか？」

「それでは面白くないから。願いを言いなさい。叶えてあげるからそれと恋愛限定ね。面白くないから。んゝそうね私が楽しければいいの。そういうなにかにしないさい」

電波訂正。こいつはただのワガママだ。

「とりあえず今は願いなんてない。だから帰ってくれよ。そのうち親だつて帰ってくるし」

「大空は親が好きか？」

「好きっちゃ好きだけど、いなかったら楽だろうな」

「その願い聞き入れた」

「は？」

まさかこいつ…。

その時携帯が鳴る。こいつまさか俺の両親を…。俺は恐る恐る携帯の通話ボタンを押す。

『あ、大空？お母さん達世界一周してくるから一年は帰れないとおもうのゝ。おうちよろしくね』

そこで電話が切れた。まず一つは心配して損した。二つ目は

「何がしたいんだお前は」

「何がっていなかったら楽と言ったのは大空だぞ？それに今は願いが無いなら側にいるしかなかるう」

まさか…待てよ…それって…

「ここに住む気か？」

「そのつもりだが」

俺は頭を床に打ちつけた。もう何も考えたくねえ。そう思いなが

らテレビの電源を入れ、バラエティーを見て気を晴らす。

それが今に至るわけだ。

一つだけ言っておこう。俺は何も悪いはしてないぞ？

地上に立つ非日常（ミステリアス）

もう嫌だ。by天月大空。

なぜいきなりこんなことを？と聞かれたら答えは一つ。

「大空、暇。なにか面白いことはないの？」

この偉そうな居候をどうかしてください。神様お願いします。と言っても居候が神様なわけでどうしようもないの。

なぜこの神様こと青神龍美さんがこんなにも暇をしているのか？それはお昼のバラエティー番組が終わり夕方のニュース番組しかやっていないから。

「このスーツの男は喋ってても面白くないわ。いつそ消してしまっただ方が」「やめい！」

ずつとこんな調子である。

「じゃあ夕飯の買い出しにでも行くか？」

何を隠そう、青神さんのおかげで両親は世界一周旅行に出掛けるというよく分からない展開になってしまっており、いつまで待っても夕飯は出てこない。ああ、なんたる不幸か。

そもそも神様と会ったのにも関わらず、一度も幸せと思ったことがない。というか出会う前までは幸せでした。目の前の人は不幸將軍です、こんちくしょう。俺の平和と幸せを返せ。

などと愚痴っても仕方ないので買い物に近所のスーパーに向かった。

そして今、目の前に見えるこのスーパー。一見普通のスーパーだが、実は違う。

そう、このスーパーはとてつもなくやる気のないスーパーなのだ。いや、店員が適当という訳ではなく。最近のスーパーというのは夕方タイムセールやポイントサービスなどいくつかの工夫をするものだがこの店にはそんな概念は一ミリたりとも存在しない。そもそもライバル視する店もないので気にしなくても客は来るのだ。

そんなスーパーだからこそこの時間帯は客足はばちばちというところで、今の世を何も知らない青神を連れてきても問題はないだろう。

「大空！この美味しい食い物はなんなんだ？」

「あー、それはガムって言うお菓子でだな。噛むことで味が出るんだ。味が無くなったら口から吐き出す」

「一度口に入れたものをだすの？行儀が悪いわね」

「そういうもののなの」

待てよ。一つ引つかかる。なんでガムを食ってんだ？

「勝手に商品食うな！」

「なに？これはお供え物じゃないの？」

「そんなとこだけきちんと神様かよ。って感心してる場合じゃない。とにかく勝手に置いてある物を食べるな」

「大空がそう言うなら仕方ないわね」

結局ガムは買う羽目に。というかガムを気に入ったようで一個百円の板ガムを10個も買った改め買わされた。百円でも10買えば千円。つい最近まで中学生だった俺からすれば大きな数字である。

そして帰り道。日も暮れ、辺りが少し明るいが電灯に灯りが点き始める。

「大空、お腹空いた」

「今日それしか言ってないか？ていうか俺の願いよりも自分優先かよ」

「今日の晚餐は何なの？」

「……………諦めたよ。とりあえずは誰でも美味しく作れるカレーかな」

「”かれえ”？それはなんなのかしら？」

「そこからかよ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず食ってみるのが早い」

「ふむ、ならば思い切り料理の腕を振るえばいいわ」

なんでそんな上から目線になれるのか。神様はなかなか不思議な生き物だ。なんというか見てて飽きない。ていうか目を離せない。

こうしてる間にも青神は公園の噴水に飛び込んでいる。

「どうだ？大空も水浴びをしないか？」

「慎んでお断りするよ。つか風邪ひくぞ。それにそこで遊ぶのは小さい子供だけだ」

「……………」

青神は無口のまま噴水から出てくる。

「ったく…水浸しになって。家に帰ったらひとまず風呂に入れよ」

「ふろ」？

「またかよ。暖かいお湯で水浴びをするんだ」

「湯浴み？それなら好きね。しっかりと私の背中を流しなさいよ」

「はいはい…はい？」

「その間抜けな返事はなに？いいから早く帰りなさいよ。早く湯浴みがしたい」

聞き違いでなければ背中を流せと言った。つまりは俺と一緒に風呂に入らなければならないと。

「青神！ちよつと待て」

「大空の言うことは聞かないわ。そもそも聞く意味が無い」

「趣旨が変わってないか？それより俺が背中を流すのか？」

「当然だろう。私は今まで1人で湯浴みをしたことはない」

「左様ですか」

つまりはお嬢様だと。この調子だとこいつに家事は望めなさそうだ。

「さあ、着いたぞ。湯浴みの準備を早く。火を焚けー」

「火は使わないから落ち着け。とりあえずバスタオルは籠の中に入れてくから使え。なにかあつたら呼べ」

「そうか。ならまず湯はどこだ？」

「やっぱりそこからか」

俺はとほほと頭を下げる。ひとまず気を取り直して説明を始める。ある程度は理解したらしい。早く風呂に入りたいせいか俺がいる前で服を脱ぎ出す。慌てて脱衣所から出る。

自分が女という意識がないのか、俺を男と思ってないのか。ただの天然なのか。

まあ俺に分かることじゃないし気にしないでおう。

今日は徹夜でもして世の中ルールを教え込まないといけないみたいだな。

そんなことを思いながらカレーの調理に取りかかる。ひとまず米を炊き次に野菜を切り、炒めて、鍋に投入。火が通つりルウを入れた所でトラブルメーカーが投入。

「それが”かれえ”？なんか嫌な色をしてるわね」

「お前服は…？」

青神は服を着てなかった。こうして見ると美少女に見えていたのが一変して女性として見えてくる。つまりは凹凸が激しい体をしているという話だ。

「服？濡れているから着るわけ無いわよ。それが？」

「隠さないのか？」

「……………あ。きゃーっ！！」

殴られた。それも壁にめり込まんばかりの勢いで吹っ飛ばされた。「か、神の裸を見るとはなんたる愚弄、なんたる屈辱！かくなる上は大空ごと吹き飛ばしてくれる！」

「ちょ、待った待った！カレーが焦げる！」

「そ、それは少し困る。私はその”かれえ”とやらが楽しみだからな。決して私にも非があつたと認めた訳じゃないの！」

カレーを作った人へ、ありがとうの気持ちを伝えたい。そして青神、分かってて消滅させようとしやがったな。

「まあいい、じゃあ早速食べるか！これ着てさっさとテーブルに座れ」

「これはなに？」

「ジャージだ。この時代の楽な服。それがジャージだ。早く着ないと湯冷めするぞ」

「ふむ、そうだな」

青神はいそいそとジャージを着始める。その間は出来るだけこちら一帯が吹き飛ばないように努めながら、カレーライスの用意をする。

「準備出来たぞ。もう着替えたか？」

「なかなか着心地のいい衣服ね。もらってもいい？」

「ダメ」

「どうしてもダメなのか？」

大空アイには今この目の前の美少女が非常に可愛く見えている。もはや脳内では台詞も入れ替わっていて。

『ど、どうしても、お、大空のジャージが欲しいの。…お願いだから…』

実際は寄越せレベルなんだろうが可愛いなら仕方ない。

「分かった。お前にやる。さっさと座れ。そして食べ」

「ふむ、誉めてつかわす。なに食べるのは任せて」

「食うだけなら誰でも出来るからな」

「バレた？まあいいじゃない。こんな美少女と晚餐にありつけるのよ？ほら、私に感謝したいでしょ？」

「絶対にしねえよ。さっさと食べな」

恐る恐るスプーンに手をかけ、カレーをすくう。手を震わせながら口へと運んでいく。

俺は思わず生唾を飲む。

「う、美味しいか？」

「うむ、独特の香りがなんとも言えない。美味しい！カレーなるものがこんなに美味しいなんて知らなかったわ」

カレーの発音がまともになったのはスルーでいいのか？いいんだな？

「美味しいなら良かった。じゃあここで重大発表」

「今なら何でも許せる。安心して話していいわ」

「明日、青神はここから出てはいけません！」

「イヤだ」

「許せるんじゃないかったのかよ。神様の言葉はそんなに軽いのか？」
「だってそれじゃつまらないもの」
「ったく」

俺は大きなため息をつく。

「じゃあ、お前は一般常識を知っているのか？否、知らない！よつて外には出るな！」

「大空の側にいればいいじゃないの」

大空イヤー発動。

『大空の側にいたい。…ダメなの？』

「明日は高校の入学説明会があるんだ。絶対外せない。母さんか父さんがいれば問題なかったけど、俺しかないからな」

「なら、私が親の代わりに行けばいいじゃない」

「青神さん？あなたは自分の容姿を知ってます？この人実は俺の俺ですって言って誰が信じるか！そもそも俺の親を知ってる奴もいる！」

「なら兄弟とか親戚とかそれっぽいことを言ってごまかせばいいじゃない」

「そこまで言ってまで着いて来たいのか？」

「……………」

「なんなんだよ！」

「行きたい。ここにいても暇だしね」

「仕方ねえか…」

はい。強行突破されました。というか今日何回強行突破されたんだ俺。弱すぎだろう。

「とにかく目立った行動はとるんじゃない！いいいな？」

「承知した。カレーおかわりしてもいいの？」

「食えるだけ食べばいい」

「じゃあ、もう一杯」

俺は立ち上がりカレーのおかわりを入れる。

風呂に入って夕飯食べて青神は俺のとなりで可愛い寝息をたて

て寝ている。

大人びても子供っぽくも見える彼女は見た目だけなら年も俺とあんまり変わらなく見えるだろう。しかし、神様だ。年齢なんて知ったこっちゃない。でも普通にしたらただの女の子。なら守るのが男なのか…な。

なんて思いつつ青神を母さんの部屋のベッドへと運ぶ。

「ったく。本当に神様なんだかな」

実際どうでもいいはずの疑問を少し冗談感覚で考えながら俺は眠りについた。

神様導く一目惚れ（エンカウンター）

「おい、準備は出来たのか？入学説明会終わっちまうぞ」

「後少し待ってて！」

朝起きて夢でした。というオチは存在しなかったことは伝えておこう。

代わりに朝起きると美少女が起こしに来るという素敵なフラグイベントが発生はしたが。だからと言って、別に幼なじみでも妹でもない神様。しかも一言目から、「お腹空いた」だ。

こいつはこればかりしか言わないのか。神様って飯食わせてもらってないのか？

などと暫し回想にふけっていると青神は準備が出来たようで部屋から出てくる。

青神が着てきたのは母さんの着れなくなった服。しかしながら母さんの服も着る人で変わるもんなんだな。と母親と目の前の美少女を比べてしまう。

「どう？似合ってるでしょ？見てもいいのよ？お金は取らないから」

「似合ってる、似合ってる。さあ行くぞ」

「あ、適当に答えたわね？そう、ならこっちにも考えが…」

「つつい見とれてしまうほど似合っています！」

「えっ？ま、まあ、それならいいのよ。行きましょう」

「なんだよ褒めたのに「え？」って」

「意外だったのよ。大空が褒めるなんて思わなかったから」

「昨日会ったばかりの奴の何を知ってるんだ？さあ行くぞ。本当に遅刻しちまう」

「会ったばかりの奴ね…」

「どうした？走るぞ」

「焦らないで行けばいいじゃないの。時間はまだあるわよ」

「ねえよ！徒歩20分の道のりに行くのに関わらず説明会が始まる

「まで15分だ！」

「仕方ないわね。多少は私も責任を感じないこともないから少し手伝ってあげる」

おい、こいつは今度は何をしようとしてる？

「いい？一瞬だから」

「何が一瞬なん…うおっ！」

本当に一瞬だった。何が言われても困る。ただ、いつの間にか春に俺が通うことになる私立輝世名高校に着いていた。

「何をした…」

「ふむ、久しぶりに力を使ったから心配だったけど…大丈夫そうね」「あのー、心配な力を使いやがったんですか？」

「気にしないの。それにここで立っていたら人の邪魔になるわよ」「青神が言うことは間違ってる。しかし、無性に腹がたつのはどういう不思議なんだ？誰か分かたら教えてくれ。」

その時、後ろから俺の名前をバカみたいに大きな声で叫ぶ、所謂アホが近付いてきてる。

そいつは小学校からの付き合いで中学までずっと同じクラスというなんとも運命的な巡り合わせの人物だ。

正直な話、男とそんな巡り合わせでも嬉しくない。寧ろ嫌だと言うと奴は凹むからやめとくが。

そうそうこいつの名前は…

「大空！お前の横にいる美少女は誰だ！どんなフラグが立った？どんなシチュだ？あ、僕は水沢海斗みずさわかいと！よろしく」

「私は青神龍美。仲良くしてあげる」

「おい青神、そんな言い方はないだろ？」

「でもなんで、海斗とやらは喜んでいるの？」

「は？」

俺は説明に幾つか大切なことを忘れていたようだ。

こいつは変態、そしてオタクだということ。美少女だったらなんでも良いという、性癖の持ち主だということ。

さあ、これからはそれを踏まえて話そうじゃないか。

「海斗、いい加減身悶えるのを止める。ていうか後5分だ！早く入るぞ」

「龍美さあん！」

「なんだ？」

「僕と結こ…ごふっ！」

俺の右アッパーが綺麗に下腹部に炸裂。海斗の体は見事に後ろへ飛ぶ。

「なにするんだ！」

「初対面にプロポーズするような奴は飛んでよし！青神、あいつはほっというて行くぞ」

俺は青神の手を引き、説明会の会場である、体育館へと走っていく。

後ろからそのイベントは偽物だ！物語を進めて後から分かる偽フラグだ！と訳の分からない言葉を叫ぶ動く死体がいたような気がするが…まあ、気のせいだろう。

やっとのことだとどり着いた体育館。もう始まるのか、照明が落とされ、ステージのみ明るく照らされている。来るのが遅かったせいで席は一番後ろしか空いていなかった。このことがは青神の導きだったのかもしれない。関係ないかもしれない。でも、俺はそれによって出会えたのだ。

それは席に座って直ぐのことだった。もうすぐ説明会があるというアナウンスが入り、照明が一拳に体育館後方の扉に向けられる。その光の先には1人の人影が映る。

その人は青神とはまったく違うタイプで、後ろでしっかりと結ばれた黒髪をなびかせ、凜と立つ姿は大和撫子と呼ぶのに相応しい人物だった。

「入学生代表の陽炎灯莉かげろうあかりです」

会場が湧いた。あれだけの美人だ。目立つのも当然だろう。入学の挨拶とやらを済ませて、ペコリとお辞儀をする。

「大空、鼻の下が伸びてる。だらしない」

「え？ありがとうございます」

お辞儀をして自分の席に座ろうとしているのか、こちらへ向かってくる。さらに言えばほとんど俺に向かって。

「おとなり、失礼します」

「ああ…」

そう俺の席は一番後ろ。一番席が空いていて尚且つ直ぐに座れる場所。

生徒代表は何を思ったのか、俺の隣に座ったのだ。何はともあれ会場中の男子にブーイングの嵐。ああ、俺に友達は出来るだろうか？入学早々にいじめられるのが目に見えてきた。さよなら、夢の高校生活。

「あの、大丈夫ですか？なんだか視線がとても遠い場所になっちゃってます」

「す、すまん。変な心配をかけたな。今は大丈夫だ」
未来がどうであるかは知らぬところだが。

「隣に座ったらまずかったですか？」

「そういう意味じゃない。座ってくれて寧ろ嬉しいといつかなんといつか」

「それなら良かった！そうだ、出来たら名前を教えてくださいよ」

「俺は天月大空。隣でもう寝息をたてているのが青神龍美。よろしくな」

「オッス！高校初めての友達です。クラスも同じなら良いですね」

オッス？急に飛び出したその言葉は彼女が使うなんて思ってもみなかった。しかしこうしてみると意外といいものかもしれない。

「あと、メアド交換しましょうよ！」

「分かった。ただ少し待ってくれ。入学早々先生に目を付けられても困る」

既に男子生徒には目を付けられてしまってるしな。

「そうですね。くすっ」

最初に受けた印象。それは少し違っていたのかもしれない。最初に見た大和撫子。近くで見ただけで友達が出来てはしゃぐ子どものように見えて。俺はその一面に惹かれていた。いや、きっと彼女に魅せられていんだろう。

俺は恋をしていた。

誰が何を言おうと恋である。一目惚れ。

「どうかしましたか？」

「い、いや！なんでも！なんでもないから！」

「ものすごい大空君の視線を感じたからビクビクしてたんですよ？」
「す、すまん」

俺は今そんな灯莉を見ていたのか？

「そうなか…ふふふ。面白いことになりそうね？お・お・ぞ・ら？」
「な、なんだよ。急に起きて何を言い出すんだよ」

「バレてないと思ってるなら大空はうつつけ者。そうね、前見たがき大将みたいな時期將軍並みよ」

それはきつと織田信長だろう、と勝手に結論づけた。

「それにしても…ふーん。最近の子には無い雰囲気の子」

「もういいだろ？お前の言いたいことは分かったから」

「大空が願うなら私が叶えてあげるわよ。最初に言っただでしょう？恋愛なら大丈夫って」

そんなことも言っただような気がするが…って

「本当か？」

「私が神だつてこと忘れてたりしない？」

いえいえ、そんな滅相な。あなた様こそ神です。キングオブ神です。とまでは決して言わないが。

「本当に神様なんだな」

「じゃあ、やるわよ？この式が終わったらきつと運命は変わる…」

…わ

両手を合わせて祈りのようなものを始めていた青神が急に俺の方に倒れる。

「大丈夫か!？」

「力を…使いすぎ…た」

「力？」

「神の力…神通力だ。今日は時間を止め…だから…な」

「いつだよ？」

「大空には瞬間移動のように感じただろう…が朝の学校へ…来るときに使った…」

時間を止めていたのかよ。そんな大それた事しなくてもよかったのに。

「それでお前は大丈夫なのかよ？」

「大丈夫…夫。すまない。願いを叶えると言ったのは私なのに…な」

「青…神さんでしたっけ？大丈夫なんですか？」

「ああ、本人がそう言うんだから大丈夫だろう」

「どうしよう…保険室ですか？説明会のことは私に任せてください。後でまた説明します」

「ありがとうございます。頼んだ」

「はい。任せてください」

突然倒れた青神を担ぎ上げ、保険室を探して歩き出す。

学校は思っていたよりは広くて保険室を探すのに手間取ってしまった。

流星にこの説明会の最中には誰もおらず。とにかく青神をベッドの上に寝かせる。

「おい、大丈夫か？」

「心配しないで。神通力も時間で回復するの」

「つたく、心配させんな」

「で…1つお知らせがあるんだけど、聞く？」

「そりゃあ聞くが…」

「願いを叶えるのは後半年待たないと無理です」

「ははは、つまりは…？」

「だから、灯莉と結ばれるのは半年後ね」

「神通力の回復ってそんなに時間がかかるのか？」

「いい？人と人を結び合わせるのとは少なくとも2人、本当に結ばれるはずだった人を含めたらもつとの人の運命を変えるの。力の量は莫大ね」

「そうかい。まあ、元々期待してなかったからいいけど。それより問題だが…お前はいつになったら帰るんだ？」

「知らない。飽きたら帰るわよ。それまで楽しませなさい」

「なんだよコイツは。」

「元気になったなら行くぞ」

「分かった。少し待て。今降り、る？」

あるうことが青神はドジっこ属性だったのか、ベッドから降りると言う行為だけでコケた。コケやがった。

コケた青神はもちろん倒れてくるわけで。俺はそれを男らしく受け止めようとするが、受験シーズンになまった体が勢いに堪えられずに2人で倒れてしまう。

「いてて…コケるなよな」

「大空もしっかりと受け止めないか！」

よく考えるとかなり際どい体制だったりする。

仰向けに倒れた俺に覆い被さる青神。人が来たらあたかもいけないうことをしてる2人に見えてこないこともない。しかもここは保険室。

「入りますよ？オッス！大空君説明会終わりましたよ。えっと…失礼しまし…」

「ええっ！？つまりは私にも入ってこいと？大空君はき、鬼畜だったんですか？」

「ややこしくするな！これはこいつがコケて偶然こうなったわけで、アクシデント！事故！2人の了承もなければどちらが襲ったわけで

もない！」

「事故に見せかけて」「ないからな？」

「アクシデントに」「いい加減にせい」

「それなら良かったです。そうそう、説明会の話、重要なところだけメモしたので渡します。では、これで本当に失礼しますね」

「何から何までありがとうな。助かったよ」

「いえいえ。学校生活が始まったらよろしくお願いしますよ？」

「ああ、俺は友達が出来なさそうだから頼むよ」

「え？」

「いや、こつちの話だ。気にしないでくれ」

真相を打ち明けたら凹むんだろつな、と心に思いながら部屋を去っていく灯莉を見送る。

「さて、俺達も帰るか？ほら、肩貸してやるから」

「そ、そんなのいらない！」

「そう言うなって。さっきもふらふらして倒れたじゃねえかよ」

「それは…」

「というわけで行くぞ」

「は、離せ！」

「気にすんなって。スーパーに寄って行かないとな。その前に昼飯か」

「離せと言ってるの！」

「ラーメンでいいか？」

「大空、人の話を聞いているのか？」

「いや、聞いてない。とりあえずラーメンだな」

「もういい。好きにすればいい」

「本当か？じゃあラーメン食いに行くぞ」

本当に話を聞いてないんだなと青神は呟く。無理やりじゃないとコイツは無茶しかねないからな。

俺は青神を担いだままラーメン屋に向かう。その道中、あいつ生徒代表と…と囁かれたり、あいつが肩を貸しているのは誰だ？など

と呟かれ、終いにはいつ襲う？などを謀られたりしていたような気がするのはきつと俺の気のせいだろう。

でも友達は出来ないんだろうな。

そんな意味珍道中をでラーメン屋にたどり着く。俺が気に入っているラーメン屋、雷神亭。ここの大將がまた良い人なんだ。

「こんにちは。大將ラーメン2つ」

「らっしやい！お？大空もとうとう女を見つけたか！めでてえ！今日はタダだ！」

否定をしようと思った矢先にタダの二文字。なかなか断れない状況になってしまい何故か天月、青神カップル誕生。

って普通ならこの辺で青神がキレルのでは？と思いましたが、まだ来ぬラーメンに期待を膨らませてボーっとしている。

「へい！お待ち！」

流石は速い安い美味いを掲げるラーメン屋。美味くて安いラーメンが速く出てくる。

その瞬間に青神は箸を取り、ものすごい勢いでラーメンをすすり出す。

そういえばカップヌードルの時もこんなだったような…

「う、美味しいか？」

「美味しい、がカップヌードルとやらの方が良かったわね」

「バカっ…」

大將にこのことが聞かれたら…と思ったが、この大將はかなりの大物。自分の都合が悪いことは聞こえないという。

「そういうことは本人の前で言わないようにしろよ」

「ふむ、そういうものなのか？ならそうするが」

その時、視界の隅に映る人物がいた。それはマウンテンと言わんばかりのラーメンと対峙する少女だった。

「制限時間30分。始め！」

その姿は荘厳だった。ラーメンを食べているだけのはずが、ついつい見とれてしまう。というかみるみるうちに減っていく。それが

ものすごい面白い。山がどんどん削られていくようで。そして少女がラーメンを食べるうちにスープ、メンマ、麺を顔にトッピングしていく様。

見とれてるうちに食べ終わってしまう。時間は裕に20分は残っている。

「ごちそうさま！」

流石の大物大将でも言葉が出ないようで少女は賞品の商品券を持つて店を出て行く。

「すごいもん見たな。あんな小さい子なのに」

「私も驚きだ」

2人で驚きの意を伝えながら店を出るとさっきのラーメン少女が立っていた。

「そこの蒼髪！」

「何か用事でも？」

「さっき店でカップヌードルのほうが美味いって言わなかったか？」

「確かに言ったが、それがどうかしたのかしら？」

「ふざけるな！私はラーメンが大っ好きだ！しかし！カップヌードルは邪道！それとこの店のラーメンを比べるとは…有り得ない！謝れ！ラーメンの神様に謝れ！」

「ふむ、ラーメンの神か…そんな神はいたかしら」

真面目に考えるなよ。とツツコミは抑える。ツツコんだらラーメン少女から怒涛のツツコミが来そうだ。

「ともかく謝れ！」

「嫌よ」

「謝れ！」

「嫌よ」

「謝れ！」

「謝りなさい」

「ごめんなさい！…ってあれ？」

「さあ、大空行きましょう。カップヌードルが分からない子どもと

喋っても楽しくないわ」

カップヌードルの味が分かる青神が大人なのかどうか、素直に謝ったラーメン少女がアホなのはさておき。

「青神も謝っとけよ」

「嫌よ」

「ったく。ごめんな？こいつ変な所意地っ張りなんだ」

「謝るなら許す。でも尻に敷かれてるのは情けないね！」

…謝ったのがバカだった。

「じゃあ、私は帰るから。また会えたらラーメンの良さを伝えてあげるから」

そう捨て台詞（？）を吐いて去っていくのだった。出来れば二度と会いたくないものだ。

「俺達も帰るぞ。最後にどっと疲れた。そういえば青神は料理とか出来るか？」

「……………帰るのだろう？さあ、行こう」

出来ないのね。まあ、不味い料理食って、倒れるという定番オチを免れただけでよしとしよう。

青龍の生態観察記（サムシング）

入学式までの一週間。これは異様に長く感じ、また忙しい期間だった。というのも青神はこの時代のことを何も知らない。1人じや生活が出来ない状況を打破しようなんて考えたのがバカだったのだと気付いたのはほんの一時間前だ。

そんなに大変かって？なら振り返っていこうか。この地獄の一週間を…

入学説明会の次の日だ。ラーメン少女に感化されてのことが朝からカップヌードルを食いたいと言う始末。俺はめんどくさくなって自分で買ってこいと言ってしまった。この後分かったのが、青神を1人外に出してはいけないことだ。

テレビを見ながら帰りの遅い青神を心配しつつ、何とかなるだろう、と楽観視していた。今なら直ぐに殴ってやりたい。ロボット青狸、タイムマシンを。なんてのは置いといて。

そろそろ時間が正午をまわる時だ。

家の電話が鳴る。家の電話と言えば携帯が普及した後うちで一切使われなくなった代物。それが鳴るということは恐る恐る受話器を取る。

「天月ですが…」

「ああ、こちら近所の交番のお巡りさんこと大護だいごです。大空君かな？」

「大護さん？」

大護さんはいろいろな訳があつて知り合いになったお巡りさんだ。いろいろつてなにか？まあ、今は青神だ。

「君の知り合いって人がカップヌードルを…」

「お店で盗んだんですか！？」

最悪の事態始動。

「いや、ちょっと違うんだ」

停止。

「僕が丁度お昼を食べようとカップヌードルを準備していたときに
なんだけど。交番に綺麗な外国の方が来たと思ってあたふたしよう
としてたら日本語がペラペラでさ！ふふ、笑っちゃうよね」

大護さんは話が脱線することと有名だ。道なんて聞いたらいつの
間にか宇宙がどうか、遺伝子がどうか、何をしたらそうなるの
か分からないような脱線をする。

「で、その外国の方はなにをしたんですか？」

「そうそう！僕のカップヌードルが半分欲しいってさ」

「すみません。そいつって蒼髪に蒼眼ですか？」

「そうだよ。とても可愛い子だね」

「すみません。人違いです」

「人違いとはなに？私のこと忘れたなんて言ったら天罰が下るわよ」

「お前が言うところにならんだろうが」

「ともかく迎えに来てちょうだい。いいね？ぷ　ぷ　」

誰かあいつに神罰を。本気でそう思った。

そのあと迎えに行ったのだが、大護さんにカップヌードルをもら
い、お腹いっぱいになり、寝ていた。

「大護さん、こいつ置いていっていいかな？」

「お巡りさんでも結構こまるからね？やめて欲しい」

しぶしぶ承諾。その後起きるまで待ち、いつの間にか日は暮れ始
めて夕暮れ時。もちろん昼飯は食べていなかった。帰って残りの力
レ－を温めて食べる。青神に振り回されて貴重な春休みの1日を消
費した。そうしみじみ思う1日だった。

これで1日目が終わりだ。

こいつに家事をやらせてはいけないと知った2日目。

朝、幼なじみ風では無いにしろ女の子が起こしてくれるのは嬉し
いことだ。起こしてくれるのが”美”がつく”少女”なら尚更だ。
例えば起こす言葉が”お腹空いた”でもだ。

まあ、そんな朝の話は置いておいて。

カレーならではの三食連続という（食べてない所を気にしないなら四食）所行を成し遂げたため、カレーも底を突いた。

仕方なく、夕飯を作ろうとした時に思いついてしまった。

青神に作らせようと。

天才は時に異常と呼ばれるという。ならばこれも実は無謀に見えてかなりいけるのではないのか？

多少の味は目を瞑ろうではないか。毎日やればなんとか食べられる物にはなるだろう。

これを天才と言うのは愚かではなかった。というよりも青神の料理の腕前をかなり甘く見ていた。

実際に作らせてみれば手つきは器用だし、指を切るなんてドジはしない。ましてや塩と砂糖を間違えました。なんてオチもないまま料理は進んでいた。途中までは。

そう、手順は一見、肉じゃが、完成品も見た目は肉じゃがのはずなのに完成目前にして、肉じゃがが肉じゃが？になっていた。

言葉に表せない。ただ、俺の第六感か何かが忠告をしてきたのだ。禍々しいオーラを放っていると。

その時の俺が青神に1つ言った言葉がある。それは「悪かった」

そう謝罪の言葉。次に続いた言葉は人には向き不向きがあるんだだから気にすんなよ。ほら、洗濯とかはどうだ？という慰めの気持ち120%の言葉だ。

それに洗濯の時に青神の下着を洗うのはやはり気が引ける。俺の知り合いにはむしろ喜ぶ奴もいそうな気がしたが気にしないことに。そのあと洗濯をしたが、洗剤の量を間違えたわけでもないのに洗濯機から泡が溢れるという怪奇現象。

掃除機を使えば吸い込みが悪くなり急に吸えなくなる。

きつと運命だ。そう感じた。ってか有り得ねえ。何やったらそうなるのか分かる奴、もしくは同じ現象が起きる奴がいたら教えて欲

しい。

ついでだが肉じゃがを少し味見したが気が付いたら朝で青神に起こされていた。

そんなこんなで2日目は終わっていた。

肉じゃが騒動？ いやどうでもいいけど。とにかく目を覚ましたのはいいが、既に時間は1時を過ぎていた。

ふと気が付いてキッチンに行くとか何かが発発でもしたのではないかと疑う惨事。

青神曰わくカップヌードルのためお湯を沸かそうと鍋に水を入れたらなっとならしい。

その後青神にはキッチン入室禁止令が出ることになる。あ、ここテスト出ません。

そんなことはさておき、三日目ともなり、青神が惨事を起こさないようにキッチン入室禁止にしたことは有効だった。

だった。

確かに三日目にはこの後何もなかった。問題は四日目。

食材が尽きようとしていたため、スーパーへ。

そこには蒼髪の大きい子供がいたのだった。

カートを押して走り回り、試食品を食べ漁ったりとまあそんな感じ。正直いい加減に大人しくして欲くなった時にガチャガチャの機械に手を突っ込む。

すいません。この人は知らない人です。信じてください。ああ、その青い方。僕に手を降らないで。

とまあものすごい勢いで恥をかけた四日目。

五日目。この負の連鎖を食い止めんと俺は家から出ないことに。そんなものは意味がなかった。青神は自分からハプニングとかそんなのを集めているような気がするよ。

青神がいきなりテレビに怒り出したと思ったら、外から犬が入り込んできた。多分青神関係ないです。

六日目。そろそろネタも切れてくる頃だろうと踏んでいたが間違

いでした。

庭で何かをしてると思えば蜂をつついていた。するとどうだろう？ 家の中に入り、俺を襲ってくるではないか。青神はどうした。

なんて文句も言えないまま蜂が家からでるまで走り続けた俺だった。

7日目。家のインターホンが鳴り、訪問販売だと分かり、無視：だったはず。しかし、若干一名がものすごい興味を示し、販売員の方を家に迎え入れるという事態。

こんな一週間だった。一週間を青神に費やしてしまった。そんな俺から一言。

春休みはどこへ行った？

さて、何故青神に時間を費やしたことを後悔しているのかといえば。明日は入学式。そう思い支度をしていると封筒から面白い冊子が幾つか。

春休みの課題という面白いタイトルで、なんと自分で文章を書いたりするといふのだから尚更面白い。

「やってられるかー！」

「いきなりどうしたの？ 騒いだら神罰よ。神罰」

「前も言ったがシャレになんねえって。それどころじゃねえ！ 春休みの課題なんてもんがああ！」

大空落胆。もう僕は死にましよう。冗談はさておき、いきなり課題を忘れたら先生に目をつけられ、俺の学校生活はいろんな意味で落ち着いたものに…

「青神、手伝え！ 国語ならやれるはずだ！」

「仕方のない奴だ。どれ、見せて？…こ、この程度なら…漢字なら…」

「それだけでいいからやってくれ」

こうして俺の春休み課題大騒動は始まった。

次々とやってくる数学の文字式、関数という弾幕をさけながら英語の長文に赤ペン攻撃。戦いは過酷を極め、そして長期に渡って行

われた。

終わったのは深夜3時。これだと学校で寝て、最終的に先生に目をつけられことは変わらないような気がしなくてもないがもういい。寝よう。

そして俺の春休みは不幸やら惨事やらのみで構成されていったのだった。

右往左往の夢生活（スクールライフ）

そして入学式。私立方^{ほしほう}応^{おう}高校までの道のりには幾つもの桜が咲き乱れ、まるで俺の初登校を迎えているように見え、また登校初日に遅刻しそうな俺をあざ笑うかのようにも見える。そう、まさしく、今、現在、ナウ、今マジピンチ。

説明会の時は見れなかった通学路を見ながら登校なんてものをしてる場合ではないのだが、この状況で同じ高校の制服のはずの女子が何故か座って花見中。よって声をかけた。かけようとしたのではなく、”かけた”だ。

既に過去形、つい、さっき、前、最近、近々。最後のは違うが。同じ学年カラーの緑。間違はなく同じ学年。先輩を見ていたなんていうミスは犯してないはずだ。

「あの…？」

めげずにリトライ。俺のチャレンジ精神に火が灯る。

「すみませーん！…寝てるよこの人！」

意気消沈。俺に灯った火も見事に消えてしまった。

そうこうしている間に明らかに入学式の始まりを示してる鐘が鳴る。

「ごめん、置いていきます」

そう言い残して体育館へとダッシュをかける。

行間

大空がいなくなった家には青神が1人寝ていた。ふと目が覚め、お腹が空いていることに気付く。

「大空はどこに行ったの？私はいったい？朝ご飯はどうしたらいいのかしら？」

悩んだ末に思いついた青神は家の外に飛び出す。飛び出してから

気付き、鍵をかける。そして昼間のおばちゃんうつく街中へと消えていく。というよりその姿を現していく。

やっとの思いでたどり着いた体育館。例のとおり、列の一番後ろの席へと座る。実際この席が誰の席かは不明だ。

「そこは先生の席ですよ？体育館にギリギリ入場の新入生君？」

「ええつと先生さんっていうの？珍しい名前だね」

「素敵な冗談ですことで。あなたのお名前は？」

「大空です……」

「大空……私のクラスね。あなたも珍しい名前だから覚えてるわよ。ついでに私の名前は芳川咲子よしかわさくこよろしく、ね」

「素敵な笑顔で……ははは」

初日から目をつけられましたか？なにか？もういやだ。それだけ言わせて欲しい。

芳川先生に促されるまま俺は一番前へ。天月はあるから始まる名字だ。小中学校から俺は名簿番号1番という宿命みたいなものを背負ってきたのだからもう慣れっこだ。

舞台の上では校長らしき人物が立ち、長々と話を続けてる。なんというか、とても恰幅がいい体をしていて、いかにも校長といった風貌で、いつかカツラ疑惑が浮き出るのではないかというぐらい黒毛がふさふさである。

まあ、それは後々分かるだろうことで。さてそろそろ上まぶたが重くなってきた。理由なら分かっている。睡眠不足に先ほどのダッシュ。受験の運動不足も祟って本格的に疲れているようだ。

頭が前後にガクンと揺れる。眠気がピークに来るとなるそれだ。

再び頭がガクンと揺れる。横に揺れる。……横？

「オッス、寝坊助君。起きてなきゃだめだよ」

「ああ、すまん」

横の席の人が俺を起こそうと揺らしていたらしい。

この口癖のようなオッス。どこかで聞いた気がする。はて、どこかで聞いたのか。

「灯莉か？」

「正解！同じクラスだと思ったらいないからビックリしてたんだよ」

「ちよつと寝坊してな…」

灯莉は軽くくすみ笑いをしてから言う。この仕草を見ていると何となく落ち着く。

「確か、説明会の日もそうだったよね」

「まあな。一応そうだな」

「一応？まあいいや。同じクラスよろしくね」

「こちらこそ」

この瞬間俺は自分の脳を覚醒させる。背後からただならぬ殺気が送られてくるのである。

「ま、また後でな…」

そう言って視線を校長に戻し、式の続きを行う。

やはり、友達が出来るか…不安になってきた。

そんな俺の不安はそっちのけで式は終わりを告げ、教室へと移動。そこには中学で見なかった顔ぶりばかり。それもそのはず。同じ中学の奴は海斗しかないのだから。

なかなか話かけられないのは誰もが同じで自分の席に座って大人しくしている状態だ。

式の灯莉の席からして隣なのではと期待もしたが、窓側に男子、廊下側に女子とぱっくり割れているため都合よくはいかなかった。

そんな誰もが沈黙を築く中、教室のドアを開けたのは、芳川咲子。推定30才の眼鏡女教師。こうしてみると意外に美人かもしれないと思っただけではないようだ。周りの男子生徒から聞こえない歓喜の声が聞こえてくる。この歓喜の声は男子にしか聞こえない周波数のはずである。

とまあ、自分の年齢以外の自己紹介をあらかじめ終え、一つだけ、

と芳川咲子（約30才）は言い放つ。

「この学校の行事の優秀成績クラスには毎回素敵な贈り物がある。お前達に学力成績は期待しない。だから私は…行事のみに力を入れる！」

よく分かんないが景品が出るらしい。それが欲しいらしい。つまりは勉強しなくてもいいということ？

クラスではよく分かんないまま芳川咲子（30才でいいや）に拍手が送られる。きっと30才にしか聞こえない周波数で歓喜の声も聞こえてるはずだ。俺は若いから推測の域を脱しないんだけど。

その後芳川咲子（三十路）はなにかアクションを起こすこともないまま、役員決めへと入り、俺は文化委員という、やること不明な職業を選んだ。というよりは選ばされた。じゃんけんに負け続けた結果だ。ダ マ神殿に行っても転職は出来なさそうだ。ちなみに灯莉は説明会の時に目立ちまくったのでクラス委員に推薦。そのままクラス委員に一直線であった。

そんな感じで12時には放課後となり、灯莉が俺の方に飛んでくる。

「同じクラスだよ！これって運命とかかもね」

運命…ね。その台詞が嬉しいはずなのに周りの視線が痛いため、素直に喜ぶことが出来ない。

「ああ！今日は早く帰ってきてって言われてたんだっ！そういうことだからまたね」

そう言って手を振りながら走っていつてしまった。

残った俺は3人の男子生徒に囲まれていた。もちろん俺は覚悟決めた。

「どうやって仲良くなったんだ！」

「俺達にも紹介してくれ」

「メアド！メアド！」

「もう師匠と呼ばせてくれ」

「それじゃおかしいだろ？ここはもう…」

「「「番長で」「」」

「なんですと？」

理解出来なかった。したくなかったのかもしれない。

「いや…もう番長でしょ」

「そうに決まってる」

というわけで俺はこのクラスの番長となりました。別に強いわけではない。ただ灯莉と仲良くなった、それだけ。

「あのさ、出来れば止めてほしいんだが」

「止めません！」

「番長」

「分かった。分かったから。とりあえず帰らしてくれ」

「番長のお帰りだ」

「道を開ける！」

「「「お勤めお疲れ様です！」」」

俺の高校生活はどこかで足を踏み外し、階段の一番下まで転がり落ちていった。

多分子分になった、もしくはなってしまった3人に見送られ帰宅。疲れがどつと出てソファの上で一段落。しかし、大切なことを忘れていたのではないか。それとも、忘れていたかったことかもしれない。

「青神がいねえ…」

悲劇再来の予感。

そして電話が鳴る。

予感的中。

恐る恐る受話器を取る。

「もしもし？大空君？青神ちゃんがまた来てるんだけど引き取りに来てくれないかな？」

「あーはい。出来れば始末してください」

「ま、とにかく取りに来て。じゃあ」

俺は1つの予想を立てつつ交番に向かう。その予想。それは…

「青神！また大護さんのカップヌードル食ったろ！」

「美味しくいただいた」

「大護さんも何か言ってやってください」

「そうだね。そもそもカップヌードルというのは宇宙食でね？それが市販されるまでの道のりと言ったら万里の長城ほどこ。そうそう、万里の長城は北方の人から守る1つの城塞で…」

「ストップ！止めて！もういいです」

「そうかい？とにかく僕が言いたいのは青神ちゃんを連れて行ってくれるかなってこと。ちなみに青神ちゃんていうのは名字の青神と蒼い髪を掛けたんだ。これは古文における掛詞という技法で…」

「連れて行きます！今すぐ行きます」

「もう行くの？もう少しゆっくり寝ていても…」

「習慣になってる！？いいから行くぞ」

「また来るから。カップヌードルを用意してなさい」

「またね」

その後寄り道もせずに帰宅。そして青神反省会開始。

「なんで家から出た？」

「朝ご飯がなかった。私はお腹が空いていたの。だから食べ物を探しに行った」

「それに関してだが朝ご飯はトーストを焼けと言ったはずなんだが」

「そもそもトーストとはなんなの？」

そこから青神朝ご飯レクチャーが始まった。爆発癖（？）がある青神でもこれはなんとかなり、はれて青神は朝食当番に認定されたのだった。

「それで、学校はどうだったの？楽しかった？」

「そうだな、つまらなかつたって言ったら嘘になるけど、とりあえずは大変だったかな。特に…」

今日学校で起きたことあったことを青神に話していく。青神は一切口を挟まず、ただ俺の話に会釈をしていた。

「…とまあこんな感じだな」

「学校の話をする大空はなんか楽しそうね。決めた、私も明日から学校に行くわ」

「そんなこと出来るわけねえだろ」

「出来るわよ？私は神様。出来ないことは無いのよ」

「考えてみる。新学年早々に転校なんてのは違和感ありまくりだろ」

「留学生とでもしとけばなんとかなるわよ。幸い私はこの蒼髪。外国人に見えるわよ」

「じゃあ、英語は分かるのか？そもそも元から蒼髪の人間なんてもんはいねえ」

「なんとかなるわよ。話は聞いてた？私に不可能はないの」

「じゃあ見せてもおうか？その力を」

「いいわよ。待ってなさい」

そう言うとき青神は家の外へ飛び出していった。

普通に考えたら無理だろう。新学年始まったばかりというのもあるが、あいつが留学生というのにも無理がある。つか、入学説明会の時、俺の親戚として来てなかったか？

灯莉とかにはなんと言うつもりだ。

それ以前にあいつの入学を許可するはずがない。金もない、学もない。そんなやつが入学出来てたまるか。

俺が青神の入学を嫌がっているのかって？分かるだろ？間違いなく面倒くさいことになるに決まってる。断定の意味を重複させる程に確信を持たせる。先週だけでも懲りた。出来れば出て行ってもらいたいくらいなのに。

そんな俺の苦悩を嘲笑うかのように青神はニコニコで帰ってきた。満面の笑みを見ていたら分かるのだが一応聞いてみることにする。この笑みを可愛いとか思ったのは間違いである。しかし、帰ってきた返事は本当らしい。いや、間違いであって欲しい。

「明日、一緒に登校するわ」

「面倒くさいことになっちゃった。どうやったら入学出来たんだ？」
「私は神様よ？その存在の力は周りの人達に影響を与える程のもの。」

その存在の力を使えばすぐだったの」

「ソレハドウィウコトデス力？」

「大空に分かるように言うなら……そうね、例えば今の時代の大統領。近くにいるだけですごい何かを感じるでしょ？」

「会ったことないのに知ってるわけねえだろ」

「とにかく大空の周りに1人偉い人がいます。この人がこれをやれって言ったらその人の言うことを聞いちゃう。そんな感じのこと」「ていうことはお前が入学したい！って言うだけで入学許可？」

「そう。あの校長、結構、気が滅入ってるわね。こんな私の存在の力に負けちゃって」

「どういうことだ？」

「あ……えと、校長はね？きつと上の人とかに気を削られてるのねってこと」

俺が聞きたいのは校長の気が滅入ってる、の後だったのだが正直そんなことはない。

「本当に明日から学校に来るつもりか？」

「もちろん」

俺は床に頭を押し付ける。やってられるか。明日から面倒事が増える。ただでさえ平凡という名の日常に見放されてきているに、追い討ちをかけられているらしい。俺って奴はつくづく運の無い奴だな。

「設定は昨日まで風邪をひいていた留学生。日本人かぶれの両親に育てられたので日本人学校に通わされ日本語しか話せずに今までを生活。高校生にもなるのだから自分1人で生きろ、と言う両親に愛想を尽かして留学してきた、だからね？」

「だからね？じゃねえ！しかも自分1人で生きろと言う親に愛想尽かしてホームステイ？本末転倒も甚だしいじゃねえかこんなにやろう！」

「何をキレてるの？とにかく制服とかも貰ってきたし抜かりは無いわね。明日から学校に行くわよ！」

はしゃいで踊る青神の姿を見ていたら、まんざら一緒の学校生活もいいのかもと、思ったのは気の迷いなんだろう。

そして問題の翌日の朝。

朝食当番の仕事をすっかりと果たした青神はトーストとサラダ、ハムエッグという”料理”を完成させていた。トーストの成功確率は1/10。サラダなのに1/5。ハムエッグに至っては卵を2パック使って1つの完成率。それを成功させたのだから驚きを隠せない。神様だけに神業。きつと座布団を一枚持ってきてもらえるだろう。

「青神、これを全部お前がやったのか？」

「ええ、そうよ」

その時俺は気付いてしまったのだ。奥のキッチンから見える失敗の痕跡に。

「ったく、意地張ってる場合かよ？片付けはしつかりしとけよ？」

「な、なんの話だか、さつつぱり分らないわね」

「そうかい。だったら早く食べよう。冷めちまう」

「そうしましょ」

この日の朝食は俺の記憶に強く深く刻まれた。

明らかに調味料を間違えたハムエッグを食べたこと。それを無理して上手いと言う俺に自分の分も差し出して俺の食べるところを子供のように笑ってる青神の顔。

出発の時、説明会の時とでは明らかに違うこと。青神が制服を着ている。

「どう？この制服は私に似合っている？」

「お前中心かよ！でも、似合ってると思う」

「そ、そう？」

「っていつかいつも青のドレスみたいなのだからな。新鮮っていうの？」

「はあ、大空はれでえに対する接し方を知らないのね」

「レディだ。れ、で、い」

「そうレディに対する接し方を知らないの」

「そうか？」

「そう。だから灯莉にも嫌われること間違いなし」

「はうわっ!？」

「それどころか同じクラスにいることすら煙たがられるに決まってるの。可愛そうな大空」

「ぐおっ!」

次々と言葉のナイフが突き刺さる。これが素直に褒めて欲しかったのに褒められなかった青神の怒りと気付くことはなかった。

「レディに対する接し方を知らないのが悪いのよ」

そうこうしてけ棘どころか鋼のナイフのような言葉を浴びせられ、ピクピクしてる俺を見て充分楽しんだ青神は学校に行きたくて仕方ないらしい。

まだ弱っている心と体をなんとか立ち直して学校へと向かうことにした。

登校風景。それは桜舞う坂をたくさん生徒が歩いている風景。

一年生らしき人はまだ友達もいないせいか、1人で歩いている様子が目立ち、上級生は笑いながら話をしている。それが登校風景。もう一度言う。それが”普通”の登校風景。

決して後ろから「番長」とか「今日はどこを攻めるんですか？」とか言われるのは”普通”ではない。そしてこんな”異常”を俺は求めた記憶はない。

「大空はなかなか面白い友達がいるみたいね」

青神はクスクスと笑う。この際可愛いとかは本当にどうでもいい。

「なんとかならないのか？」

「知らないわよ。大空が何かやったんじゃないの？」

「そりゃそうなんだろうけどさ。別になにかやったわけじゃないかな？」

「番長！新しい女っすか？くそうっ！流石番長！痺れる憧れるう！」

「いい加減止めてくれないか？番長と呼ばれたらあからさまな勘違いを招くだろ」

「でも番長は」

「どこまで行っても」

「俺達の」

「『番長です！』」

ああ、もう、諦めた。

こんな奴らにかまっていると間違いなく遅刻になる。そう確信した俺は登校風景に混じろうと必死に登校してみる。

「オッス！」

「またか？いい加減にしろ…って」

そう灯莉だった。

「嫌だったんだ。うつとうしいとか思ってた？そうだね。もう近付かないから。青神ちゃんと幸せになるんだよ？」

「ちょ、待つて…」

灯莉はそのまま走って校舎に入っていく。

「あら。私の言ったことが本当になっちゃったわね」

「はあつ。なんて言えば良いんだ？」

「レディに対する接し方を学ぶには良い機会ね。まあ、頑張りなさい」

「お前は手伝つては…くれませんね」

青神のあからさまに嫌そうな顔を見て心が折れました。ていうかそんな顔しなくても。

朝っぱらから精神的に大ダメージを受けながら登校する俺であった。

教室に入った俺は本格的に凹んでいた。

一目惚れの女の子と勘違いのすれ違い。

視界の隅に映る灯莉は近くの女の子としゃべっている。なんだか男側と女側の間にはバリアというかマジックミラー的なものが張つてあるのだろ。こちらから見えても向こうから見えない。そんな

感じ。

いつそのこと、このまま学校をバツクレたい。むしろ転校を考える。

そんな鬱モード突入中の番長に話しかけてくる勇者は存在した。

「ねえねえ大空だっけ？昨日とはまた違う凹み方をしてるね。今日は何があつたんだい？」

一つ感じたことを言っておこう。この男は人の不幸を楽しむような奴だ。俺に不幸を尋ねながらにつこにこしてる奴はそういう奴に決まっている。

「今日は何があつた？もしかして陽炎さん？」

訂正。こいつは人の不幸を分かってていじくるのが生きがいのよ
うな奴だ。

「ご名答？当たった？その顔が全てを物語っている。ああ、何が
何がそうしたんだい？」

「ちよつとした行き違いだ。それ以外のなんでもねえ」

「本当？例えば番長、番長としつこく言ってくる三人だと思って何
かを言ったら陽炎さんだったとか」

「お前性格悪いだろ」

「そんなことはないよ。ちなみにお前ではなく寺屋守和だからよろ
しく」
てらやもりかず

「守和とか。早く自分の席に座らないと三十路がキレル」

「三十路…なるほどね」

「あなた達は変わったジョークが好きなのかしら？それとも廊下に
出てるのか？職員室か？ああ？」

「先生口調が変わってる…」

「知ったことか！さっさと廊下に立て！その後職員室だ！」

正直恐ろしい。それはこの現場を目撃した人達全員が頷くだろう
感想だった。

またこの時クラスの中に1つ掟が定められた。

一、担任を怒らせるべからず

この担任教師芳川咲子の豹変ぶりは語り継がれることとなる。

ちなみに職員室に呼び出された俺と守和は先生の年齢について1時間語られた。芳川咲子は未だ25歳。先生になってまだ日が浅いらしかった。まあ、それを素直に信じるようなバカではないのが俺。守和も分かっているらしく、何を考えているのか分からない笑みを続けている。きっと面白いとかなんとか思っているんだろう。

朝っぱらから踏んだり蹴ったりなのはこの際気にしないことにした。

というよりそうせざるを得なかった。よくよく考えれば青神は教室にいる。なにも起こさないわけがない。

職員室を出た後、俺は急いで教室に駆けつける。

「青神！」

「どうしたの？ そんなに険しい顔をして」

「あ、いや、別に」

予想に反した行動に俺の立場はなくなった。ていうかクラスの女子の名前をいきなり叫んだりしたら明らかに怪しい。

「もしかして龍美ちゃんと大空君がデキてるって本当？」

「当たり前ツスよ」

「我らが番長なんですよ？」

「女の1人や2人造作もないんだからな！」

またこの3人。俺のスクールライフを乱すのはこの3人。

「よし、そろそろお前らの名前を聞こう」

「小林ツス。番長に名前を覚えてもらえるなんて……光栄ツス」

「中林ですよ。以後お見知りおきを」

「大林だからな。よろしくだからな」

自己紹介の順から、チビ、眼鏡、デブというなんともズッコケそうな組み合わせではあると思う。

「その林達。いい加減番長呼ばわりは止めないか？」

「嫌ツス」

「嫌ですよ」

「嫌だからな」

「もう嫌だ…」

「ねえねえ！龍美ちゃん。大空君とはデキてるの？」

「デキてる？一緒に住んではいるけれどそういうことかしら？」

「本当だったんだ！信じなくって悪かったわ。林ーズ」

「てめえらしい加減にしゃがれ！俺に恨みとかあんのか！林一同！次、番長呼ばわりしたら分かってんな？」

「はいッス！」

「はいですよ」

「はいだからな」

「で、何を分かってるんッスか？番ちょ…」「オイ、殺すぞ…？」

「分かりましたッス」

「青神」

「なにかしら？」

「順を追って説明しろ。一緒に住んでる。それだけじゃ誤解以外に生まれるとしたら」

「子供？きゃー！」

「目を不等号にする女子、少し黙ってくれ。とにかく説明をしろ。つてか、してください」

「仕方ないわね…」

これであらぬ誤解が少し解けると思った時だ。

「まず私は神…」

「オイコラ、青神。土下座の用意してこっちこい」

「嫌」

「土下座するから来てください」

「仕方ないわね」

俺はそつと耳打ちをする。

「いいか？学校で神はなし。変人とか思われたいからな」

「へんじん？そんな神はいたかしら？」

「…分かった。言い直す。変な人にしか見られない。ていうか人の格好をしてるんだから人間として振る舞え」

「分かったわ。で、土下座はどうしたの？」

「…家だな。とにかく今は人として説明してこい」

「きちんと説明はするわよ？でも絶対服従だからね？」

なぜ土下座から服従になったのかが不思議でたまらない俺であったが今は説明が優先、ということで青神をみんなのもとに行かせる。マニュアルを読むかのように淡々と台詞を述べていく青神。その様子を見ているクラスメイト。

「…というわけなの」

「ぐおー！感動したツス！やっぱり番長に着いてくツス！」

「番長言うな」

「番長ですよ」

「番長だからな」

「番長よね？天月君」

「番長なんかだったの？哀れね、大空」

「哀れみを受けるとは思わなかった。つか林一同いい加減にしやがれ。でないと視界に入ること許さねえ」

「はいツス！」

「はいですよ」

「はいだからな」

「そもそもどこが感動だ？言ってみろ」

「全部ツス！ばんち…じゃなく天月さんの全部ツス！」

「ホームステイを無期で行うなんてすごいですよ」

「そもそも青神さんの境遇から涙もんだからな」

「ここからよね？愛のストーリーが始まるのは」

「よね」

頭が痛い。とりあえず殴っていいか？あのとってつけたような話に騙されるのか？それでいいのか、お前ら？

「そついうわけ。とにかく私は普通の人だからよろしく」

「で、だ。貴様ら。いつになったらホームルームを始めればいいんだ？」

「えと…優しい先生はいづこへ？」

「悪い生徒が更正したらかな？さあて、誰からしばかれないんだあ？」

「こいつ元ヤンか？などとピンチの中悠長な考えをばびこらせている時。」

「先生、ホームルームを始めましょう。時間が無駄になっています」

「そうね。陽炎さんが言うならそうしましょう。さあ、ホームルームを始めましょう！」

こうしてみると灯莉はやっぱ優等生なんだと実感する。あんなに軽いノリの灯莉が嘘のように思われてくる。

ともかく、灯莉の手助け？により九死に一生を得た林一同、目が不等号になる女子（今も半泣きのため不等号）2人、青神と俺、なぜか途中でこそそと入ってきた守和だった。

その時灯莉と目が合う。朝の事があってから今日は一回も会話はしていない。そんな彼女が俺にアイコンタクトを送ってくる。俺は必死に受け止める。

所詮はアイコンタクト。いくら必死に受け止めても所詮はアイコンタクト。

意味は一切伝わってこないのだった。

「もう！アイコンタクトしっかり拾ってよ！」

「そんなこと言われましてね…」

そして1日の授業…といっても新学期早々なので1日中ホームルームなのだが。そのホームルームが全て終わりみんなが帰宅に精を出そうとしている中、自分もその流れに乗ってみるかな？などと思っただけだった。

灯莉が声を。かけてきた。

一言。ヤッホイ。

二言。怒ってる？ヤバイ？

三言。ごめんなさい。すみません。もうしません。

とまあ、三言だけ声を出していた自分に笑っている灯莉にほっとした。

そして今に至る。

「普通は拾えるよ！ね？龍美！」

「そうね。灯莉、少し試してみても良いわよ」

灯莉が青神にアイコンタクトを送り。そして返事をするかのように青神もアイコンタクトをする。

「で、内容は？」

「「今から遊びに行く」」

「聞いていいか？」

「「なに？」」

「いつからそんなに親しくなっただ？」

「今日よ？ほとんど初対面よ？今日に決まってるじゃない。大空はアホ？アホなのね」

「アホ言うな。で、2人仲良く遊びに行く、と。青神、金無いだら？ちよつと待て二千なら今持つて…」

「待つのは大空君です。今から行くのは街でもなんでもありません。強いて言うなら住宅街です」

「簡単に言うなら私は家に帰るわよ」

家に来ると？

「待つのはそつちだ。どうしたらそんな話になっただ？間違っている。間違いない間違っている」

「ややこしいですね…。とにかく行けばわかりますよ。ささ、行きましよ、行きましよ」

ノーと言えない日本人。そして俺は日本人。しかし！俺は言う！ノーと言ってみせる。

「の…」「行きたいの」

黒く澄んだ瞳を潤ませる。

日本人関係なし。俺は男です。これは反則。レッドカードです。

「僕も行ってみたいの」

俺を正気に戻したのは海斗の気持ちの悪い一言だった。

「去ね」

一言放ち、海斗を沈める。

「とにかく今日はダメ。また今度にしよう」

「仕方ないわね。灯莉、それじゃ待たね」

「龍美、青神君と…誰かな？待たねえー」

例によってあつという間に教室から姿を消す。

「さて俺らも帰るか」

「そうね」

「じゃな海斗」

「出番短っ。ぐすん、バイバイ」

各自帰宅へと精を出すのであった。

発進無機物生命体（ロボット）

それは入学して一週間が経つというところだろうか。

クラスに知り合いもなく、少し寂しかったりしてナーバスになるけれどそんなことで凹んでる場合じゃない。

今の状況を整理しなくては

僕、水沢海斗の歩く道の前に美少女が倒れている。

何のフラグだ？これはもしかし結構ムフフなフラグでは？この後の展開を妄想していると少女が言葉を発する。

「あ、あ、ああああ！」

「ひえええっ！」

なんだ！なんだ？なんなんだ！？

「機能停止します」

「はい？」

何がなんだか分からない。

ともかくこんな場所でおどしていても怪しいだけなので自分の家に少女を連れて行くことに。

腕を肩にまわし、彼女の体を持ち上げる。その時。

「重っ……。何キロあるんだ？男子でもこんなに重くないぞ」

ふとある場所に目がいく。男になくて女にある場所。

大きくて丸くて白くて柔らかそうな場所。そう胸である。確かにこの少女の胸は何をしたらそうなるのか不思議なくらいに成長している。スイカでも入ってるのではないのか？と疑いたくなるレベルだ。

勝手な解釈で納得し、彼女を持ち上げる。

家に着くまで30分もかかってしまった。

自分の非力さをひしひしと感じながら少女を見つめる。

翠の髪に透き通るような色の碧眼。服装は見たことのないピチツとしたボディースーツ。しかし、胸やら腹やらなどを露出しており、

肝心な部分が隠れておらず、大事な部分だけが隠れている。

正直な所、怪しい。

180。怪しい。

つまり半信半疑。

彼女が目覚めたら聞かなくては、と思いながら再び顔を覗き込む。その顔を見ているとなんだか怪しくても良いんじゃないのかと思っ
てしまう自分がいた。

なんて思っていた矢先。

「機能再開。安眠モードから日常モードに移行」

「えっと、そ、その、あのね？大丈夫？」

これぐらいのことしか言えなかった自分が悔しい。もっとなかったのか自分。

「大丈夫とは？至って正常です。そちらの名前を伺いたいのですがよろしいですか？」

「あ、名前、水沢海斗。それが僕の名前。君は？」「名前？私は無機物生命初号機・玄型です」

「えっと…無機物？」

「はい。私は神によって作られた対神無機物生命体初号機・玄型」

「さつきより一言何か増えてない？」

「気にしないでください。それより私はなぜここに？」

「ああ、道で寝てたから拾ってきたんだ」

「あなたはここから南の神社でお祈りをしましたか？」

「さつきから話が飛び過ぎじゃない？」

「そんなことはありません。もしあなたがお祈りをしていないと言
うならば、私がここにいない意味も、私があなたに話をする意味も、
私がここにいない意味ありません」

「ここにいない意味がないって二回も言ったね？ははは…」

「すみません。まだ言語機能に不具合が生じているようです」

「京都弁！？」

「京都弁じゃないです」

京都弁だよね？もういいか。いいのか自分？

「それより南の神社には行きはりましたか？」

「えーっと、受験の時くらいかな？合格しますようにって」

すると目の前の無機物生命体（まだ信じてないので仮）はピピピッと機械音を発する。

「確認完了しました。これより登録を開始します」

「登録って？え？ちよっ！」

気付くと僕の両肩は無機物生命体（機械音出したよ？本当にロボット！？）にがっしりと掴まれていた。

「口先約束開始」

するとおもむろに唇と唇を重ねようとしてくる。

「ちよっ！口先の意味が違っ、んっ！」

奪われた。

ファーストキス。

いや、別に悪い事ではないだろうけど、もっとシチュエーションとか大事だと思うよ？

っつか長い。

「口先約束完了。これにて海斗をマスターとして登録。今後は常に一緒に行動しますので、よろしくお願い致します、マスター」

「ああ、よろしくおね…ってなるか！なれるか！」

目の前の無機物生命体（ファーストキスの相手）は不思議そうに首を傾げる。

「なぜでしょうか？」

「なんで当たり前のようになるのかが聞きたいんですが？」

「望んだのはマスターでしょう？冬の寒い日、あなたは祈りを捧げました。その祈りを叶えるのが神の僕たる私の仕事」

「でも、高校も無事入学したから別にいいんじゃない？」

「あなたは他に彼女が欲しいと申しましたのでそれが叶えられるまでになります」

…調子に乗って願い事を増やしたのが問題だったのか。そんな自

分を反省。

「あなたに彼女が出来るかは正直怪しいですが精一杯、頑張りませう」

「また言葉がおかしくなってるよ」

「これは失礼」

この無機物生命体（でいいよ、もう）はどうやら僕の部屋に住み着くらしい。

それがこれからどう動くのだろうか。こんなフラグは立ったこともなければ、考えたこともない。

ただ1つ。

「マスター、早速彼女を作るために考えたんじゃが…」

「ぶっ、また言葉が」

毎日に飽きることはなくなりそうだ。それから僕の忙しい毎日が始まった。まず初日。

無理にでも学校に着いてこようとする無玄を止めるのに苦労する。あ、無玄っていうのは無機物生命体・玄型の略でこの無機物生命体の名前。本人はいらないなんて言うけど、それでは呼び方はどうするの？と尋ねてみたら

「ハニーもしくはお前」

というバカげた返事が返ってきたのだった。

「もちろん冗談です。マスターにそんな呼び方をされるなんて汚らわしい」

あれ？まだ言語機能に障害があるのかな？ていうか冗談を言う機能も付いてるのか。どんな無機物生命体（やっぱり人じゃねえ？）だ。

とまあ（？）なんとか学校に来るのは控えてもらったけど、家に帰ったらそれはもう大変なことに。

もちろん僕には家族がいるわけで。両親と2つ年の離れた姉がいるわけで。そんな家に不思議な無機物生命体少女がいるわけで。もちろんいらぬ誤解を生むわけです。

両親に説明をすること1時間30分。やっとの思いで説得し、外国人の行き倒れということになった。確かに行き倒れていたので嘘などではない。

問題は姉。両親と違いこの状況を面白がっているためか、なかなか説得出来ず、結果的に姉の中では出会い系の女の子ということになってしまった。

どちらにせよこの無玄はこの家での居住権を手に入れたことで食卓にはイスが1つ追加され、5人で食卓を囲むことに。ってか無機物生命体よ。有機物を摂取するんか。無機物生命体に対してツツコミを入れたい自分を必死に押さえ込む。

その後の日々は日本の一般常識を教え、片っ端から僕の彼女候補を探し、ナンパすることを止めさせた。

さすがは無機物生命体、記憶能力がかなり高いと見える。言われたことはきちんとする。しかしだな。応用力が無いにもほどがある。ナンパを止めさせたら問答無用に連れてくるわ、それを止めさせたら、明らかに詐欺な口調で変な契約をさせようとするわで大変なのだ。目的を達成するにはどんな手段もいとわないとかなんとか。

他にこんな話がある。

その日俺はいつも通りに風呂に入っていたんだ。そしたら急にドアが空くその先にはタオル一枚の無玄が立っていた。

「お背中流しましょうか？」

「……………？えゝつと、む？」

正直に言おう。出てけというか悩んでいた。だってそうだろう？目の前にあんなブツを持ってこられたら悩む。男ならみんなが悩む。だってデカいんだもん。そのせいか僕は誤ちを犯した。

「じゃ、じゃあ、お願いしようかな…」

自分でも間違っているとは分かっていた。しかし、据え膳食わねどと言うではないか。

最終的に期待を膨らませて妄想が危ない妄想まで飛んでいった時「するわけないやろ。汚らわしい。腐れマスターのくせに」

言葉が出ない。今の僕はきつと餌を待つ金魚のようになってい
だろう。

「なら、そんな格好で入ってくるなよ！」

やっと出た言葉。この言葉の意味をよく理解したらしい。

「この格好に問題が？」

それ以前にセリフに問題があったのだが確かにタオル一枚で入っ
てくるのも問題だ。

「状況把握」

そう一言呟くと無玄は出て行く。やっとゆっくり風呂に入れると
喜んだ矢先。

再びドアが開いた。把握してねえ！とツツコミを入れようとした
時だ。僕は見た。幻の果実、おっぱいを。

「格好を変えてみた」

「出て行ってくれ！」

僕の鼻血が吹き出す前に！

渋々無玄は出て行き、平和な風呂場が帰ってきた。

外からニシシ、と黒い魔王と一緒にいる顔つきの悪い犬のような
笑い方をするのを僕は聞いた。間違いなく姉の差し金である。

無玄の思考回路はこんな感じだ。

姉にけしかけられる やってみる つまらないので八つ当たり

僕の言葉で風呂場でタオル一枚の格好が可笑しいと判断 脱いだ。

こんなところだろう。

という話。

人に言われるがままの人形のような無玄。それを少し可愛くも悲
しくも思える。

僕は正座しながら湯飲みをすする無玄の頭を軽く撫でてやった。

「なんですか？急に。汚らわしいでしかないです」

どうやらこの言葉はお気に入りなのか時々意味もなく使いたくな
るらしい。そう勝手に解釈した。それに蔑む言葉が少し心地よくな
ってきた頃だ。

まあ、そこまで言われたら流石の僕も手をどかす。

「む？続けてください。マスターに拒否権はありません」

意味が分からない上に理不尽過ぎる。僕、一応マスターだよ？と分からないまま頭を撫でる。

「なんだかあったかいでござんす」

「そうですか」

もつどの言葉を信じればいいのか分からなくなった僕はとりあえず無玄の頭を撫でていることにした。

そして思う。コイツやっぱ有機物じゃない？と

球技を統べる大会（ファーストイベント）

入学式から1ヶ月だろうか。今や日差しは暖かく、冷たかった風は心地よいものになっていた。

青髪蒼眼も馴染んで…馴染んでいいのか？ともかく、美人な外国人さんがこの方応高校にはいたのだった。

そしてその美人な外国人さんは俺の家に住んでいるわけで。おかげでいらぬ誤解は飛躍に飛躍を繰り返し、いわゆる噂というものになる。それはとても恐ろしい化け物で、一緒に歩けば口笛が聞こえ、喧嘩をすれば痴話喧嘩と囁かれ…

「何をボーっとしてるの？私の話を聞かないなんていうのは…そう、神罰がくだるわよ」

ちなみにこいつは神様。神罰というのはつまり。

「ごふっ！」

青神が殴る蹴るの仕打ちをするだけだったりする。

「で、善良な一般市民に神罰を与える神様は何の話を？」

「おーっと！ボーっとしてる大空君が悪いよ。痴話喧嘩もいいけど球技大会の話し合いもしてよ？」

そしてこの痴話喧嘩と言いつつ少女こそが俺の…そのアレで。

今、俺の心は非常にショッキングなことになっている。

その心情を察して1人で笑っているのが守和。人の不幸をととても楽しそうに笑う奴。

「なんで大空はフラグが…」

ぶつぶつ呟いている変な奴は海斗。保育園からの知り合い。それ以上でも、それ以下でもない。というか変人なので近寄らないで欲しい。

「ていうか海斗。お前のクラス違うだろ」「いいじゃないか！美少女のいる所に僕はいたいんだ！分かるか？この気持ち」

「分からないから出てけ」

「ああん。殺生な」

「私をあがめなさい。そうすれば同じ次元にいることくらいは許してあげる」

「有り難き幸せ」

「話し合いは…どこに？っていうか話し合ってよ」

「いいか？話し合いをするためにこのメンバーを集めた灯莉がまず間違っていたんだ」

「なんていう…。私が全部間違っていたの？って協力する気ないの？」

「でた。必殺（有効範囲俺のみ）うるうる瞳。これをやられたら最後。俺に対抗手段はない。」

「仕方ない。で、何を話し合っただ？」

「そこからの？えっと…人数の割り振り」

「他には？」

「それだけ。みんなは何でも良いって言ったから仲良しでチームを作っちゃおうかな？なんて」

「つまり、ということは、きっと、いや、確かに、灯莉と同じチーム？」

「そ、そんなことをしてもいいのか？」

「良いの良いの。みんなくじでも良いって言ってたしね」

「良いわけないだろ？陽炎までそんなことを…」

「げ、三十路」

「そうか、陽炎はこいつの毒牙にかかって…。よし、お前を殺して私は生きる」

「なら刑務所に行け」

「冗談はさておいて」

「冗談に聞こえないのが三十路の凄いところでもある。」

「私は勉強をしなくて良いと言った。しかし、行事を蔑ろにするようなら勉強をさせてもいいぞ？そうだな、朝7時から学習会。夜7時まで学習会だな。なんとも楽しそうだ」

「…先生の要望は？」

「勝て」

ここで一つ説明をするが球技大会には上級生や先生チームも参加する。そこで勝てと？いやいや、無理だろ？

「いいか？私が考えたチームなら絶対に勝てる。1人1人の中学の体育の記録、性格、相性、全てを考慮した結果…真面目にやればフットボール以外は勝てる」

「え？フットボールは？」

「化け物がいる。だから使えない奴は全員フットボールに叩きこんでおいだ。大丈夫。ピッチャーだけは野球部だ。そいつが抑えればそこそこいける。これがメンバー票だ」

そこには1人1人に助言やらコメントやらが書き込まれ、敵の各チームに合わせた作戦までがあった。

「敵チームの情報は一体どこから？」

「くすねてきた」

全員の頭にハテナが浮かぶ。きつと三十路は頭が可笑しい。間違いない。

「とにかく、これで提出してくるんだ」

ハテナを浮かべたまま灯莉は頷いてそれを受け取る。

きつとこの球技大会は…荒れる。そう思った。

ところで最初っから最後までクスクス笑い続ける守和はなんなんだ？

結果三十路は朝7時から練習、夜7時まで練習を行わせ、チームワークをつくり俺たちは大会を迎えた。

俺と灯莉はバスケット。青神はフットボール。守和はドッジボール。

灯莉と同じだ、と喜んだのは一瞬で、バスケットは男女別らしい。

青髪がフットボールなのは中学の情報が皆無なためぶち込んだらしい。後から後悔したのは三十路だった。

とまあ、長つたらしい校長の天気の話がやっと終わり、選手宣誓。そして花火の音と共に大会が始まった。

第1試合バスケットは隣の2組と当たった。1組こと俺達は試合前のミーティングで円陣を組み、気合いを入れる。

試合開始のホイッスルが鳴らされる。よく見れば敵の中には海斗の姿が確認出来た。あいつはオタクで変態。そして運動が出来ない出来る時は女子があいつを応援した時。その時の力はこの世の全てを上回る。しかし、一回戦というのはどこも試合をやってるため、応援などいない。つまり、叩くなら今。

俺達はチームワークを生かしたパス回しで確実にボールをゴール前に運んでいく。そしてシュート。

三十路ことみそちゃん先生はバスケットのメンバーにドリブルは求めていない。パスのみだ。それだけでチーム編成をした。確かに即席チームじゃ、バスケット部員が走り回って他が着いてく密集状態になる。そこにパスが回せたら敵は前半から走りっぱなしになる。

そして前半終了時には14:38という結果だった。

来る後半、敵の走りっぱなしのメンバーが疲れ始め、足がもつれ始める。その中に1人、ゴール前に立っている男がいた。海斗だ。

後ろには翠髪碧眼の少女が立っていた。一言言いうなら誰？だが、たくさん言うならその服装はなんだ？ボディースーツか？その割には露出が高いだろ。海斗の趣味か？それなら彼女なのか？ていうか日本人？

頭の中が疑問でいっぱいの中チームメイトは確実にパスを回し、シュート。リングを確実に捉えたはずのそのボールがネットを揺らすことはなかった。

ボールはいつの間にか海斗の手に。あいつ…跳んで取りやがった。そしてホイッスルが鳴る。

そう、放物線の頂点に達し、一度落ち始めたシュートに触るのは反則なのである。

しかし、目覚めた奴を止めるのは至難の技だ。

その時、後ろのよく分からん少女が呟いた。

「…汚らしい」

その後、海斗が目覚まし活躍を見せることはなかった。

こうして、無事に勝利することができた俺達は、試合がまだ続いてるドッジボールへと向かう。ソフトボールはまだ始まったばかりらしい。

ドッジボールでは守和が素晴らしい活躍をしていた。

いつも通りクスクス笑いながら、敵のボールを吸い込むように掴んでいく。パスのボールも、他の人物を狙ったボールも。そして敵に少し耳打ちをすると敵は簡単にボールに当てられ、アウトになる。ボールを取る技術もすごいが、何を耳打ちしてるんだ？あいつの情報網の恐ろしさをひしひしと感じながら試合は1組の圧勝で終わった。

そしてソフトボール。なんか青髪がホームランを打ったらしい。

その打球の弾道はまるで龍が昇るようだったという。

野球部が無難に抑え、5対2で勝ち、俺達は無難に駒を進めていた。

その後、どのチームからも勝利の報告が入り、クラスの雰囲気は最高潮に達していた。

そしていつの間にか決勝戦まで進んでいた。恐るべし三十路パワー！。

決勝戦の前に昼休憩が入る。決勝戦は全員が見れるようになってるらしく、一試合ずつやってくれる。ちなみに俺達のクラスは既に総合優勝は決まっており、後は各競技のみとなっている。

総合優勝が決まったことでクラスの士気が更に高まる。

入学式の時の男女の壁などは存在しなかったように思えてくる。

昼食は円の状態で食べる。俺や青神、灯莉はもちろん近くに座り、自分達の結果や雑談を楽しんでいた。

「それにしてもみんなが勝ってるなんて本当に信じられないよね。あ、その卵焼き頂きっ」

「俺もびびってる。あ、卵焼き！」

「そうね、あの先生はいつたい何者なのかしら。そのカツよこしなさい」

「三十路なのにな。ああ！俺のカツ！ってかお前同じだろうが！」

「私は肉が欲しいの。分かる？大空には分からないわよね。乙女心」

「肉が欲しい乙女心なんてしるか！」

「ふふふ」

「笑いながら梅干し持っていくなああ！」

そして俺の弁当は米だけとなったのだった。

「よっ！大空！」

その時後ろから肩を叩くアホ（海斗）が。

もちろん凹んでた俺はギリギリまで気付かなくて。

急に後ろから声をかけられてしまつて。

で、弁当から手を放してしまつて。

「うわああああああ！飯がああああ！」

「あれ？今、なんかした？」

「海斗…さつさと俺に弁当なんかを買つてこい…」

「えっと…怖いオーラが出てるのはどういこと？」

「さつさとしろお！」

多分、きつと、今、俺の心の叫びがこえました。

なんとか昼食を終えた俺達はサッカーの試合を見ているのだが…

「林！ズズズズ…」

林達は超次元サッカーを行っていた。ボールから火が出たり、フエニックスが出たりと、既にデタラメにも程がある。

相手のキーパーが諦めてゴールの外にいるのは誰も責めることは出来ない。

だが、もっと恐ろしいのはドッジボール。守和は試合前の挨拶の時に何かを呟いていた。試合開始直後、敵チームの足が止まる。一歩も動くことはなかった。ただあるのは絶望に凹む人達だけ。

その光景は圧勝という言葉では済まない。そう、言うなれば地獄中にはドッジボールにトラウマを持ったという人もいたとか。

そんなある意味の伝説を生んだドッジボールが終わり、とうとう俺の試合が訪れた。

一つ。敵の外国人は反則じゃね？

身長190センチにあのヒゲは高校生じゃない。明らかに助っ人とかだろ。

そんな文句を聞いてくれるわけでもなく試合開始。

今までどおり、パス回しで戦う俺達だが…

「手が長すぎだ！」

長い腕でパスカットをされ、思うように攻撃出来ないまま23：14で前半が終わる。

パスが回らないことで、今までよりもたくさん走らなければならなかった。疲労困憊。

誰1人として口を開かずに体を休めてる。

「なあ、三十路。よく、あの怪物に勝てると思ったな？」

「貴様が三十路と言ったこと以外は大丈夫だ。今、秘密兵器を投入した」

「このクラスにあいつに勝てる奴なんて…って守和？」

そう、守和はいつものにやかな笑顔でマイケル君に近づいていく。ちなみにマイケルは今命名。

その時俺は確かに見た。あいつの笑顔が一瞬だけ悪魔になったことを。その瞬間マイケル君の膝が落ちたことを。

こいつとは仲間で良かった。そう本気で思う。

無力と化したマイケル君は敵にはならず逆転優勝という輝かしい結果となった。

同時に隣のコートの女子バスケも勝利が決まったらしい。

残すはソフトボール。あの三十路が唯一勝てないと言った種目だ。マイケル君以上の怪物がいるとなると…何が出るんだ？想像もつかない。

百聞は一見にしかず、とにかくソフトボールの試合を見守ることに。しかし、いくら見渡しても怪物なんていなければ、大リーガーなんてのもいない。ただ言えることは…青神にも対抗出きるのではないのか？という美人なナイスバディがいる。ある意味怪物みたいだが。

「その君！今ジロジロと見たでしょ？」

一瞬俺のことかと焦ったが、叱られていたのは海斗だったのでまあいい。

よく見ると目尻はつり上がっていて、どちらかといえば強面美人という感じ。

と、怪物が誰か分からないままプレイボール。

1組の守備から始まった。ピッチャーはもちろん野球部の中山君。えげつない球を投げ、他のソフトボールに出ていた野球部員を三振に抑えてきた、野球部期待のエース。中山君がいなかったらここまで来ることはなかっただろう。

立ち上がりの良い中山君は初回を三者凡退で抑える。

期待のかかる1組の攻撃。

先頭バッターは中山君。打てる人をたくさん打たせる方針らしい。中山君に対するピッチャーは…さっきの強面美人？

「はっ！」

かけ声と共に誰もが呆気をとられる豪速球を投げる強面美人がマウンドには居た。

中山君も負けてはいられず、バットを短く握り直す。

豪速球にタイミングをしっかりと合わせてバットを振った。しかし、ボールがバットに当たることはなかった。

さっきと変わらないスピードだったにも関わらず、球は落ちたのだ。

何かなんだか分からないまま中山君は三者。続く二番、三番も三振で終わる。

「なあ、三十路、あの強面美人が怪物か？」

「ええ、守和にもどうにも出来ないようなね…」

「どういうことだ？」

守和が勝てないというのはとても気になる。

「あの子は男が近づくことを嫌うのよ。だから守和が近づいたら口を開く前に蹴り飛ばされるわ」

「危ねえやつだな…」

攻守交代が終わり、打順は四番、強面美人。

中山君は後に語る。自分にとって渾身のストレートでした、と。

打球はフェンスを軽々と越えていき、ホームラン。このままいくと1人で抑えて、1人で打って勝っちゃうだろ。

そんなことを思っている時、中山君が膝から崩れ落ちた。

精神的ショックが大きすぎたらしい。

エースの不在、強面美人の最強っぷりで俺達のクラスはバラバラに。もみくちやになり結果、何故か青神がマウンドに立っていた。

「あいつは負けるために出てきたのか？」

聞こえていたのか青神がこちらを睨んでくる。なんて地獄耳だ。

期待のかかる第一球。青神の手からボールが離れた瞬間。

グラウンドが静寂に包まれ、時が止まったようになる。

青神の放った球はいつの間にかホームベースを通過していたのである。

強面美人と良い勝負、いやそれ以上かもしれない。チームに希望が見えた、そんな瞬間だった。

当たり前のように三者三振。攻守交代となり四番、バッター青神。まさに怪物対決となっていた。いや、片方は神様だけどさ。

両者睨み合い。強面美人がモーションに入ると青神をゆっくりと息を吐く。

ボールが放たれる。

かなりの速さのボールが青神を横切る。

「ふーん」

強がらなくてもいいんだぞ？大体ソフトボールに負けても他は勝

ってるんだ。問題はない。人生諦めが肝心ってな？お前みたいな神様にとつちゃ、ちよつとしたお戯れだろ？別に負けても誰もお前を責めねえよ。

とまあ、心で御託を並べていたら青神に睨まれた。

お前は心まで読めるのか。

とまあ、そんなのは気にせず第二球。

先ほどと急速は変わらない。しかし、恐ろしいのはそこから落ちるた…あれー？落ちた後とんでった！。打ったの？あれを打ったの？

青神はあの球を打った。

それも軽々と柵を越えて。

会場からは溢れんばかりの歓喜の声が挙がる。

この勝負の行方はどうやらこの二人が握ってるらしい。

というかもう、二人の直接対決だけでよくね？

まあ、そういうわけにもいかず、迎えた最終回。七回終わって2

対2。打順はどちらも四番に回ってくる。勝負の決め手はそこだ。

先頭バッターを当たり前のように青神は三振をとり、1アウト。

次のバッターは強面美人。

会場が揺れる。ここで青神が抑えたら事実上の勝利が確定する。

初球は見送ってストライク。タイミングをしっかりと合わせてきている。

皆が唾を飲み込み見つめる中、第二球。

ボールは快音と共に綺麗な放物線を描き飛んでいく。

打球は柵を越えたものの、レフト方向にきれてファールとなる。

タイミングは合っている。つまり、次の球が打たれる可能性は高い。

打たれたら…多分青神のプライドはズタズタだろうな。まあ、いい気味だ。さつさと打たれちまえ。

ってそういうわけにもいかないか。後でとばっちりを受けるのは全部俺じゃねえか。

「行け！青神！」

いつの間にか声を出して応援をしていた。

青神は何か分かったかのように頷きモーションに入る。

青神の手から離れたボールミット目掛けて飛んでいく。

強面美人はこれにしっかりと合わせてきている。

打たれる。誰もがそう思った時。

球が一瞬浮いた。

ライズボール。

奴は、青神は、最後の最後でとんでもない球を投げてみせたのだ。バットは空を切り、ボールはミットに収まり、審判がバッター三振を告げる。

その瞬間に勝負が決まった。次のバッターを三振に終わらせゲームセット。

この日の球技大会は一年生のクラスが完全優勝を果たすということんでもない大会となったのだった。

クラス代表の灯莉が表彰台へと上がり、トロフィーを受け取る。トロフィーを上に掲げ、全校生徒の拍手を受けながら灯莉が降壇する。

閉会式も終わりに近づき、教頭先生のありがたい言葉を右から左、左から右と受け渡し、球技大会は完璧に幕を閉じた。

しかし、俺達のクラスはこれでは終わらない。

教室に戻り、祝勝会が待っている。

三十路が必死に校長に掛け合って話をつけたらしい。

買い出しに行っていたメンバーがお菓子やらジュースやらを持って帰ってきたのを見計らって祝勝会が始まる。

「球技大会の勝利を祝って」

「……かんぱーい!」

合図と共にジュースやお菓子の袋が開けられていく。

ちなみに負担は三十路。なあ、もう本名も三十路で良くないか?

「おや? 大空から何か聞こえたような気がするんだが?」

「大丈夫です、先生。何にも言ってます」

「言っていないだけだ。そうだろ？大空」

「さすが守和。よく分かっているな。あ…」

「つまりは何か思っていたんだな？よし、球技大会とは別に鬼ごっこがしたいと言ったんだな？良いだろう。10秒なら待とうじゃないか。いち、にい…」

「ちょ、たんま！こら守和！笑っていないでなんとかしろ！」

「ごお、ろおく…」

「死のカウントダウンがあ！くそつ木を隠すなら森の中だ」

俺は必死に人混みの中へと入っていった。

「なあな、はあち、きゆう…じゆう。さて、行くか…って青神に陽炎。二人揃って何を探してるんだ？」

「大空の大バカ者はどこへ行ったの？」

「ああ、大空ね。さっきまでここに居たけど、逃げられちゃった」

「そうですか。なら先生も一緒に探してくれませんか？」

「いや、今の私を見たら逃げ出すからパスね」

逃げ出す意味が分からない二人だがなんとなく納得して、二手に別れて大空を探し出す。

そんな大空といえば。

「くそつ。7だ。7来い」

ビンゴに必死だった。

「ええー。8番です。さあ、ビンゴの方はいらっしやいますでしょうか？」

「一番違い…」

「おおっと！同時に3人がビンゴです！しかし、残す景品は後一つ。どうなるこの展開！」

同時にビンゴの3人は林達だった。

「あいつらはそんなところまで仲良しかよ、って思ったら喧嘩してるし」

仲が良いのか、悪いのか分からん連中だな。

景品もなくなったところでビンゴに価値などは存在しないので場

所を移す。

といつても教室の端から端程度の距離。移動をしたのはいいが、そこは女子の溜まり場。俺はそのまま素通りで教室の外へと出る。春先の暖かい風が廊下を吹き抜ける。風の去った時、俺の前には灯莉がいた。

「オッス！ やつと見つけたよ。龍美と結構探したんだから」

「ああ、すまん」

こんな教室で二人で見つからないというのはどういうトリックだ？ まあ、隠れてたから見つからないのは仕方ないか。

「で、何かあったのか？」

「うん。今日は球技大会だったでしょ？ バスケットは同じ時にやってたから横目でしか見てないけどね？」

「まあ、そうだろうな」

「その… かつこよかったよ？ ってそれだけ」

ちよつと照れながら言う台詞に正直ドキドキしてる自分。ていうか… かつこよかった？ 俺がか？ まさか… 脈ありですか？

「じゃ、じゃあ！ そういうことだから」

そのまま、てててと走り去っていく。

残された俺は記憶を手繰り寄せて繰り返しさっきの台詞を聞き直す。

仮にも好きな女の子にかつこよかったなんて言われたら裸踊りをするくらいに嬉しい。絶対にしないが。

ていうか、脈ありだよな？ これって告白したら上手くいったり…

「大空君１人で何してるの？ かなり怪しいよ…」

教室のドアが明き、いつぞやの目が不等号の女子がいた。

確かに１人で記憶を反芻する度に悶えている男がいたら怪しいとかそういう問題じゃなく、変態だろう。

しかしだな？ その場面をクラスのえつと… 誰だっけ？ とにかく見られたわけだ。

つまり俺は変態だろう。事の元凶は分かっている。あそこで笑っ

ている守和。あいつに決まってる。ここ最近の俺の不幸には大抵あいつが関わっている。最早、歩ける不幸と言っても過言では…ちょっと言い過ぎか？と、とにかくあいつはひどい奴なんだ。

「とりあえず言い訳はさせてもらえるか？」

「少しなら」

「嬉しいことがあったときにだぞ？そのことを思いだしたりするだろ？」

「うん」

「その嬉しいことが悶えるくらいに嬉しいことだったら何度も悶えてしまうだろ？それが今の俺だ」

「その話を信じるのは良いけど…やっぱり怪しいよ？」

「ですよ〜。今あったことはここだけの秘密で」

「変態さんとは思われたくないんだ？」

「当たり前だろ！？」

「ははっそうだね。じゃあ、2人だけの秘密ね」

「頼んだぞ。なあ、守和。楽しいか？」

「ええ、とっても」

「そうですか」

「そういえば青神さんが捜していたけど」

「あ？帰ってからでも良いだろ？きつとだけだな。さて盛り上がるぜ」

「もうお開きだけだね」

…そうですか。

後片付けは翌日の朝ということになる、未成年はさっさと帰れ！と言われ帰路につく。

しかし、青神はどこに行ったんだ？あいつ、1人で帰れるのか？と、少しは心配してみるが…

「まあ、いつか」

と先に帰るのが俺である。

家でゆっくりテレビを見ながらくつろいでいると。

後ろからドロップキックが飛んできた。

「ぐぼはっ！」

「何で先に帰るのよ！」

「だって、お前、見当たらなかった…ぐふおっ！」

「それはこっちのセリフよ。人がせつかく灯莉とくつつけてあげようとしてたのに見つからないし」

俺は思わず口をあけて啞然としてしまった。青神が親切なんていうのは珍しいを通り越しておかしい。なんて本人に言ったらドロップキックじゃ済まないだろう。

「なによ。そんなに驚くことでもないでしょ？恋愛なら手助けするって最初にも言った」

「そつえば言ってたような気がしないでも」

「で、何でいなかったのよ」

「先生から逃げるので必死でして…」

「なに？私より三十路のほうが大切だっていうの！？人が一生懸命にやっているっていうのに…うぐっ、えっぐ」

「おいおい、まさか泣いてないよな？こんなんで泣いてないよな？

「いい加減にしろ」

「……………」

「こいつ、酔ってやがる。」

「なあ、酒でも飲んだか？」

「飲んでない」

「ブスツと頬を膨らませて首を振る。こういう時だとやっぱり可愛いなと思う。」

「今、変なこと考えたでひょ？いや！犯しゃれる！」

「はいはい、酔いどれは寝ろ。早くベッドに行け」

「うにゅ、分かった。おやすみなさい」

青神は千鳥足のまま自室へと戻っていく。

無駄に疲れた。

俺も今日は寝よう。

そう思って布団に入る。

試験と青き龍の神（グレイス）

球技大会から1ヶ月。あれから俺には無いと思っていたはずの平凡な日常が待っていた。

いや、青神がいる時点で平凡じゃないか。そんなのが平凡になる自分が恐ろしい。

灯莉との進展？ないない。

あの思わせぶりの発言が青神の差し金と知って凹んでいたのはつい最近のこと。

もう告白するか！と青神に状況を作るのを手伝ってもらおうと思った俺はあの夜の出来事を一部始終を説明した。それで返ってきた返事に凹むわけです。

最近はまだ、青神が後でなんとかしてくれるだろう、くらいに思っただけ生活をしている。

そんな日常も束の間。とうとうやって来てしまったのだ。

テスト
悪魔が…

先生が授業でやった内容を中心に問題を出す。これが悪魔の正体。やって来る前になると生徒を睡眠不足や、部活動停止などをし、モチベーションを下げた後襲ってくる嫌な奴だ。

恐ろしいのはその後だ。去った後には点数化されて返って…いや、帰ってくる。その点数次第でその後の運命が変わる。再び悪魔の恐怖を味わされたり、成績を下げられたりする。それが…

「テストだ」

「つまりはテストで良い点数をとれば問題はないのね？」

「そういうことだ。しかし、古典しか出来ないお前に良い点数が取れるのか？」

「ふふん、今に見てなさい。大空に吠え面をかかせてあげるわよ」

「まあ、頑張れ」

とまあ、青神にテストの説明をしてたわけだが、実際この2人で

は対策などは立てようもない。確かに青神は古典が得意だが教えるとなつては全く別の話だ。

俺に至つてはこの学校に青神の力で合格したんだぞ？元から駄目のようなものだ。

「つて青神の力でなんとかならないのか？」

「いいけど…神通力使つたら灯莉との関係は先延ばしよ？」

「だよなー。テストなんてなくなればいいのに」

「諦めることね。大空には最下位がお似合いね」

「はい、そうですか。さつさとパン食っちゃえよ。先に学校行くぞ？」

「それは許されないわ」

許さないのではなく、許されないの違いが痛い。

「お前はどれだけ上から目線なんだよ」

「神が人に上からものを言つて文句があるのかしら？」

「つ…！何も言えねえ」

「分かつたら待ちなさい」

「でも早くしろよ。遅刻しちまう」

いつも通りの朝の風景。これが当たり前なのは他の人からしたら羨ましいのかもしれないが、こちらとしては迷惑極まりない。

美人は3日で飽きるとはこのことだろう。そもそも家事は出来ない、それどころか部屋は散らかし、挙げ句の果てに命令口調ときたものだから居候としては最悪の部類に入るだろう。

そんな彼女の要望通りに限界前で待つこと5分。一向に来る気配がない。

「おい、青神？急げよー」

返事もないのでドアを開け、家に入ろうとした時、

「置いていくわよ？」

後ろから声をかけられた。神様というのは運動神経も良いらしく二階から飛び降りるなんてのは造作もないらしい。今まで何回引つかかったことか。それでまた引つかかる自分は純粋な心の持ち主な

んだろう。そう解釈しないとやってられねえよ！こんちくしょう！
「ねえ、急ぐ気はないのかしら？私は早く学校に行きたいの。そして崇められるの」

「今までお前を崇めた奴なんていねえよ！」

「くっ、いいから行くわよ」

そう言うのと俺の手を引き、走り出す。

こんな朝も悪くはないかな、なんて思う俺はきつと感覚が麻痺してきたんだと思う。

球技大会からいくらか時は過ぎ、いつの間にか夏の暑さを感じ始め、制服も冬服から夏服へと変わり始めていた。

そう、薄着になりつつあったのだ。

そりゃ、健全な男子高校生としては制服から透ける下着などには興味を持つし、ブレザー越しでは分からなかった胸に興味を持ったりする。

しかしだ。俺はひと味違うのだ。恋する男子高校生。その目的はただ1人。

陽炎灯莉。

と思った端から風で一瞬浮かんだスカートに目を奪われる自分がいることは嘆くべきなんだろうな。

恋する健全な男子高校生だから仕方ないだろうね。と、いつの間にか長い名前になってないか？と疑問を持ってみたが、まあ何でもいいだろ。スカートに視線を向ける顔がにやけていたのだろう。

俺の顔は変態という一言と共にはたかれた。

例えばこれが彼女とかで、他の女の子を見るなんて！みたいな嫉妬だったら可愛いものなのに、こいつの場合は…俺の顔が気に入らなかったんだろうね。もしくは全女生徒代表か。

はたかれた右頬がじんじんと痛む中やっと校舎に辿り着く。しかしだ、青神さん？もうそろそろ手を離してくれやしないかい？

このままだとまたいらぬ誤解を生むハメになるのですが。

と思った矢先、目が不等号になることで定評のある女子2人がす

れ違う。

俺達を見て目が丸からくの字に変わるまで。それは一瞬、というより刹那と言ったほうが正しいスピードだった。ひそひそ話ながら歩くスピードが速くなる。そして廊下の角に差し当たったその時、女子2人組は歩くということを捨て走り出す。まるでとても嬉しいことがあった無邪気な子供のような姿だった。

俺は正直な話、教室に入りたくなかった。もう分かるだろう？手を離しませんか？

そんな俺の気も知らず、そのまま教室の扉を開く。一番に見えたのは守和。

「会場は温めておいた。今ならみんな快く受け入れてくれるだろう」
守和はいつもの不気味な笑いを浮かべその場を去る。その後ろに見えたのは涙ぐむ男子の姿や何か文句があるような女子の姿だった。俺の予想ではこの状況を勘違いした男子が青神に彼氏が出来たと嘆き、女子が俺に腹を立たせているのだろう。普通はそうだろう。俺の横で未だに手を握り続ける奴は俺なんかとは全く違う考えの持ち主らしい。

「クラスの人はやっと気が付いたのね？」

ここでまた誤解は深まるんだろ？

その後片付けは俺がするんだろ？

さあここでの青神の発言によって、俺たちは少し前から付き合っていることになっちまったよこんちくしょう。

ていうか認めたことになっちまったよ。諦めるか？

その時に視界に入ったのは灯莉。俺は彼女が好きだ。今この現状を認めてしまったら接し方も変わってきてしまう。それだけは避けなければ。と思考をフル回転させる。…させたよな？何も浮かばねえよ。

クラスの一部男子がとうとう耐えきれなくなったのか俺に向かってくる。

そして1人、また1人と向かってくる男子は増え、俺はいつの間

にか男の海に溺れていた。正直嫌なんだけど。

青神は元々使えないのに何かに浸ってるし、守和は笑っている。くそ、全部お前らのせいだよ！灯莉に頼るか？ていうか近づけねえよ。

時間が解決を…って時と共にヒートアップ！？

そろそろ来いよ担任！と思ったが担任は普通に教卓の前で笑っていた。ああ、楽しいだろうよ。三十路には人の不幸が楽しいだろうよ。

あれ？海斗？お前か？一番近くで俺を殴ってるのはお前なのか？自分の教室帰れや。

くそ、何かないか？何か…

「お、俺が好きなのは青神なんかじゃない！」
思っていた以上に教室が静かになる。

「じゃあ、誰なの？」

やめる不等号。ふざけたことを言うんじゃない。
周りから次々と声が挙がる。誰だと聞く声の中一つおかしなのが
あったような？少しピクアップしてみよう。

「なんかとはどういう言い草かしら？」

…無かったことにしよう。

しかし、この状況はなんなんだ？言わなきゃいけないのか？そう
なのか？

「さあ、みんな！大空をいじめるのはここまで。ホームルームを始
める」

「み、三十路…」「やっぱり言っとくか？」

「滅相もない」

まさか担任が助け舟を出してくれるとは思わなかった。少し担任
を見直すべきなのかもしれないな。

「…あんな状況で告白してカップル成立なんて許さない…」

「今なんて？」

「気にするな。さあ、ホームルームだ。陽炎、挨拶」

こうしていつもどおりの朝が訪れ…

「どういいう言草かしらと聞いているの！」

ろよおおつ！！

「すまん、あなた様はとても素敵です」

周りの目が再び変わる。

ひそひそと聞こえる声に、俺がDMだとか、尻に敷かれてるとかが聞こえたがもういい。これで終わってくれ。

「いい？あなたは私に灯莉と付き合えるように願ったのだからそれなりの態度で示しなさい！いいわね！」

教室が未だかつてない静寂に包まれる。

さっきまで俺があれだけ隠し、三十路が潰したそれをお前が言うのか。

視線は青神でも俺でもない灯莉に移される。

「え？私？えつと…願回事…叶うといいねっ」

今ね？多分だけどね？遠まわしにね？振られたのお…

気付けば俺は廊下に走り出していた。

「大空、どこに行くの？まったく自由なんだから」

ここにいた全員が青神より自由な奴はいないと思ったとか、思っ
てないとか。

傷ついた俺は階段を昇っていた。きつと屋上を目指してる。そこで思いつきり凹もう。そう思った。しかし、屋上の鍵は閉まっていたことでもものすごい凹んだ。

「はあ、振られたのか…」

勝手に告白で勝手に振られ…一体どんな日だよ。

「オッス！大空君。さっきはその…なんかごめんなさい」

「いいよ、いいよ。悪いのは青神だし」

「でも…その…振っちゃったわけだし…」

「いいんだって。俺の片思いだって分かってたし」

「そう…か。ならいいんだ。私は大空君になんて思われようが今までどおりでいくからね」

「ああ、そっちのほうに気が楽だ」

「じゃあ。一時間目が始まるまでに帰ってきてね」

灯莉はスタスタと去っていく。きつと俺は灯莉のああいう所に惹かれたんだと思う。気遣う所、明るい所。

そして…振られたんだな…

「青神ならなんとか出来るのか？」

もし出来るのならきちんと責任をとってもらわなければ。そう思うと少し気が楽になった。教室に戻ろうとした時、

青神が立っていた。

「どうしたんだ？そんな所に立って。話なら家に帰った後にきつくりするから」

青神が囁くように言葉を発する。

「私は…手伝わな…わよ…」

「今、なんて言った？」

「私は一切、手伝ったりはしないと聞いたの」

「待てよ！こうなったのはお前の所為だろ？だったら責任くらい持てよ！」

「もしよ？これが私ではない普通の人ならどうしたの？」

「それは…」「あなたは私のことを単なる便利屋くらいに思ってる。なら私は何もしない」

何も言えなかった。

心の中で何かあっても青神がなんとかしてくれるだろうと思って
いる部分があった。

「すまん…」

「謝らないでいい。それがあなた。あなたという人格だったのだから」

少し心に引つかることがあった。それを今口に出すべきか出さないべきかどうかと言ったら出すべきなんだと思う。

「お前も説教みたいにしてるけど家事に関したら俺のこと便利屋かなんかと勘違いしてないか？」

「…さて、授業が始まるわね。教室に入らなければ」

「コラ、待て」

「な、何かしら？」

「お相子ならなんとかしてくれるよな？」

「考えておくわ」

そのまますたすたと歩く青神を引き止めようとは思わなかった。

だって…三十路が睨んでるんだ。

そして青神がなんとかすることなくこの最悪の1日は幕を閉じた。しかしだ。この日までの最悪は今日。次の日また、最悪の日が訪れるのは目に見えていた。というのも学校に行けば男子から慰められ、女子からは追求される。

そんな中気にするなと言う方が無理なのであって、灯莉とは話すことが出来ないどころか目を合わすことすらなかった。

青神は青神で昨日のことを気にしてるのか帰ればカップ麺を食べ、朝は菓子パン。洗濯物はコインランドリーに持っていつてるようだ。どうやら自分が頼らないから頼るな、ということらしい。

こうして悪夢のような1日は終わり、俺は朝から行動に出ることにした。

「…朝からどういふことかしら？」

「頼む…。元に戻してくれ。灯莉と付き合つとかはもういい。だから元に…」

「うるさい！じゃあ、聞くわよ？私は大空に言われてから頼らないようにした。努力をしたのよ？その点何かしたの？いえ、何もしてない。なのに朝から土下座で乞いを得ようだって？笑わせないでくれる？」

「お前が言うことはもっともだと思う。けどな、俺だって考えたんだ。でもどれも上手くいきそうもない。灯莉と付き合つとかは本当にいいんだ。元に戻してくれよ…」

俺は土下座で下げていた頭を上げる。

「全く、朝から嫌な朝ね。そこまで言うなら…」

俺は土下座で下げていた頭を上げる。

「全く、朝から嫌な朝ね。そこまで言うなら…」

「やってくれるのか？」

「いえ、真実を話すの」

「はい？」

「よく聞いてね？私は神様。と言ってもまだ力は全然弱い。無に等しいくらいにね」

「でも時間を止めたよな？」

「あれは神個人の特技みたいなのだし、人の運命や未来までを止めるわけではないの。時間が止まる一瞬は誰も感じることはない。だから力も私だけに働くから弱くて使えて当然」

いや、待てよ。なら…

「灯莉と付き合うつてのはもしかして…」

「ええ、無理とまでは言わなくても、待つとしても一回力を使ったら半年なんかじゃなく数百年後かしら？まあ、私が神の社から出てこなければだけど」

「じゃあ、今回のことはなんとかしないんじゃないかって…」

「出来ないの」

「うわああああああ！終わりだ…」

「いいじゃない。灯莉と大空では元々釣り合ってないし。死期が早まったと思いなさい」

「死期が早まって嬉しいやつはいねえよ！」

「そうなの？早く死にたくて社から出てくる神もたくさんいるのに」「神様事情なんて知るか！」

なんだかやけくそになっている自分がそこにはいたような気がする。

こうして俺の計画（？）は失敗に終わり、灯莉との関係に回復なんてはないと思っていた。

今日、学校に行くまでは。

教室に行けば人が群がっていた昨日とは打って変わって誰も寄っ

てこない。

「どうした？朝から元気がないな。麗しの青神嬢と喧嘩でもしたのか？」

ふらふら近付いてきた守和の一言で俺は2つの可能性を感じた。

1つ目。本当は青神は力を使えて、元に戻した。

2つ目。クラス単位でのドッキリ作戦。

…ドッキリの可能性しかねえよ。バカやろう！

なんて、心でツツコミを入れてた俺に有り得ないことが起きた。

「オッス！」

明るいい声。元気な声。いつもの挨拶。その声を聞くだけで心が晴れた。

この人からドッキリはないだろう。青神に後で礼を言わなければ。
「おはよう」

朝の挨拶の一言が今の自分にとって、輝かしいものに思われた。

朝の挨拶だけで俺の世界は変わって見えた。

先生の授業はヒップポップのように聞こえるし、黒板の文字は光って見える。

…訂正。やはり授業はつまらなく黒板の文字はミミズのようにです。そんなつまらない授業。その間にも灯莉が普通に接してくれている。これがクラスぐるみでの優しさだとしたらそれに甘えたい。そのまま無かったことにしたい。

俺の1日はいつの間にかいつもの日常へと帰っていったのだった。

そんな楽しい日常のせいで大切なことを忘れ、そのことを思い出したのはギリギリになってからだった。

週が明けた月曜日。担任が週の予定を次々と言ってく中に大変なのが混じっていた。それは悪魔を呼び出す呪文と言ったら過言である。

「明後日から4日間テストな。しっかり勉強しといてな」

あー。何も聞こえません。

それで通る世の中ではない。ということ

「第1回悪魔攻略会議を開催したいと思います」

「突然で何のことかさっぱりだよ！」

「ていうより、悪魔ってなんだよ。僕は美少女攻略で忙しいんだよ？」

「悪魔…なんと素晴らしい響きだろうか！」

「いや、悪魔は守和だろう。って違う！テストは明後日からだぞ！」

「そりゃそうよ。担任も言ってたじゃない」

「みんなは勉強したのか？」

「私はしたに決まってるでしょう？私にこの程度の内容を理解するなんて容易いこと」

くそ、腐っても神様。どれだけ理不尽でも神様。才能は人では測れないか。

「灯莉は…」

「私は予習復習でやってたからそこまでじゃないけど、それなりにやってるよ」

真面目だなとつくづく思う自分と、彼女との差をひしひしと感じる自分がいた。

「守和…はやってそうだな」

「待て。言っておくがこれでも入試トップの成績だ」

なんとなく、なんとなくなんだが…

「なんでだよ！」

逆ギレしたくなった。

「海斗はこっちの…」

「僕？天才だから勉強しなくても大丈夫だし」

忘れていた。こいつは受験シーズンは中、1日を美少女攻略に費やした奴だった。

「つまり…危ないのは俺だけなのか？」

そこにいた全員がそれを理解した。

「手伝ったりは…？」

全員が仕方ないという面持ちで口を開く。

「私は古典なら」

「社会を教えてやる。もちろん裏のな…」

「じゃあ、私は数学ね」

「僕は主教科以外」

「あ、ありがとう！って主教科以外ってなんだよ！」

こうして次々と俺にテスト対策が授けられていった。特に男2人から教わったのはテストに関係ない所だらけだったのはなぜだろう。

まあ、なんだかんだでワイワイやりながら勉強をするのも悪くはないと思う。

分らない所は家で青神に教わることにしよう。今はこの楽しい時を味わうことにする。

来るべき悪魔戦に備えて。

翌朝。教室では生徒が教科書を開き勉強。職員室で先生に聞いて勉強。ともかく授業時間でもなんでもないので勉強尽くしとなっている。

そんな中俺はといえば…

「眠い…」

一夜漬けで伸びていた。

一夜漬けというのは有効期限は1日。しかも使用するにも連続で使えないという、なんとも使い勝手の悪い必殺技なのである。

運が悪ければテスト中に寝てしまい、気付けば白紙で提出なんてことになりかねないハイスキーな必殺技だ。

とにかくテストまで寝よう。それでなんとか持ちこたえるんだ、自分。

かくしてテストは始まった。方応学園ではテストは3日に分けられて行われる。1日4教科ずつ。この1日のテストの数は間違いない。しかし、短期決戦になんかの意味があるらしく、この数で

通しきるらしい。って青神が言ってたな。

ちなみに今は理科のテスト中だ。テスト中で分からない問題があると別のことを思い出すのを絶賛実践中。

元素記号？なんですか？こんちくしょう。

1つ1つの問題に逆ギレをしながら解いていきやっとな1日目が終わる。

俺は1つ伸びをし、立ち上がる。

「テストが終わったー」

「大空、それは上手いわね。あなたのテストの内容が残念だったのと、時間的に終わったのを掛けているのね？」

「掛けてねーよ」

「大空の言う通りだ。テストは明日もある。つまり、大空のテストが残念だったというわけだな。うんうん」

「それでもねーよ。今日の分が終わっただろうが」

「なら、これからまた勉強するの？」

「いや、とりあえず寝たい…。一夜漬けで寝不足なんだ」

「そっか。なら大空君以外で何か食べに行こうか？」

「いいわね。特に大空抜きという所が。さすが灯莉ね」

「そ、そう？」

「ならば膳は急げだ。一応海斗に声をかけてみよう」

わいわいと教室を出て行く3人。

「お、おいちよつと待てよ。俺も行くって！」

俺はその後ろを追いかけるが誰も振り向かぬえよ。こら、青神。分かってやってるだろ。てめえだけ笑いすぎだ。

海斗が介入した辺りからボロが出始める。あいつがちよこちよこ後ろを見てくれてる。意外にいい奴だな。よし、今度奢ってやろう。そう呟いた時

「奢り？」

海斗が距離を詰めてきた。

「あ…いや…」

「大空の奢りだー！」

「待て……オー……」

俺の叫びは3人のかけ声に見事にかき消され、状況は一変。俺の望んでいた飯と一緒に行くというのは叶ったが、一方で払う犠牲は大きすぎた。

たどり着いた先は学校の近くのラーメン屋。ていうかいつぞやに来た気がするのは気のせいか？くそっ、幟が雷神亭に見える。

「ここはねー私の知ってる子のオススメの店なの！」

その子とは気が合いそう。青神は合わないだろうけど。

「この店の主人のおっさん良い人なんだよな」

「そうなの？」

「とにかく入るうではないか。店の前で立っただけでは閑古鳥になってしまう」

「それもそうだな」

嫌な予感を感じた。ただそれを回避は出来ないわけで。なぜか？既の中していたら回避は出来るわけ無いだろう？

店に入って最初に目に飛び込んできたのは見たことがあるような気がする少女が大盛ラーメンを豪快に食べてる姿だった。あそこまで豪快に食べられると清々しい。

「あ、すーちゃん！オーッス。元気？」

「私は至って元気だ。灯莉は……聞かなくても分かる」

俺の前で繰り広げられていたのは何とも普通の会話。しかしだ。

問題は内容ではない。相手だ。

ちびっ子と灯莉が今まで会ったことのあるような口振りで話をしている。

「よし、1つ聞くけど知り合いか？」

「うーん……まあ知り合いなのかな？すーちゃんだよ！」

「へえ……。これがすーちゃんねえ……」

「むっ？お前はいつかの尻しかれ！そして……青いの！」

「尻しかれってないだろう。また会ってしまったな」

「大空の知り合いなのかしら？ 私にはこんなちんちくりんの赤い知り合いはいないわよ？」

確かにすーちゃんはちっちゃくて髪が赤い。

「俺も青い知り合いはいないんだけどな」

「そう？ 私は青じゃなくて蒼だけど」

「そんなもん伝わるか！」

「なんか僕は入れない雰囲気になってるよ？」

「面白ければよしだ」

「まあ、すーちゃん？ ここでまた会ったのも何かの縁だ。仲良くしようぜ？」

と手を差し出したら

「触るな！」

はたかれた。

「さらにお前なんかにすーちゃんと呼ばれる筋合いは無い！ 私の名前は朱々（しゅしゅ）だ！ 覚えろ！」

「朱々ですーちゃん？ おかしくないか？」

「そ、そんなことはいい！ ラーメンを食べに来たのだろ？ さっさと食べる！ 次のお客さんが入ってこれないだろ」

「ああ、そうかい」

それならすーちゃんでもいいよ別に。そう思いながら席について、ラーメンを注文する。店主は注文を元気よく厨房に伝えると作業に取り掛かる。

そんな様子をただ見ていたのだけど…

「こらお前！ 作業は見てはいけないんだ！ ラーメン屋の常識だぞ！」
何故か殴られた。

「そうね。常識」

そして青神もついでに殴ってきた。

「そんな常識は知るか！ ってか殴るなよ！」

「うるさい！ そもそもラーメンとはだな…」

ここからラーメン魂に火が着いたのかラーメン講座が始まった。

ラーメンがいかにもラーメンで、ラーメンであるが由縁をラーメンの歴史から成り立ち、現代におけるラーメン地位、ラーメン市場のラーメン物価からなんやらまで、まあラーメンを連呼しすぎてなにがなんだか分からない状態になっていた。

そんな講座の間にラーメンは来ているわけなんだが、少女のラーメン談義は終わりが全くと云っていいほど見えず、みんなが食べ終えても俺だけがお預け状態でした。

そんな時に痺れを切らした青神が立ち上がり

「私は先に帰るわ。まだ勉強もしなくちゃいけないし」

「じゃあ、私も」

「なら僕も」

「さらばだ、大空」

みんな愉快に手を振って店を出て行く。あー置いてけぼりだねこりや。

「待て、お前。まだ話は終わってないぞ」

あらそうなの？みんなが帰ったら俺たちも帰らないか？普通は。

彼女にそんな普通は無いみたいでいつまでもラーメン談義は続き、気付けば閉店の時間になっていた。

「お客さん。もう10時になるから店を閉めたいんですが」

「まだ話は終わってない」

「いい加減止めないか？バイトの人も困ってるぞ？」

「ラーメンというのにな」

「いい加減に！」「コラ朱々！閉店だ。帰りやがれ！」

人の良い主人が怒鳴り声を挙げるのを初めて見た。

「仕方ない。お前の家で続きをするぞ。さっさと連れてけ」

「嫌です」

「連れてけ」

「嫌です」

「連れてけ」

「連れてけ」

「嫌です。ってあれ!？」

「そういうことならもう帰れ。親も心配するだろ」

「親はいない。家もない。だから誰も心配はしない」

「もしかして俺は聞いてはいけないことを聞いたか？」

「すまない…」

「なら連れてけ」

「しょうがないな…。お会計お願いします」

「しめて4000円になります」

「あーそういえば俺の奢りだったな。あいつら遠慮なしに食いやがった。うわっアイスクリームとかも頼んでやがる。くっ、リアルに嫌な値段だな。」

「とか思ってもお金は払わないといけなかったので渋々出す。」

その後、朱々にラーメンについて語ってもらいながら家に帰った。帰ると勉強をしようと語っていたはずの青神がテレビを当たり前のように見ている。カップヌードルを待っているらしい。

「あらお帰りなさい。大空が遅いからこれしかなかったの」

「これしかなかったと言う割には顔が嫌そうではない。というか素敵スマイル120%だ。」

「なぜお前がここにいるんだ？あ、尻に敷かれてたな」

「敷かれてない」

「なら何故？」

「いろいろあるんだよ。いろいろとな」

「そうか。じゃあラーメンについての話をまた始めよう」

「まだやるのか？」

「いいじゃないか。それに最後まで聞いてくれたら願いを叶えてやつてもいい」

「なんだよ、願いつて」

「もう隠さないけど、実は私は神様なんだ」

「…壮絶に吹いた。」

「神様って結構その辺にいたりするものなのか？」

こんな状況に青神さんは不満を抱いたのかつかつかと朱々に詰め寄る。

「あなた…種は？」

「朱雀」

おお、わけの分からない名前がくると思ったら俺でも知ってる名前だ。こういうところに喜びを感じるな！。

あれ？じゃあ、青神の親類？みたいなものか。

「残念ながら先客がいるの。諦めなさい」

「先客？つてお前も神様？」

「私は青龍。このアホをある女とくつつける約束をしたの」

「女とくつつける？それ以前に青龍は…」

「ちよつとこつちに來なさい。話があるの。神様だけの」

そう言つて青神は朱々を連れて、自分の部屋の方へと歩いていく。残つたのは俺とカップヌードル。のびるのは申し訳ないので食べて待つことにした。

俺が1人でカップヌードルをすすっている頃青神の部屋では話が行われていた。

「お願い！ここは身を引いてくれないかしら」

「なんで？私だつて今のさつきまで宿無しの憑き無し。そもそもお前は縁結びの神様じゃないだろう」

「そ、それは…。でも、今はこの生活を楽しんでいるの。簡単に手放すなんて…」

「それは自分勝手な考えだろ！そんな理由で騙していいのか？あの男を騙してまですることなのか？違うだろ！」

そつだ。今まで大空に迷惑をかけ続けた。なのに私は何も返すことが出来ない。それなら

「…身を引くのは私」

「そのとおりだ」

「なら少しだけ待つて。やりかけたテスト。それが全て終わつたら別れを言つわ」

「それでいい」

話を終えて青神が帰ってきた頃ちょうどカップヌードルが食べ終わった。どんな話をしていたかは分からない。でも…青神が悲しんでいるのは馬鹿な俺でも分かった。

「なあ、青神？　いつたいどんな話を」

次の言葉を言おうとすると青神が被せて話す。

「カップヌードルは？」

「あ、いや」

「私のカップヌードルは？」

「私めの胃袋にございます」

「極刑を言い渡すわ。あなたは今ここで息絶えなさい」

「ちよ、待てよ！　人が心配をしてやってるのにその言いぐさはないだろ？」

「心配？」

「だって…なんか悲しそうな顔をしていたから」

「その理由が自分にあるとは思わなかったのかしら？　カップヌードルを食べたことだと気付かないのかしら？」

あー。しまった。

「…どうしたら許して貰える？　出来たら死なない方向性がいいいんだけど」

「まあいいわ」

「え？」

「え、とはなによ。極刑が欲しかったの？」

「いや、許されるとは…」

「私は神様なの。お慈悲の心くらい持つていて当然よ」

そう言ってまた部屋に戻っていく。その入れ違いで朱々改め朱雀のすーちゃんがリビングに戻ってきた。

「なあ、朱々。いつたいどんな話をしたんだ？」

「んーまあそのうち分かる。だからいいだろ？」

そんなあやふやな返事で返されてしまった。結局この日に2人の

会話の内容を知ることにはなかった。

会話の内容が気になりつつもテスト勉強に打ち込む。そしてテストは着実と終わっていき、とうとう最終日。

俺は会話の内容とテスト勉強で心身共に疲れきっていた。

あの日から青神が特別なにかしたわけでもなければ朱々が何かをしたわけでもない。勝手に居座ってるけど。だから余計に気になる。なにかが不自然に感じる。不自然の理由を知ったのはテストが全て終わってからだった。

テストも終わり、気分爽快に遊びに行こうという計画を立てていたときだ。青神の姿がそこにはなかった。青神は何も言わずどこかへ行っていった。

いつもの気まぐれ、みんながそう思っていた。それは違う、そのことは誰も気付かない。

結局青神は家にも帰ってこなかった。

「朱々、もしかしてなにか知らないか？」

「知ってる」

「教える！早く！」

「焦らなくても教える。青龍は境内に帰った」

「なんで帰る必要があるんだ？神様は定期的に戻らなくちゃいけないのか？」

「そんなことはない。境内では式神達が働いてくれる。青龍は自分のしていたことに気づいたんだ。間違ってるって」

「気づいた？間違ってる？何のことだよ」

「お前は どうして青龍と出会ったんだ？」

「高校の合格祈願に行ったからだ。特に何かあるのか？」

「じゃあ、何の神様に合格祈願をするんだ？まさか縁結びの神様にはしないだろ？」

朱々はさっきまでとは表情を帰る。喜びか…怒りか…哀しみか…楽しんでるのか…そんな読み取れないようでどんな表情にも見える顔で続ける。

「青龍は学問運動の神様。お前を女とくつつけるなんてのは端から無理だったんだよ」

「だったらなんであんなことを言っただ…」

「楽しいんだってさ。この生活が」

「あいつは出会って最初に言っただ。恋愛限定で願いを叶えるって」

「ふーん。まあ、私なら恋愛成就も難しくない。私は縁結び、仲違いの神様だしな。」

「とりあえずいい。そう言うなら青神を連れ戻してくれ」

「あれ？別に仲違いじゃないから叶えるなら恋愛限定」

「あいつが帰ってくるなら…」

「それでもいい」

「まったくお前って奴は変な奴だな。恋愛成就の為に一緒にいた青龍を連れ戻す為に運命を変えるなんて。まぬけだ」

「いいんだよ。あいつが楽しいって言ったなら」

「そう、あいつは最初暇潰しがてらやってきたんだろう。神様として今までの長い間何をしたのかは分からない。でもそんな長い時間1人だったんだろうな。そんな奴が楽しいって言ったなら」

「さあ、頼むよ。朱々」

「…！？い、いいの？なんなら忘れさせてもいいんだぞ？灯莉の時間みたいに」

「灯莉とのことは朱々のおかげか？ありがとな。かなり助かったよ」

「…やーめた。自分で神社からよんできたら？」

「なんだよ、それは」

「気が向かないというか…とにかく！絶対にお前には願いを叶えてやんない！」

意味が分かんねえ。

「それに私の力に頼ってばかりじゃだめだろ。自分の力を少しは使え」

「それも…そうだな」

俺はその場に朱々を残して神社に向かう。家から東に行ったところの小さな神社。

「…なんだ？この感情は。私は今あんな奴に…」

1人で悩み苦しむ朱々はその場でうずくまって大空が神社に行くのを見送った。

「…大空」

虚空に呟かれた言葉。その言葉は…青神は…何を思う。ひとつ、またひとつと積み重ねられるため息。彼女は今、元に戻ったのだ。周りには誰もいない。ただただ社の中の祠で眠り続ける生活に。昔から同じ暮らし、同じ環境。懐かしさなどは微塵も感じられない。感じるのは虚無感。一度知った外の世界。今までの生活が霞んで見える。

そんな中で思い出されるのは大空と過ごした日々。他の仲間達と楽しく話した日々。その中心には大空がいた。青龍という1人の神様の心の中に感情が生まれた。

その感情が何かなんてことはその神様には分からない。今まで長く生きてきた。それでも分からない感情。

分かるのことは大空とまだ一緒にいたかった。その感情が関係していること。

「…私はもう眠ろう」

また長い年月が経てば大空はあつという間に死んでしまうだろう。そうすれば会いたいなんて思わない。時間が忘れさせてくれる。そう、だから眠る。

「…もう外に出ることもないわね」

青い目は次第に閉じていく。次目覚めるのはいつだろう？溜まった力はどう使おう？

いつでもいい。どうだっていい。

その時には大空はいないからいい。

閉じたはずの瞳から涙がこぼれ落ちる。それはとてもしょっぱく、

1人の神様が初めて落とした涙だった。

大空はいろいろな初めてをくれた。それだけで十分。ありがとう。
「青神！いるのか！」

外から声が聞こえる。聞き慣れた声。その声を聞くだけで胸の奥がひどく痛む。

「どうしていなくなるんだよ。誰が帰れって言った？」

一番最初に大空が言った。

「あちゃ、最初に言ったような気がするな。なら少し変える。帰ってこいよ。このままじゃ俺は家で1人だ」

朱々がいる。朱雀の神様が。あの子なら大丈夫。あなたの望みを叶えてくれる。

「今は朱々もいるか。でも寂しいじゃねえか。今まで楽しかったんだろ？俺だって毎日が楽しかった。それはお前がいたからだろ」

楽しかった。毎日が輝いて見えた。生まれて初めて心から笑っていたかもしれない。でも私に…大空のそばにいる権利はない…。

「大体灯莉のことなら気にするなよ。お前がいなきゃ俺と灯莉は出会ったことすらなかった。だったら半分は叶えてもらった。後は俺が頑張る。それで問題ないだろ」

それでも…私は騙して…側にいて…。

「あーもう！面倒くせえ！さっさと帰ってこい。これは俺からの願いだ。俺はお前に、青き龍に願いを込める。帰ってこいってな。叶えるかどうかは青神が決める」

神社の祠の戸が開く。そこから覗く青神の顔。ゆっくりと、その祠から出てくる。

「…ずるいわよ。言いたいこと全部言っで。私が悩んでたこと全部を取り去って。私の中に変なものまで作って…」

「はい？」

「これじゃいつまでも…」 そう、ずっと…。

「大空から離れられないじゃない…」

「あーえとー。デレ期突入の確変モードが今来ちゃいます？って嬉

しいような困るような、この後なかなか面倒くさいことになりそうなのがするの俺だけなのか？」

「うるさいっ！私は帰る。何があってもあなたの下に帰る。だからあなたは私の願いを叶えなさ…ううん。叶えてほしい」

「いきなりその態度はなんだかややこしい誤解を招きますよーって聞いているか？」

「大きな空に願いを込めます。私から…ずっと…離れないでください」

…正直ずるいのは青神の方だと思う。こんな状況でそんなこと言われたら断れるわけないだろうが。

「分かった。離れないし離さない」

「私の願い…通じたのね」

その時、青神が見せた笑顔は俺が今まで見たどんな笑顔よりも輝いていて…綺麗な笑顔だった。

悩める蒼と朱の神（ホリデー）

青神の告白まがいから時が過ぎるのは早くて気付けば夏真っ盛り。授業中は団扇や下敷きを扇いでいる人が目立つ。

あの後、次の日からテストがあつただけで青神が一日中くっついて離れないという日々が続いて、寝れない、勉強出来ない。の二段コンボでボロボロ。赤点は免れたものの、それはもう悲惨な点数という名の悪魔だった。

今ので分かつてもらえたかとは思うが、只今青神さんは絶賛デレ期突入中。青神はツンデレなのか？と海斗に尋ねてみたものの、リア充爆発しろ！の一言で返された。

前みたいに命令口調ではなくなかった。しかし今では「大空」。今日の夕飯はカップヌードルがいいんだけど…だめ…かな？」

猫なで声の可愛らしさ1000%でお願いされる。ある意味命令である。さらに前よりも断りずらい。もし断ってみたとする。以前なら、私は神だーなど言っていただろう。しかし、今となっては目を潤ませてジツと見つめるのみ。これは一種の暴力です。

灯莉とのことなんていうのは眼中にはない。まさにアウトオブ眼中。

「何の為にいるんだ？」

と尋ねれば、そこは絶賛デレ期中の青神さん。

「わ、私に言わせるの？そんなのは私と大空の…バカッ！」

とまあ、青神の中では相思相愛。かなり自己中なところは変わっていないが、可愛らしくてツツコミすらいれない。

家に帰ると面倒くささ二倍…で済むならいい。

ハグは当たり前。胸の押し付けは確信犯。鍋の爆発は摩訶不思議。と面倒くささはこの時点までは二倍。ていうか1つは嬉しいような面倒くささが数十倍になるのはラーメン珍道中から朱々が帰って

きたとき。

今日食べてきたラーメンの報告を全て俺に話さければ気が済まないらしく、麺に使われてる小麦粉の産地から店主のこだわりまでを逐一と教えてくれる。これだけでも十二分に面倒くさい。

青神は自分が構ってもらえないのでとにかくアピール。今では日課のようなハグや、爆発、さらには家の固定電話から俺の携帯に電話を入れる。それで青神に構ってしまうと朱々に噛みつかれる。だからといって青神を放っておくと着信履歴は軽く三ヶタ越え。

どちらを選ぼうが何かが起きる。どちらも選ばなくても喧嘩が始まり、結果俺が出動でやっとなまる。

一番落ち着ける空間と言えばトイレオンリーだ。

風呂は危ない。下手すると青神もしくは朱々が侵入してくる羽目に。青神は当たり前と言って入り、朱々は幼女に反応するような変態なのか？と痛い台詞を吐く。当たり前などでは決してないだろうし、幼女ではなく妖女だろ、とツツコミたくなるのだが、ここまでくると疲労が溜まって何も言えない。

結果トイレが一番落ち着ける場所となった。将来はトイレに住もう。

2人が一番静かになるのはテレビを見てる時間。それがドラマなんかならば完璧だ。ただし俺を挟む形で座りさえすれば。そうでなければ喧嘩が始まり、ドラマどころではなくなってしまう。

やっとの思いで解放されたとき、体は休みを求めて眠りにつく。

朝起きたら2人が布団に入ってるなんてのは日常。

よくよく考えると厄介な恋人が出来てしまった男の妹と厄介な恋人の対立のように思える。いや、妹じゃないし。恋人じゃないし。すべてが疑問に思われるこの状況でアクションを起こせばそれはそれは面倒くさいことに。それを分かってアクションを起こしてみた。一回の苦勞で済むならそのほうが断然良い。ていうか最近耐えられません。

というわけでテイクワン。

ちなみにテイクツーもある。やれることはすべて試そう。それがチャレンジ精神。

レッツネバーギブアップ。

「青神」

「どうしたの？」

「お前は何かしたいん？」

何故か似非関西弁。

「何がしたいって別に…大空のそばにいれば何がってことは…ないわよ？」

くそつ。待て。もしもじしながら言うんじゃない。その仕草は可愛い。それは認めてテイクツー。

「そもそも何で側にいるんだ？恋人でもないのに」

「何を言ってるの？恋…人よ…ね？」

やはり青神ブレインでは相思相愛。青神の妄想を妄想してみよう。

「あははは〜待て〜こいつ〜。捕まえた〜」

「捕まった〜。もう…離さないでね？」

「ああ、離さないよ」

というわけで相思相愛？いや待て、こんなんじゃないかと思うんだが。まあ、妄想なんだけど。

そんな今の状況を理解した上でのテイクスリー。

「いや恋人なんかじゃ「いやあああ！！！！」」

青神さんシャウト。

「そんなわけ…そんな…わけ…恋人…そう恋人。相思相愛って言葉が…」

突然のシャウト後の独り言。ああ、ツンデレでなくヤンデレの方でしたかってなんかヤバイヤバイ！

青神からまるでスロットの期待の薄い予告のような青いオーラが滲み出ている。

「恋人…？片思い…？相思…相愛…？まあ…いいわよね」

「そうだ。全部思い…」

全部思い込み。そう言いたかった。

「全部思いつきり壊せば」

「病んでる！病んでる！ちょ、たんま！青神さん！そもそも僕はつてがはあぁっつー！」

視界が変わる。目の前に居たはずの青神からいつの間にか遠く離れていた。

俺が吹っ飛んだ理由らしき物質がぶかぶかと宙に浮かんでいる。というか…

「なんだあの黄色く光る玉は。気ですか？気なんですか？」

まさか青神に氣が使えるとは…ってそんな場合じゃない。

神様が本気で暴れたらどうなるんだ？

「間違いなくここら一帯はクレーターと化すだろうな」

「朱々！？なんとか出来ないのかよ？」

「方法は1つ」

「教えてくれ！ここら一帯が吹き飛ぶ前に！」

「なら、私の言うことを1つだけ聞く。それなら教えてやってもいいぞ」

「ああ、聞く！聞くから教えてくれ！」

「なら、耳を貸せ」

ふむふむ、なるほど。

「出来るかつ！」

「なら、ここら一帯と一緒に吹き飛ばせばいい。じゃあな」

朱々は団扇？あれは団扇だ。何故か手で団扇を羽のように使って飛んでいく。それで飛べるんかい。

「やるしかないのか」

朱々が俺の耳元で教えてくれたこと。

青神に今から抱きついて愛を告げる。

…いや、無理だろう。愛を告げる時点で厳しいが、そもそも近づけねえ。何だよあれ。地球にいちやいけねえだろ。あれだ、文明の崩壊はこうやって起きてるんだ、と実感する。

いや崩壊させたら駄目だろ。やっぱりやらなきゃ？

「こうなったら自棄だ。青神！大事な話だ。心して聞け！」

ここからが本番だ。本番の…はずなんだが…青神の怒りは何故か収まった。

察するにまた青神の妄想が爆発。多分こんな感じ。

「大事な話って何？」

「結婚しよう」

「…はい！」

みたいな。

って結婚してるし。いや、あくまでも推測だが。

しかし、あれだけふにやふにやになっていたらそれほどのことでなければ駄目じゃ？と思うんだが。

目がハの字。口が波線。そんなもんはふぬけた人間改めふぬけた神様だろ。

「朱々ー。いるのか？」

「もちろんお前の真後ろにいるぞ」

なにをもってももちろんか教えて欲しい所だな。

「あれはいつもこうなるのか？そうなら俺は地球を壊させる自信がある」

「なら地球は滅亡だ」

「まじ？」

「冗談だ。あいつが勘違いを大きくしてるだけ。さっさと誤解を解いてこい」

「それをしようとしたからこうなったんだけど」

「…仕方ないな。いつそのこと死ぬといい。後を追って青龍も死ぬだろ」

「お前：幼い顔してそんなこと言うのかよ」

「幼い顔は好みか？」

「そういうことじゃなくてだなー」

「わかった。青龍のことはなんとかしよう。だが、さっきの約束は

覚えているな？」

忘れてると言いたいんだけど…幼い顔で目を潤ませるのは駄目だろ。幼女虐待みたいで俺の中の良心が許してくれない。

「出来る範囲で頼む」

「なら…今度の仏滅は予定を空けておくこと」

「次の仏滅っていつだよ？」

「今から3日後」

「日曜日って言えよ…」

「し、仕方ないだろ！お前たち人間とは違うんだ！」

「あれ？青神は普通に知ってたぞ？」

「うるさいな！別にいいだろ！私だって知ってるよ！」

「ならなんで…」

「もう！いい加減にしてくれ！とにかく今度の日曜日！予定を空けておけばいいんだ！」

「はいはい」

神様って奴はみんな勝手なのな。まあ、ラーメン屋にでも行くんだろ。

この時の俺はそんなくらいに考えていた。

そして来る日曜日。いつも鳴るはずの目覚まし時計。それよりも早く、うるさいのが2人騒いでいた。

「青龍！いい加減にしろ！」

「朱々こそ何なの？私の大空のベッドに潜り込むなんて！」

うん、まだ青神の誤解は解けてません。早いとこ何とかしてくださいよ。

「だいたい何で青龍の物になってるんだ！」

そうだ、そうだ。人を物扱いするのはどうかとは思うが。

「世の中には相思相愛って言葉があるの。もしかして知らないのかしら？」

「知ってる！」

「嘘ね」

「知ってる！」

「嘘」

「知ってる！」

「知ってるわ」

「嘘です！つてあれ？」

「間抜けね。さあ出て行きなさい」

「青龍だって意味を知らないだろ。2人が愛し合うから相思相愛だろ。今は青龍の一方通行じゃん」

「…そうなの？大空」

「寝てます。」

「寝たふりなんていう猿芝居を続けるなら…死ぬわよ。そして私も死ぬ」

「起きてますう！」

「で、私の一方通行なの？」

「そう…だろうなあ」

「あ、そう。見たかしら？大空は恥ずかしくて素直になれないの今日は勘弁してあげて」

「ぶふおっ！」

「壮絶に吹いた。」

「どんな自己防御機能だ！？思考回路がずれてるぞ」

「現実をいつまでも受け止められないようなら成長も進歩もない。」

「さあ、大空。支度を。出掛けるぞ」

「あ、ああ、そうだな」

突然のことで慌てながら着替えを取り出す。

「あの…」

「「何？」」

「出て行ってくれない？」

何故か青神に蹴られ、朱々には程よい高さの頭突きがみぞおちに決まった。どうやら俺が間違っていたようです。

とぶつくさ言いつつも着替えを済ませ、居間に向かう。

向かおうしとたのだが、途中で服の裾を掴まれた。

「今、向こうに行けば青龍も着いてくる。それは出来るだけ避けたい」

「そうなのか？なんなら3人でも…」

「馬鹿！いいわけないだろ！何の為に誘ったと思ってるんだ…まったく」

「なら行くか。で、どこのラーメン屋だ？」

「ラーメン？なんの話だ？今日行くのは動物園だ」

「動物園？それじゃまるでデー…」

「それ以上言ったら殺されると思うべき」

「だったら何だよ」

「そうだな…幼女拉致？」

「さり気なく恐ろしいこと言っな！？」

「しかもまだ幼女言うか。」

「冗談だ。妹とお出かけ程度でいいんじゃないのか？」

「んじゃ行くか」

青神が少し気になるが、まあなんとかなるだろ。

電車、バスと乗り継いでやってきたのは昔家族で何度も来た記憶のある動物園。

小さい頃の記憶なんてみんなそうなんだろうがほとんど覚えていない。

「行くぞ！パンダにコアラが待っている」

パンダもコアラもこの動物園にはいないのだが今それを言うのは自殺行為だろう。

先を走ってはしゃぐ朱々。こうして見ると本当の妹のように見える。

「大空！急いげ！1人で見てても意味がないだろ！」

前言撤回…命令口調の妹なんていません！

「そう思うならもう少しゆっくり行けよ。時間もまだたくさんある」

時間はまだ9時。電車とバスを考えても時間は余るくらい余裕がある。

「……！ならゆつくり行く」

「それでいい」

その後はなかなか楽しかった。まず大きな動物ゾーン。ゾウやキリン、ゴリラなどがいるエリアだ。

小さな朱々と比べると大分差がある。朱々はそれをまじまじと見つめ上げる。体を背伸びさせながら見上げる姿は本当に小動物みたいで。

次に小動物、小動物ゾーンに行く。リスやモルモット、ワラビーもいた。

自分よりも小さな生き物。その姿には親近がでるのか抱っこをして離そうとせず、係員に怒られる始末。ぶすつとした顔でふてくされる小動物。

水辺の動物ゾーンに昆虫ゾーン、鳥ゾーンと周ったところで1時を過ぎていた。

「そろそろお腹が空かないか？朝から何も食ってないのに朱々は元気だな」

「も、もうそんな時間？大空の馬鹿」

「なんで俺？」

「いいの！それより言われたらお腹が空いた。ラーメンだ。ラーメンを食べたい！」

「ラーメンがあるかどうかは分からないけどとりあえず食べるところ探すか」

探してみると意外に早く見つかった。というより今まで園内を歩き周って、あらかた目星を付けておいたんだが。

「この食堂でいいだろ？」

「ラーメンがあるなら」

「ははっ、そうだな」

ラーメンを与えておけばなんとでもなりそうな奴だ。そう思うと

笑えてしまった。

入ってみると中は殺風景で昔に來たのを少し思い出す。

「おばちゃん、ラーメンを2つお願いします」

「はいよ、あれ？天月さんの大空君かい？」

「あ、はい。もしかして覚えてるんですか？」

「覚えてるもなにも忘れるわけないでしょう。蛇を首からかけてもらって園内を走り回っていたのを覚えてのよ」。あの時は走っていた君をみんなで探してね」

おばちゃんらしい身ぶり手ぶりで話してくれてる所悪いんだが：蛇？記憶にないんだが。

「そんなことありましたっけ？どうにも動物園のことが思い出せなくて」

「あら、その時のことがトラウマにでもなったのかね？それより、横の子は恋人かい？妹はいなかったと思うけど：従姉なら家族で来るしね」。ラーメン一杯サービスにしくよ」

俺の周りの人はどうにも、俺が女の子とラーメンを食べるとサービスしてくれるらしい。

ていうかトラウマ？知らんがな。

「大空。ラーメンが冷める。早く受け取って食べよう」

「そ、そうだな」

ラーメンを受け取ってテーブルに座るが、箸が進まない。

「ど、どうした？ラーメンが不味いのか？それとも私と恋人扱いされたのが…。はあ…」

「朱々もいつもより量が少ないのに食べてないな」

女の子の食が減る。それにはいくつか理由がある、と母から教わらなかったか？確かダイエットに月のもとの：恋煩いだっけか？

「なんだ、ダイエットでもしてるのか？」

「誰がするか！」

だったらなんだよ。ああ、そういえば：こんなことも教わったな。ダイエットのことを男の子が口出しするのはマナー違反だと。

「悪かった」

「まったく。それにしても大空も早く食べる。私はそろそろなくなる」

「そうだな……」

と無理やりラーメンをかきこむ。

ただ俺は蛇のトラウマに引つかかっているのではなかった。またトラウマに間接的に……何か大事なことがあったような気がした。

朱々も疲れたのか昼食の後は元氣もなく、ただ園内を見渡しては感嘆の声を挙げるだけになっていた。

4時を回った頃に園内を出ることにした。

そして帰りの電車の途中。

「私は今日、いろいろ物を見た気がする。動物達は大きかったり、小さかったり……たくさん特徴を持ってた。私は……青龍みたいに大きくはない。小さいのだって魅力がある。なら……少しは大空もこつちを見てくれるかと自信がついた」

「……？今もこうして見てるじゃねえか。違うのか？」

「違う。でも少なくとも大空は私を見つめている。で、でも、ここ、ここりよがって噛んだ！？」

何が言いたいんだコイツは。噛みすぎだ。伝わるものも何一つ伝わらないだろうに。

「ええい！笑うな！もういい！帰る！」

「おい、何を言おうとしてたくらい言えればいいじゃねえか」
「知るか！」

電車の扉が開くと同時にいつぞやの団扇を取り出し、早々に電車から降りると上空へと飛び上がっていく朱々。いやいやいやいや。帰るってひとりでかい。

「頑張つて帰ってくるんだな！じゃあ」

「じゃあつて……」

俺の最後の問いかけも虚しく終わり、残るのは周りの人からの奇異の視線。

そりゃあ、目の前で人が団扇で飛んでいったらびびる。しかし、落ち着くんだ自分。この場はとにかく…逃げる！

急いで電車を飛び出す。現代の日本人の良いところはこうサバサバとして、おかしいとは思っても引き止めてまで追求しようとはしない。だけど俺は走っていた。

なぜか？

慌てて電車から降ります。

するとあら不思議。家の近くの駅の1つ前で降りてるではありませんか。

というわけで走っていた。

走りながらもいろいろなことを思っていた。と言っても全部朱々のことだが。

出会った当時は笑ってる姿をあまり見なかった。喜怒哀楽を混ぜ合わせたような表情をしていることが多かった。近頃は青神とケンカすれば怒りを露わにするし、ラーメンを食ってる時は笑っていた。そして今日。朱々はたくさんの表情を見せた。笑ってる顔に怒ってる顔、困った顔にすねた顔。

ひとつひとつ増えていく表情に俺は安心していった。神様だって人と変わらないと。

そして思う。彼女達は…何の為に永遠を過ごしているのだろうか。自分を犠牲にして他の人の為に願いを叶えるだけの永遠。なら自分はそんな彼女達の為に出来ることは極力しよう。そう思った。

のに…

「なんで家が荒れてんだよ！青神！朱々！出てこい！」

「…ああ、大空ね。お帰りなさい。あなたがいなくて…いなくて…私…」

その時の青神は一番恐ろしかった。怖いとかではない。背筋が凍りつく感じ。

青神は何かがお腹の奥から突き上げてくるような…そんな声を出して笑った…。

「これそう」

え？俺の人生の中でこの状況の回避方法は習ってない。ていうかあるのか？いや待てよ…

「あー、習ったかも」

朱々から習った気がする。

恥ずかしいがやるしかないのか。と渋々向かう。大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせて青神に近寄っていく。

「なんで朱々がそこに立ちはだかるのかな？」

「嫌だ」

「あの、なんで立ちはだかるのかな？」

「嫌だ」

言葉のキャッチボールをしてほしいところだな。

「ったく。朱々はいつたいどうしたいんだ？」

「嫌だ」

「嫌だ」

「嫌だ」

なに…！？いつもならここでひっくり返るパターンなのに。

「嫌なんだ。このまま大空が青龍のところへ行つて…嘘でも好意を示すのは…嫌なんだ！」

「お前…」

人を困らせて楽しいかい？

「大空…私…こわれて…ない？大丈夫…かな？」

「知るかー！ていうか2人ともそこに正座しろや！」

もう駄目だ。我慢の限界だ。これ以上は体力も精神力も保たない。

「いいか？よく聞け！まずお前達はなんでそこまでわがままになれるんだ？自分のことだけじゃなく周りのことも考えやがれやこんちくしょう！」

「私と大空は相思相あ…」

「違う」

「私と大空はそ…」

「いい加減にしろ」

「それならなんだって言うの！？答えなさい！」

「お前がなんなんだよ…。いい加減目を覚ませ！」

「そう…ね。いい加減諦めなきゃいけないのかもしれないわね…」

「やっと分かったか」

「もし良かったら…体だけの関係でも」

「やめい！」

一瞬考えた自分がいたことがとてもやるせなかった。だって…あの体だぞ？男なら…仕方ないだろ？

「スカートの裾をチラチラさせんな！」

それでも見る自分。男なら…な？

「と、とにかく、青神は一回頭を冷やせ。それで朱々。嫌がらせがひどすぎる」

「そ、それは…嫌だったり、嬉しかったりで…べ、別に少しくらいはいいじゃないか！」

「ああ、今日の動物園くらいなら何度でも。ただ青神の件はどうだ？なんとかする約束はどこだ！」

「何言っても通じないんだ！分かるだろ！」

「ああ、分かる。でもやるって言っただ。責任持て」

とまあ、説教は夜9時まででもつれ込み、青神にはテスト前と同じように過ごすことを約束させ、朱々には約束を守ることを覚えさせた。こいつらは小学生か？

こいつらがこの先の約束を守るかどうかは全くを持って信用ならんがここはこれでいいんだろ。

次の日の朝。

俺はとても清々しい1日の始まりを迎えた。

両隣に女の子と寝ながら。

「てめえら反省というものを知らんのか！ええい朱々、しがみつくな！青神も目覚めのキスを求めるな！」

「昨日はあんなに求め合っただのに。私とは一夜の関係だったのね」

「貴様の頭では説教がそうだったのか？」

「…大空の浮気者。私というものがありませんながら青龍まで手を出すとは」

「出してないし浮気でもありません！てか話をややこしくするな！」

「そんな…私は2人目だったというの…？」

「ああ…もう！」

「ぷっ…」

「あ？今の笑いはなんだ？」

「大空程いじめて楽しい人はいないわね」

「こんな遊びに朝から必死になるなんて…バカだな！」

「待てよ。どこからが遊びなんだ？」

「テストが終わってからよ」

「ふざけんなあああっ…！」

「嘘よ。今日の朝だけ」

「どっちだあああっ…！」

ああ…最近思います。こいつらは疫病神だと。

こうして慌ただしく忙しい1日が始まっていく。

願うは蒼と朱の神（バケーション）

一つ言っておこう。気安く「神様お願い」なんて言葉は言っ
てはいけないということ。

おかげで俺の家は朝っぱらから騒がしいです。
せつかくの休みなのにな。

なぜ火曜日のこの日が休みなのか。そう、昨日は終業式。つまり
今は夏休みということになる。本来ならなんとも嬉しい夏休み。し
かしだ。俺が気安く神様にお願いしたことから連日騒がしくなる。
さらに灯莉に会えない。多分夏休みに俺は死ぬだろう。

そして今朝騒がしいのは目玉焼きにはソースか醤油かというなん
ともどうでもいいことで朝から頭が痛くなる。

どうやら料理長朱々としてはソース。グルメ青神としては醤油と
のことだ。

どっちもかける、塩胡椒だけという妥協案は言いかけて却下され
た。

毎日の朝が騒がしい分にはいいんだ。賑やかだろ？問題はエスカ
レーターしていくと…日本が消える恐れがあります。

「2人ともいい加減にし…ぶふおっ！？殴ったな？親父にもぶふお
っ！？」

まさか2発も殴られるとは。燃え尽きた…真っ白にな…なんてや
つてる場合じゃねえ！日本が消えるって！

「今日一日なんでもするからやめてくれ！」

時間が止まる。さっきまで争っていた2人がゆっくりと席に座る。
「まあ、いいわ」

「一日なんでもするんだな」

「あ、ああ…出来ることなら…やる」

なんて軽はずみな事を言ってしまったのだろうか。翌日に俺は今
日という日をなかったことにしたくなる。

真っ先に願いを言ってきたのは朱々。

「動物園だ。動物園に連れていけ」

「動物園？次は水族館とかにしないか？」

「水族館：ならそっちにする。早く準備しろ！」

「はいはい。青神はどうするんだ？」

「待て！私の願いだぞ。青龍は着いてこなくていい！」

「でも青神の願いはどうするんだよ」

「私なら大丈夫よ。この大きな器で日中大空を自由にすることを許してあげる」

「青龍に許してもらわなくてもいいだろ！」

デレ期を強制終了させてからは今までのこの調子。少しもつたない気もする。うん、月1でいいからなつて欲しい。

「まあいいじゃねえか。水族館だろ？」

「ああ！早く行こう！お魚がたくさんだぞ！」

こうしてみるとやっぱり妹なら大歓迎する。こんだけ素直な妹なら。

「早くしろ大空」

この口がしゃべらないならもつとだ。一度お兄ちゃんと呼ばせようか。うん、これも月1でやろう。毎月スペシャルデーがある日常。いいじゃないか。

と、妄想をかきたててるうちに着いたのはこの夏休みシーズンになつてから何度もテレビで取り上げられている浜の崎水族館。なんでもペンギンとイルカのコンビネーションショーをやるらしい。ぜひとも見たいものだ。

観光案内を自分に自分でしてるうちに朱々はガラスの水槽にへばりついていた。

「美味しそう…じゅるっ」

楽しそうだなによりだ。うん…？楽しんでるよな？横浜中華街を歩いてるだけでお腹が膨れるような感じでは決してないはずだよな？食べれないことをしつかりと告げた後朱々はがっかりしていたが、

それでも大きなサメや小さな貝類を見ていた。それはそれなりに楽しそうだった。

こんなんで願いを消化出来るならなんと安いのだ。

そして館内の水槽をこれでもかという程見終わり、やっと帰宅。

「イルカの上にペンギンが乗っているのには驚いたぞ！仲良しなんだな！」

「まあ…仲良しなのか？」

「なら私も大空に乗る！」

「意味が分からないんだけど乗るな！」

「いいじゃないか。こうしてみると大きくなつたみたいだ」

まったく、それで喜んでもらえてるならいいか。

笑っている。朱々が笑っているならそれで。

そんな感じで自分を納得させて肩に朱々を乗せる。

家に着く頃には辺りは暗くなっていた。

青神が心配だが、この後散々付き合うんだ。文句ないだろ。そう思つてドアを開ける。

中には誰もいない。

「なあ、朱々。青神はどこに行ったと思う？」

「…宇宙…」

「はあっ!？」

まさか…いやあいつなら…

「…は広い」

「…寝言かよ！」

気付けば俺の肩でぐっすりと寝ていたのだ。こうすると本当に神様が心配になってくる。もしかしたらただの子供じゃないか？

朱々が実際子供かどうかは今置いておいて、とにかく青神の行方だ。

そう思った時携帯が鳴る。まさかとは思うが青神が…？とにかく電話に出てみることに。俺は恐る恐る携帯の通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「あ、大空君？また青神ちゃん来てるんだよね。迎えに来て欲しいんだけど」

「あー、はい。もしかしてまた昼飯を？」

「そうなんだよ。僕は警察官だし、行き倒れを作るわけにはいかな
いからいいんだけどね？僕が行き倒れになるのは困るのかなって。

行き倒れっていうとお腹空いているイメージがあるけど実際は病気
とかで屋外で死んだりする人のことだから微妙に違うのかな？病気
と言えばインフルエンザがね…」

「とにかく行きますんで」

「ああ、そう？急いでね」

またか…。大護さんには迷惑をかけるなっつての。

交番でに着くと寝ている青神を早速起こす。

「こら、起きろ」

「私は機嫌を損ねているの。だから大空のいうことは聞かないこと
にしたの」

「お前が起きてんならさっさと帰るぞ。朱々も心配してる」
いや寝てるけどさ。

「私はあなたのいうことは聞かないの」

「なら二度と帰ってくるな」

「…そう言うなら帰るわ。大護もありがとう」

「また来てねー」

いいのか大護さん。

もう空には月が昇り、電灯に明かりが点っている。

「なんで機嫌を損ねたんだ？出かけるのはお前も了承済みだろう？」

「そうじゃないの。1人になって考えてみたの。大空は灯莉が好き」

「…まあ…そうだが」

「私は大空が好き」

目の前で言われると正直に恥ずかしい。

「大空、灯莉を好きになるのやめなさい」

「は？」

「灯莉を好きになるのをやめるのよ。出来ないの？」

「出来る出来ない以前に気持ちを变えるのは難しいだろ」

「そう。でも大空はそれを私に強要する。私は神様。あなたの願いを叶えるとも言った。でもそれは出来ない。それは知ってるわよね？ただ私が楽しみたかっただけ」

「ああ、知ってる」

「なら私と大空の今の関係はなに？」

「居候か？」

「そう。けれどそれは今私の首を絞めている。私はあなたが好き。その気持ちを抑えて同じ屋根の下。毎日痛いの。ねえ？これ以上気持ちを抑えなきゃだめなのかしら……」

確かに感情を抑えろっていうのは酷なのかもしれない。俺だってそんなことは出来ない。神様だって俺達と変わらない普通の感情を持つているんだ。それはよく分かってる。

「…応えられないぞ。その気持ちには」

「それでもいいの。なら早速私をおんぶしなさい」

「…なぜ」

「分からないの？朱々には肩車をしたじゃない。だから私はおんぶあ、お姫様抱っこでも構わないわよ？むしろそっちにしたほうが」

「お前と朱々じゃ大きさが違うだろ……」

「あら？私の願いをひとつ聞くんではよ？早くしなさい」

「え？こんなんでいいのか？俺はもつと過酷な試練が待ってるのかと」

「私がおんぶと言ってるんだからそれでいいの」

それならいい。勝手にかぐや姫ばりの無理難題を持ってくるかと思っていた。

俺は腰を低く下げる。

「さあ、お姫様お乗りくださいませ」

「あら？分かってるじゃない。ずっとその口調でいたらいいと思うわ」

「それは無理」

「ぶうつ」

「ぷっ！なんだ？そのぶうつてのは？」

「な、なによ！ただ少し腹が立ったというか別にいいじゃないか
思ったら勝手に出たの！文句があるのかしら！」

「いや、なにも」

なんだかんだでこいつだって可愛い所があつたりする。

青神がいて朱々がいる。そんな生活は海斗の言つとおり幸せなの
かもしれない。

でも認めない。俺の肩や背中では眠るようなのは神様ではないと。

炎天下の長距離走（マラソン）

季節は夏になったばかり。というのに炎天下を度々超えてくる。

これも地球温暖化が原因かと思うとエコを心がけたいところだが暑さのあまりにクーラーをガンガンに入れる悪循環のこの時期。

春と比べて学校にはすっかり慣れて暇を持て余し、暑さも助けてかだらけているのが目に見える。

そんな自分もだらけているうちの1人だ。だからといって怠慢というわけではないが。

暑さにはどこぞのわがまま神様も適わないようだ。ふぬけている。授業だって実際に聞いているのかどうか分らない。しかし咎める先生はいない。別に青神の溢れるオーラ：というわけではなく、優等生が授業をいい加減に聞いてても成績は下がらないのだ。

むしろ俺みたいな馬鹿は真面目に聞いてても叱られる。なんて不条理な。

なにはともあれこのだらけた雰囲気は何か1つ行事でもあれば違うのだろうが、この先の行事と言えば夏休みくらいなのである。ちなみにテストは行事というより地獄なのでカウントしない。ああ、独断だ。

そんなことを考えていた時だった。

帰りのホームルームの際とうとう年齢不詳が…と睨まれたので担任が口を開く。

「そのふぬけた態度はなんだ！ということで次のロングホームルームの時間はマラソンをしようと思う」

担任は馬鹿か？こんな暑い日にマラソンなんてしようものならば熱中症続出だろう。

もちろんクラスからも反対の声が挙がる。

誰がそんなもんやるか。やるなら豪華景品をよこせ。

「もちろん豪華景品を用意している」

その一言は教室に大きな波紋を生んだ。人というのは現金な生き物である。しかし、中には豪華景品が何かという疑いを持つ奴もいる。現に守和が俺に囁いてくる。鬱陶しい。

「ちなみに景品はトップから順に3万円分商品券、最新型音楽プレイヤー、焼肉亭燃える肉の食べ放題ペアチケット、購買の優先権、シャワー室使用权、教室のコンセント使用权、スポーツ店の4万円商品券7人までだ！」

教室が歓喜の声で溢れる。さっきまでの暑さなんてものはなかったかのような盛り上りを見せている。

「ちなみに…後ろから3位には福袋だ！」

福袋？って正月に配るやつだよな？お店が正月前に余った物を詰めてある物が入っているやつだ。余り物には福があるのかなんとか。「時期こそ違えど趣旨は大体同じだ。余分に刷っておいたプリントやらがたっぷり入ってる。次の期末テストには役に立ってくれるだろうな。範囲外だけでも」

つまりは課題を詰めてあるということか？

「なあ、守和。これはどういう風の吹き回しだ？」

「どうやらお見合いが駄目になったらしいな」

三十路じゃあきついだろうなと思ったその時三十路がこちらを見る。見るというよりは睨みつけるだが。

そつえばさっきから俺の心読まれてないか？考えてることが筒抜けになってるような気がする。

しかし、よく考えてみると三十路も抜け目がない。一位の商品が一番ではないのだ。というのも運動部にとってのみだ。スポーツ店に行く運動部にとっては4万円の方が魅力的。つまり運動部は7位を狙う。よって一位の商品は必然的に運動部ではない奴が手に入ることが出来る。商品の中には女子にとっては必要なシャワー室。そして適当にやれば福袋もとい課題。まさにこの雰囲気打開のための策と言える。

しかし…お見合いの話はどこまで本当なのか。つまり結婚資金をここに使ったのか？そうなのか？と担任を見つめてみる。返事はない。やっぱり心は読まれていないみたいだ。

しかし…あの商品券は魅力的だな。

ただあれを手に入れるにはマラソンでトップにならなくてはならない。ここはひとつ本気というのを見せてやろうじゃないか。

というわけでなんの前置きも無いままマラソン大会当日。

それぞれ欲望やら野望やらにまみれて運動場に集まる。

担任が拡声器を使って集まったクラスメイト達に説明を始めている。

「ルートは至って簡単だ。まずは校舎を一周。次に今は緑の葉一色の桜並木道を通る。その道を真っ直ぐ。すると住宅街の一角に出る」

なんか知った場所…って俺の家の前じゃねえか。

「そうしたら給水所がある。でっかい看板をつけといたから分かるはずだ。ちなみにチェックポイントも兼ねてるからな。

このチェックポイントだけは民家を借りている。天月さんにしっかりと迷惑をかけるように。ここで少し迂回して学校へ戻って終わりだ。いちおう地図も配るから」

おいおいどこまで行くんだ？ていうか俺と同じ名字が給水所になつてなかったか？なあ、おかしくね？しかも迷惑って嫌がらせじゃねえかああ！！

「さあ！青春を駆け抜けろ！野郎ども！いいか？一度きりの人生楽しみやがれ！」

なんだか一瞬、青春を無駄にした三十路の叫びにも聞こえたような気がする。

よく考えてみると暴走族かなんかの掛け声っぽかったような気がする。

「そして…天月大空の家を荒らしてきやがれ！」

「やめろおおおお！！！！」

俺の悲痛の叫びがスタートの合図になり出発。当然出遅れる俺。

「三十路いいいい！！！」

自分を奮い立たせるかのごとく叫んで俺もスタート。

スタート直後はやはり運動部がトップに出る。多分ゴール前で乱闘が起こるだろう。もちろん俺はびりっけつだがな。

しかし、このコースを選んだ三十路が悪いんだ。俺はこの道を網羅している。もちろん近道だって全て理解している。

「…三十路はなぜ車で俺の後ろを着いて来てるんだ？」

「先頭に伝令を出そう。天月家の食い物は食ってよし」

「嫌がらせか？俺がなにかしたのか？」

「その口調を改めてから話をしろ」

「嫌がらせなのでしょうか？私めがなにかをしたと申すのですか？」

「途中から変な敬語になってるぞ。小学生からやり直せ」

「くそやろう！」

「さあ、走れ！最終走者。最後まで走ればゴールテープは張り直されてみんなが出迎えてくれるはずだ！」

「そんなゴールの瞬間なんかいるか！なんで俺に着いてくるんだよ！」

「最終走者を励まさないとな。それに1人で走ってるのはお前だけだ。そんなことは教師としては見逃せない」

「…教師？」

「そうか。一変この車にひかれてみたいのか」

「それが世の中の教師がすることなのか！？」

「そうだったら聖職なんて呼ばれないだろうに。天月はバカなのか？…頑張れよ」

「やるって言っただのはそっちだろうが！自己完結して哀れむんじゃねえ！」

「そんな風に話をしながら走っていたら途中でばてて倒れてしまう

ぞ？」

「分かってるよ！だったら話かけるんじゃない！」

「面倒くさい男だな。そんなんじゃモテないぞ」

「そっちもモテないだろうよ！お見合いでも失敗しろ！」

「なっ……………！なぜそれを知っている」

「本当だったんかい。ていうか失敗しろって言ったのになんで自爆してるんですか？」

「とにかく走れ！青春は逃げていくぞ！」

「…先生の分も頑張ります」

「哀れむなあ！ひくぞ！」

慌ててスピードを上げてみたが…ヤバい。息が切れてきた。三十路と喋りすぎた。

そんなのも束の間。

いつの間にかチェックポイントであり給水所である自分の家に着いていた。三十路と喋っている間に大分進んでいたんだな。

しかし疲れた。早く水が欲しいところだ。

「おっす！大空君。ここは給水所だよ。水を受け取ったらまた頑張ってね」

そんな時に癒やしの天使かなんかが舞い降りた。

「頑張る！」

「う、うん。頑張って」

「そっいえば灯莉は何をしてるんだ？」

「私は運営係。公平な立ち位置ってことで先生がね」

「その通りだ。しかしだな。天月はただでさえ遅れてるのに急がなくてもいいのか？」

「あ、しまった。早くいかなくちな。水はどこだ？」

「はい！」

と灯莉が水の入ったボトルをくれる。

「ありがとうな」

それを受け取ってまた走りだす。一旦止まってしまったから足が

重く感じる。

それを振り切って一度スピードを上げる。だんだんと体が慣れ始める。

それにしても一向に前の走者が見えてこないのは何故だ？みんな速すぎんだよ。

と思つた矢先に、それはもう目立ちまくりの青髪の女子が見えた。いや青神だろ。あの青い髪はあいつしかいねー。

少し頑張つてスピードを上げて近付く。

それに気が付いたのか、青神もスピードを上げる。

つて、逃げるように走らなくてもよくないですか？なんてことはこいつには全くをもつて無駄だろう。

あんな運動神経抜群な奴に逃げられたら追いつくわけが…

追いつくわけが…？

追いついた。

「な、んで…、逃げ、る」

「こ、これは、きよ、競争」

まあそれもそうだ。逃げるのは当たり前か。

「も、もう、1つ…はあ。なんでこ、んな、後、ろに？」

「い、一度止まりなさい！」

そう叫ぶと青神は勝手に止まる。仕方ないので止まってやることにする。

「はあ、はあ…」

「早く言えよ！前に追いつかないだろ！」

「ま、全く…大空を待っていたあげたというのになんて態度なの？」

「競争じゃなかったのか？」

「う、う。それは…そう！面白くないじゃない！」

「だったらよ…この水がたくさん余ってるボトルもいらなないな？」

さっきから俺の顔を見ながらちよろちよろと見ているのを大空さ

んは知ってます。

「くっ…人の弱みにつけこんで…卑怯極まりないわね」

「で、実際どうなんだ？」

「だからさっき言った…」

「ボトル」

「のは違つて、本当はもう走れないの」

案外軽い女だなお前。

「あんな運動神経良かったのか？」

「いい？私が今までどれだけ引きこもっていたと思う？なのにも関わらずこんな暑い日に外にいたら死ぬわよ」

「死んでないけどな」

「私はもう走れないの」

「そうか。だったら歩いてゴールするんだな。そしたら最後にみんなが拍手で迎えてくれるだろうよ。じゃあな」

そう。言い残して去るつもりだった。いや、去りたかった。なのに…

ガシッ

ガシッつてなんだよ。

「も、もう動けな…い」

その言葉を言ってから口を開く気配はない。そして…そのまま崩れ落ちた。

「青神！しっかりしろ！熱中症かなんかか？ボトルだ！水を飲め！」
ボトルの先を青神の唇に無理やり押し当てる。なんとか飲んでい
るようだ。状態はよくなる気配はない。

「こんなときに限つてあの教師はなにしてやがる」

「うるさいな。ここで青神の様子を見てるだろ」

「いったいどこから出てきやがったんだ…」

「今はそんな場合じゃないだろう？車に乗せる。手伝え」

最近思っただけこの教師最初とキヤラ違うよな。なんて今言っ
てる場合じゃないけど。

青神を車の後部座席に座らせる。

「それでどうするんだよ」

「ここからは儂がやる」

ん？病院の先生かなんかが乗り込んでるのか？三十路もなかなかやるな、なんて思えたのはほんの一瞬。目の前にいたのは白い髪に黄色の瞳の女性。その格好は何か嫌な記憶を思いださせる白いドレスに身を包んでいた。

「せ、先生…こいつは…」

「白虎」

「つまり、青神の親戚かなんかか？」

「まあそんなところかのう。さて処置を始めよう」

「なあ、神様ってこんなに周りに居るものなのか？」

「ん？青いのと私以外にもおるのか？」

「ああ、あと朱々がいる。えっと朱雀だ」

「朱いのか。時を同じにして集まるというのは珍しいことではある。しかし、これまで一度もなかったということではないのう。…まあ青いのや朱いのは知らないだろうがな。さあ、処置に集中させてくれ」

「そんなもんなのか？」

俺の問いかけに答える様子はない。どうやら本当に集中しているようだ。

「なあ、三十路」

「死ね。担任様と呼べ」

わお。こいついちおう教師だよな？

「で、担任様。いつから白虎と一緒になんだ？」

「タメ口かよ。担任様と呼べ大体春だな。担任が決まった日に少しお参りしたんだが…」

「白虎が来たと？」

「その通り」

「で、担任様はいつたい何の願いをしたんだ？」

「もちろん結婚だ」

「そしたら白虎が…」

いや、待てよ？お見合いに失敗してるんじゃない？

「もしかすると白虎は縁結びの神様じゃなかったりしなかったか？」

「よく分かったな」

担任がきよんととした顔で答える。なんかムカつく。なんでだろう。きつとあれだ。そもそも神様が当たり前のように成立している会話に苛立っているんだ。

「白虎は金運の神様で恋愛には疎いというか…なんだ、嫌っているな」

「そんな神様事情知らねえよ。ていうか担任様よ。いつからそんな口調だった？」

「あ？天月ごときに今更猫を被る必要もないだろう」

…喜んでいいのか？反応に困る回答だなオイ。

「さて、こんなもんかのう」

タイミング良く治療が終わったらしい。青神の心地良さそうな表情を見て安心する。

「青神は何があつたんだ？わざわざ他の神様に治療してもらうんじや神様特有な何かなんだろう？」

「察しがいいな。青いのは今や命の危険に瀕している」

「なっ…！」

「まあ落ち着くがいい。今すぐというわけではない。だが今から一年がもつていいところ」

「そんな…」

いや、待てよ。こういう時には何かしらの対応策があるはずだ。

「なあ、俺は何をすればいいんだ？どうしたら青神は助かるんだ？」

「仏の御石の鉢、蓬萊の玉の枝、火鼠の裘、龍の首の珠、燕の産んだ子安貝の五つだな」

なんだそれは？どこかで聞いたことがあるような名前だが、一切分からない。

「それはどこにあるんだ？」

「ああ、あと天の羽衣だ」

天の羽衣…？

……っ！

「って竹取物語かよっ！」

「さあ取ってこい天月！そして青神を助けるんだ！」

「咲子よ。そこまでにしておこう」

「言い出したのは白虎のほうなんだが」

「すまんのう。全部冗談だ」

「ふっざけんなああああっ！！！！！！」

「うるさいわね！」

「いたっ！」

急に起きた青神に殴られた。いや俺は悪くなくね？不可抗力じゃね？

「大体白虎に向かってふざけんなとは何よ。「いい？この人はね神様の中でも特に長生きをしているうった！？」」

ルター？宗教改革がどうかしたのか？

とまあ冗談は置いといて。青神が盛大にハリセンで殴られてた。

「青いの。呼び捨てにした挙げ句、遠まわしに儂を年寄りと言い寄ったな？」

「そうよ！文句があるのかしら？」

開き直った！？

「…っ」

多分白虎の中で何かがはじけた。

「青いの、今すぐ社に帰るがいい」

「なっ…」

「そもそもこやつには朱いのもいるのだろう？だったら青いのはいいから帰るがいい」

「それだったら朱々が帰ればいいじゃない！私が先約」

「ほう…ならば…2人揃って帰るがいい。儂が代わりに願いを叶えよう。咲子には十分過ぎる富を与えた」

「でも俺はお金が欲しいわけじゃない」

そう欲しいわけじゃない。

「儂を誰だと思っておる。今まで溜めてきた神通力を使えばどんな望みも叶えられる」

「ちよつと！私の時はなぜ使わなかった！」

「咲子は縁が無さ過ぎてのう…今まで溜めてきた分じゃ力が全然足りんのだ…」

担任が腰から折れた。つまりはだ。神頼みでもどうにもならないほど結婚は出来ない。そういうこと。ご愁傷様です。

「だったらさ…青神達と一緒にいさせてくれよ。今はなんとなくだけど楽しいんだ」

「…そうか。青いの、悪いことをした。年甲斐もなく騒いで済まない」

「分かってくれたならいいわ。許してあげる」

こいつは全く懲りない奴だな…とつくづく思う。

「天月、マラソンはどうする気だ？既に皆がゴールしてお前の家で騒いでいるが」

「…リタイアさせてくれ」

一刻も早く家に帰りたい。

「そうか。だったらこれを持っていけ。課題なんだが…倒れた青神は可哀想だろ？全部お前にやろう！やったな！」

結婚出来ないことの八つ当たりをしたくてたまらない担任様の為に受け取る。

「あ、ああ…。担任よ…。1人が寂しかったら構ってやるからな…」
「哀れむなあ！」

担任はその場で崩れ落ち、涙を垂れ流しにした。

急いで家にたどり着くと家の前に朱々が立っていた。まあ…そうだろうな。

「大丈夫だったか？」

「家はひどい有り様…っ！！」

朱々は目を一度見開き、こすり、見開く。そして、家の中に走り去った。なんなんだ？

「とりあえず家入るか…」

玄関の扉を開けるとそれはもう靴の山。綺麗に二段。長方形に積みまれている。

「…出てけー！」

「天月遅いぞ？みんなは既に天月家の菓子類を空にしている。さあ来い」

「なんで担任様がここに…」

「私を哀れんだ罰だ。いや…罪だ」

「どっちでもええやん…」

てか菓子類は朱々のしかなかったはずだぞ？ラーメンスナックとかラーメンチップとかラーメングミとかラーメンとか。

「まさか…ラーメングミ食ったんじゃ…」

あれは人の食い物じゃねえ。口に入れた瞬間に広がるこつてりろんこつ味。後からやってくるあつさりしうゆ。がコンセプト。実際は口に入れた瞬間に広がるこつてりした何か。後からやってくるのはあつさりした何か。その何かが恐ろしい…何を原材料にしたらあの味になるんだ？しかし、一度みたんだ。原材料を。そこには一言。ラーメン。

「あああああああつー！！」

「天月が壊れた！？」

「ヤバイ…あの時のことを思い出してしまった」

「…みんな撤収だ。天月がキれる前に撤収だ！」

「…「オー！」」

さっきまでいたクラスメイトは一瞬のうちに走り去った。一部を覗いて。

林一、海斗。お前らあれを食ったんだな？…海斗？お前は今日

普通の授業だろうよ。

この4人なら気兼ねなく外に捨てられるな。それにしても…恐るべしラーメングミ。

さっさと4人を捨てて、片付けを始める。

「すまんな朱々。お前の菓子がなくなつた」

「決して許されることではない…が。ラーメングミだけは助かった」
ああ？お前も嫌いだったのかよ。

「大空はどうしてあんなことを…？」

「あんなことつてなんだよ青神？」

「私達と居たいって…」

「ああ、そんなことか。だってお前らこつちの世界に居たいんだろ？だったら居ればいいじゃねえか」

「もう…そういう意味じゃないのに…」

「青いのもまだまだ若いのう。まあ、儂だつて負けてはおらんがな」
だったら儂とかじいさんみたいな口調を直したいと思うんだが。

「私も若い」

「おつと朱いのもおつたな。お主も青いには負けてはおらんぞ？
そう機嫌を損ねるな」

「まったく」

「なあ、朱々と青神はどっちが年上なんだ？」

そう尋ねたとき3人から殴られた。

女性に年を聞くなとのことらしい。

「いてえな…。とりあえず暗くなつてきたし飯にするか？」

「カップヌードル」

「上手いラーメン」

「手打ち蕎麦」

「どうしてそう偏るんだ！？」

しかも麺類限定。俺は断然米派なんだが。

「間を取ってうどんは…」

「調子に乗らないで」

「嫌」

「却下だ」

「じゃあ全部か？全部作るのか？カップヌードルはまだしも、上手いラーメン？手打ち蕎麦ってなんだよ！」

「仕方ない。上手いカップラーメンでも許す」

「普通の蕎麦で譲歩しよう」

「ふふん。私が一番良いことを言っただけだね？」

「残念だが全員最悪だ。ていうかお前らはどうして上から目線なんだよ」

3人に揃って言われた。神様だから、と。

その後渋々、俺は注文された内容の物を作った。

…これくらい自分でやらねえか？

3人が揃って麵をすすっているのを見て気が付いた。別に自分の飯がないことではない。自分の目の前にはカップうどんがある。

白虎さんは何故ここで食事をしてるんでしょう？

深まる疑問。ここは言うべきか、言わざるべきか…。まあ、明日になったらいなくなってるだろう。そんな安直な考えが出来たのはその時だけだった。

やって来た朝。あの後直ぐに寝た結果、いつもより早くに目が覚めた。というのも部屋の外が騒がしいからだが。

「早く起きるのじゃー」

普段なら青神が朱々が起こしにくる。この日はいつにも増してうるさい。というか青神と朱々は外から呼んだりはずせずに部屋に飛び込んでくる。

なら外で叫んでるのは誰なのか。

「まだ起きんのかー！」

口調からして白虎だろう。まったく年寄りには朝が早い。

まだ朝の5時である。外の年寄りは無視して再び眠りにつく為に潜るように布団を被る。

白虎が俺を起こしに来たのに気付いたのか、青神と朱々が部屋に飛び込んでくる。

部屋に飛び込んできた2人は俺の布団を引っ剥がす。

「なんで白虎が!」

こっちが聞きてえよ。

「なんでもないじゃろう」

「疑問しかねえよ」

「儂も主…うむ、大空と住むからのう」

時が止まった。むしろさかのぼったんじゃないか?

「意味が分からないという一線を越えた。主ってなんだよ。とにかく担任の所に帰れ」

「よく考えて欲しいのじゃが…儂は昨日何と言った?」

「忘れた」

思い出したくない。と言った方が正しいかもしれない。

「なら教えてやろう。儂は願いを叶えると言った。それに対して主は青いのと朱いのと一緒にいたいと言った。つまり、儂は願いを聞き入れた以上、主と一緒に生活をする」

「えーーーーー!!!」

俺の生活は前よりも数倍賑やかに、前よりも数倍騒がしく、そして何十倍も非日常的になっていく。

悪魔は定期に来る（リメンバー）

ああ、分かっていた。

何をつてそりやあ悪魔が来ることだ。奴らは年に5回はやってくる。小さい使い魔は2回やってくる。

所謂ところの定期テストと課題テストというやつだ。

今回は前者。

定期テスト。

つまりは悪魔だ。

この悪魔がやってくるとろくな事が起きない。というのもあの青神が爆弾発言したからという何とも納得し難い理由である。テストの点数が悪かったのはその延長線ということにしておこう。

まあ…こうしてテストがあることで灯莉と一緒に勉強をしているわけだ。

そう。今俺はいつものメンバーに勉強を教えてもらっている最中だ。そして待ちに待った灯莉との勉強。

正直なところ集中なんて出来やしない。

「あ、また間違えてる」

「分かんねえ…」

訂正しよう。集中出来たとしても分かんねえ。

「だーかーらーそこは公式を当てはめるだけなんだよ？」

「当て…はめる…ね」

…分からない。

「もう…教えてて心配になってくるよ」

「すいません…」

「休憩にしようか？」

灯莉の鶴の一声で辺りは一気に休憩ムードになっていた。

「飲み物買ってくる。買ってきて欲しい人はいるかしら？」

「青神が自分から…珍しいな。俺はコーラ」

「そうだな… 烏龍茶を頼む」

「僕はオレンジジュース」

「私は甘いをお願い」

「ええつと… 最初からおしるこに烏龍茶、オレンジジュースに甘いのね」

「いや待て。おかしくなかったか？」

「おかしいのは大空の頭よ。行ってくるわね」

「ちょ待てー！おしるこなのか？俺はおしるこなのか！」

叫び声は虚しく青神はさっさといってしまった。まあ… この時期におしるこはないだろうから大丈夫… か。

「前々から聞こうと思ってたんだけどさ。前のマラソンの時に大空の家に小さな可愛い子がいたきがするんだけど」

： あーうん。いますね。ラーメンおはげがいます。

灯莉が少しでも覚えていてくれたら弁明も楽なんだろう。その灯莉は朱々との記憶を一切持っていない。

「親戚の子とか？でも両親いないのに親戚の子はないか」

楽どころか退路を塞がれたよ！

「兄妹はないだろうな。隠し子… なら俺の情報網にないわけがないしな」

どんな情報網だよ！

こうなったら逃げ道は一つしかない。

「お前達… 見たのか…。俺も時々見るんだ… あれを…」

ゴクリと生唾を飲む。

「あれは俺にも何か分らないんだ。妖怪か幽霊か… もしかしたら神様かもしれない。とにかく俺の家に歩く小さな女の子がいるということなんだ」

全員がシラケてた。生唾を飲んだのは自分だけらしい。

「幼女誘拐… まさか昔からの親友がそんなことを」

「てめえと親友になった記憶もなきや、昔の記憶も存在しねえよ」

「今大空は幼女誘拐を否定しなかったな？ふふっ。負けだ。白状す

るんだ。俺の情報網に欠けてるところがあるなんて耐えられない」

お前のおかげで耐えられない人続だけどな。

「幼女ね…確かに幼女。でもあれは妖女なんだよ」

「意味分かんない」

「とりあえずあいつはああ見えても結構年を…ってあいつ今何才だ？」

神様の年齢の基準がまったく分からない。

「いくつなの？」

「あー同い年」

口からでまかせだった。

「学校は行ってないのか？」

「行ってない」

「一番大事なのは大空との関係じゃないの？」

「ああ…拾った」

「まあそれくらいか。まさか本当に幼女誘拐ではないだろうしね」

「また紹介してね！」

「おうよ」

「あら？みんなで楽しそうじゃない」

しまった。青神に聞かれたらひとたまりもない。今までの言い訳は泡沫と消えるだろう。

「龍美！家に幼女がいる？」

「ん？いないわよ」

「…え？」「…」

「でもこれくらい小さい子確かに」

「だから言っただろ…見ちゃいけないものを見たって」

「小さいのはいるわよ」

「え？」

「朱々のことでしょ？幼女なんかじゃないわ。大体神さ」

「ストープ！」

「神さ？」

「神さ…わつて言うのよ。神沢朱々」

冷や冷やさせんなよ。大体神沢って誰だよ。朱々の名字なんて初めて聞いたぞ。

「で、神沢朱々っていうのは大空とどんな関係？」

「嫌よ」

「青神よ。朱々というのはどんな関係なんだ？」

「そうね…」

「僕が嫌なの！？」

「居候かしら」

一斉に大きな溜め息が聞こえてくる。

「つまらん」

「守和に楽しんでもらう為にやってるわけじゃねえよ」

「さて、勉強しますか？」

「青神が飲み物買ってきたんだろ？飲んでからでも良くないか？」

「そうね。飲んでからにしないさい。特に大空には労力が掛かってい
るのだから」

「労力ってなんだ…よ！？」

この夏に入ったっていうのに…何故おしるこがあるんだ？

「さあ、熱いうちに一気に飲みなさい」

「んなことしたら火傷するだろうが！」

「ちっ」

「舌打ち！？」

「さあ、飲んで飲んで」

「飲めるか！」

「飲ませて欲しいのかしら」

「なお危ないわ！」

「勉強はいいのかしら？」

「もういい…やろうぜ…」

というわけで勉強再開。さっきの下りのせいで疲労感が半端ねえ。
結局勉強は全くはかどらないまま1日は終わっていくのだった。

そしてテスト前日の日曜日。仕方なく海斗を訪ねることにした。あいつならぐだぐだにならずに勉強を教えてくれる。家じゃ朱々がいて全くやれねえ。

昔から押し慣れたインターホンを鳴らす。少し高い音が心地よく響く。今日は良い感じに勉強が出来そうな気がする。

しかし、それはただそんな気がただけだった。

家のドアを開けたのは翠髪碧眼のボディースーツを身に纏った巨乳美少女だった。

「……………」

頭が痛くなる。こいつは海斗の姉か？ いやいや、翠髪碧眼ではなかった。間違いない。染めたのか？ いや、染めてもこんな鮮やかな翠は出ない。だったらこいつは…まさかな。

「マスターが中でお待ちです。どうぞ中にお入りください」

どこの国のメイドさんだ？ そもそもマスターってなんだ。

その分けの分からない少女に連れられるまま、俺は海斗の部屋に案内される。

「大空？ いらつしゃーい」

「いや、いらつしゃーい…じゃねえよ！ あの翠髪碧眼の女の子はなんだ？」

「え？ あーっ！ ！何で知ってるんだ！？」

「普通に出迎えしてくれたんだが…」

「そのとおりです、このくされマスター」

「ええっと…だね」

「神によって作られた対神戦最終防衛無機物兵器・玄型です。以後お見知りおきを」

一番聞きたくなかったワードが引つかかった。神。

「頭いてえ…」

「無玄さ…また変わったよね？ 少なくとも最終防衛とかなかったはず」

「記憶にございません」

「なあ…神ってやつぱり神様だよな？」

「神様は神様だけど？」

「じゃあもしかしてそいつは神様かなんかか？」

「いいえ。私は神専用無機物兵器・玄型です」

「なんか赤い彗星の愛機のような名前になったね…」

「玄…型？玄武…っていやまさかな」

青龍、朱雀、白虎と来て神登場だからといって安直すぎるだろう。

「はい。私は超有機物生命体玄武です」

「トランスフォームしそうな名前だね…って、え？」

「なんですか？その間抜け面で疑問を浮かべるなんて…憎たらしい」

「使い方間違ってるよね？罵倒出来ればいいんだね？」

「てことは…青神の知り合いかよ…」

「青神？まさかあの青神さん？無玄と似たようなの？」

「しまった！…まあ、こうなったらいいんだろうけど」

「青神を青龍と認識。又、マスターの友人から朱雀、白虎と思われる神通力を確認」

「なあ…こいつは何をやってたんだ？」

「僕に聞かないでよ…」

「キュピーン。なんとなく悪い人ではなさそうと判断」

「ああそう…。で、俺は勉強を教えてもらいに来たんだが…お前は
何をやってんだ？」

「何ってギャルゲーを…」

「聞き方を間違えたな。何でゲームをしてんだ？」

「大空如きなら問題ないかと思って」

「誰が如きだあ！」

「そのとおりです。むしろゴミ虫はマスターであると主張します」

「だから、罵倒出来ればいいんだね？」

「無視された…」

「いや、大空も凹まないで」

「さっさと教えろー！」

今日の勉強もまともに進まないようだった。

急な神登場に結局まともに勉強なんて出来なかった。ってかあの玄武…無玄か。出るところが出すぎだ。青神も出てると思っていたが上には上がいるらしい。そんなブツを目の前に勉強だと？冗談も大概にしてくれ。健全な高校生なんだ。仕方ないだろうよ。

ともかくこの調子だと勉強出来ないままテスト突入。挙げ句の果てには赤点。追試。夏休み返上。許されねえ。

ハッピーサマーバケーションを合い言葉に自宅で勉強を頑張ってみる。

しかし、神様というのは非情で俺の邪魔ばかりしてくる。家に着けば夕飯の用意。後片付けをして洗濯物。テスト前とは思えない。

まあ仕方ないだろう。俺がやらなければキツチンは爆発、もしくは創作ラーメンだらけになってしまうのだから。

これらは仕方なかった。しかし…

「大空！今日のラーメンは豚骨でな…」

ラーメン談義は全然仕方なくねえよ。

今ふと思うのだが朱々はいったいどこでラーメン道楽の資金を得てるのだろうか。

「なあ、朱々。いつもお金はどうしてんだよ」

「チャレンジだ」

「はあ？」

「ラーメンチャレンジで食べきったらお金が貰えるんだ」

「なるほど」

「ラーメンチャレンジで思い出した！」

「やっちゃった…」

どうやらラーメン談義はまだまだ終わる気配はない。

知らず知らずのうちに夜は更け、朝になる。

「勉強…してねえ…」

かろうじて課題は終わったというところだがそんなのは実際遅れてもいい。

「夏休みが…」

「大空、独り言しないで起きろ。もう朝だ」

「知ってるよ。ていうか独り言の時点で起きてるだろ」

「壮大な寝言とばかり」

「んなわけあるか！」

自分のせいでこうなつたと気づいていないのか？ていうかあれだけ遅くまで話をしていて眠くないのか？って朱々は小さく見えてても実際は違うのか。神様の年齢事情がよく分からないといったところか。しかし青神も朱々も白虎すら答えてくれないからな…。

そんなことを考えている間にも秒針は時を刻み続けていた。つまるところの話テストの点数どころかそれ自体を受けれないという最悪の展開を迎える羽目になる。

「やべ、青神！」

一気にリビングまで駆けながら叫ぶ。

「なに？朝から騒々しい。私は決して矢部青神なんて名前にはなっていないし、今さら勉強なんて無駄よ？」

「いや、そういうことじゃなくてだな。時間を見る」

「ええ…いつもならもう家を出て随分経ってるわね」

「お前なら分かるだろ？これがどんな状況なのか」

「そうね…強いて言うなら…遅刻寸前」

「強いて言わなくても遅刻寸前だ！テストに遅刻なんてしたらそれ自体受けられないんだぞ？なんでそんなに落ち着いてるんだよ！」

「私にしたら別にテストでどんな点数を取っても大学に進むわけでも就職するわけでもないのよ？だったら気にする必要なんてないわよ」

「おい、これから来る長期休暇が無くなってもいいのかよ」

「そ、それは！？」

こんなことしてる間にも時は進んでいるというのはなんとも悲しいことだ。

「頼む！また神通力で時間を止めるやつを使ってくれよ！」

「そ、そうね。長期休暇の大空との時間を減らすなんて…。いいわよ。私に捕まりなさい」

「ああ、頼む」

これで一段落だ。遅刻するなんてことにはならない。

「行くわよ…！」

気づいたら学校の前に着いていた。ただそこはいつもの学校のはずなのに、なぜか違和感を放っていた。

「まあ…気にしても仕方ない。青神急ぐぞ。…青神？」

なんでそんなに下を向いているんだ？髪や瞳が青いのはいつもだが肌も青になってるぞ？

「はははっ、やっちゃった…やっちゃったの私…はははっ」

「いや、分かんねえから。何をやっちゃったんだよ！」
不安は募るばかり。

「俺が感じた違和感と関係あるのか？なあ？」

よくよく辺りを見ると校舎がいつもより白く感じれば、入学当初から壊れて止まっていた時計もしっかり動いている。全部が新しくなったんじゃないかと疑う程に学校が綺麗になっていた。

「はあ…大空、行くわよ」

「行くってどこに？」

「人がいない所。ここに居たら大空の存在が危ないわ」

「青神さん？いつも以上に発言が電波なのはどうしてなのでしょうか？」

「いいから…行くわよ！そうね社でいいかしら。中なら誰も入らないだろうし…」

「一人で進めるのは止めませんか？」

そんな主張は尊重されないまま青神に手を引かれて歩き進んでいく。

たどり着いた先は俺が受験前にお祈りをした神社だった。

「ここは今も昔も変わらないのね…。時が止まっているみたいに」

「あのよ…今も昔って言ったのか？」

頭をタイムスリップという言葉が横切る。

「そう言う少し語弊があるわね」

「そうだとも。タイムスリップなんてあつてあまるか」

「今も昔もって今いる昔が今じゃない。なんだかややこしくなるわね」

「ああ…」

「ここで神様…と願うこともあつただろうが、何を隠そう今回のことは神様の所為であつてなんの願いも聞き入れてもらえないだろう。つまりだ…ここは過去の世界なのか？」

「だからそうだつて言つてゐるじゃない」

「一度もはつきりとは言つてないとおもうんだが」

「いいのいいの。それより問題なのは過去の自分に干渉することね」
「ていうか何もしちやいけないんだろ？過去で俺達がちよつとしたことをしただけで未来が変わるんじゃないのか？」

「はあ…」

「ため息っ！？」

「あなたバカなの？いえ、間違えたわ。あなたはバカだったわね」

「はいはい、バカですよ。どうせバカですよ！」

「分かりきつたことを連呼しないで。バカに拍車がかかつてるわよ。いい？私達は今過去にいます。これはこの先の未来からしたら過去のことになるわよね？」

「ああ…理解出来る」

「正直危ないけどな。」

「未来からしたら過去の事象。既に起きた事象。これは逆のことも言えるの。分かるかしら」

「ああ！分か…らねえよ！」

「本当にバカね。つまり過去からしたら未来の事象。起きるはずの事象。私達の過去してた時間の何年後かの未来は私達がタイムスリップをしたことを含めて決まっている。それが運命というもののな」
「えっとだな…。とりあえずこの先ずつとの未来は決まっています、

俺達はその未来の一部で…ああもう！頭の中がごちゃごちゃだ！」

「それだけ分かれば十分よ。それ以上理解する必要もないわけだし」

「まあ…それもそうか」

「さっきも言っただけど自分だけは駄目だから。同じ運命が寄り添うことは何があるか分からないの」

「おかしくないか？出逢うのが運命で、そもそも何があるか分からないのが運命だろ？」

「まったく…変な所に敏感に反応しないで欲しいわね。そのまま頷いていたら良かったのに。普通に考えてみて。何があるか分からない。言われたら絶対近づかないでしょ？私がそうすることで大空は最悪の運命を辿らないですむのよ」

「つまりは今の最悪の運命っていうのも近づかせない為…ってことか？」

「うっ！」

「実際はどうなるんだよ？教えてくれ」

「…どうせ大空は本当のことを言うまで信用しない気よね。仕方ないから教えてあげる。あなたはその時点で存在が消えてしまうの」

「また嘘だろ？」

さつきからなんとなくが分かる。青神が嘘をついてる時、一瞬顔が陰る。気のせいかもしれない。俺の思い過ごしかもしれない。だけど分かるんだ。自分でも不思議な感覚で妙な心地悪さも感じる。

「なんて自分勝手な…」

「普段のお前に言っただけよ。よっぽど自分勝手だ」

「いい？もう嘘はないわよ。大空、あなたは…みんなに忘れられる。それをいくら拒んでもそうになったら誰も止める事は出来ないの」

「忘れられるだけ…か？」

「言い換えると大空は常に存在していなかった、ということになるわね。あなたはいる。相手もいる。けどあなたがいくら話しかけても相手は声は聞こえてもあなたは見えない。過去の自分に出会った時点で大空は下位の神様になるの」

「…？神様？」

「そう。神様はみんな私や朱々みたいに見えるわけじゃないのよ。下位の神様だとお告げが出来るだけ。いわゆるところの天の声みたいなものね。声は聞こえるけど見えないというのはそういうこと。」

「私だって幼い時は下位の神様だったのよ？」

「だって俺は時間が経てば上位の神様になれるんじゃないのか？」

「生まれが違うのよ。私達みたいなのは四神と言われてる上位の神様。幼い時はただの幻獣でしかないのだけれど。だからこそ成長したら出世出来るの」

「…ま、まあ、自分と会わなければ万事オーケーだろ？大体この時代に俺が生まれてるか分からないわけだしな」

「何を言ってるの？私の今の神通力じゃそう何年も前には戻れないわよ。社の中からなら問題ないのだろうけれどね」

「じゃあ、最悪のケースがあると？」

「当たり前じゃない。じゃなかったらこんな話はいらさないじゃない」「そりゃそうか。でもお前は大丈夫なのか？昔の青神はこの社にいるんじゃないのか？」

「んーいるのかしら？小さい頃は両親にいろいろな時代に連れていかれたしね。なんと言っても小さい頃だから覚えがないのよ」

「タイムスリップが自由自在…どんな家族だよ…」

「まあ…それにもいろいろ理由があるみたいよ？私の運命の為に体を成熟させる為らしいんだけど…それなら普通に過ごして一気にその運命の時代に戻ればいいと思うのよ」

「そうだよな。まるで青神が未来の世界に行くのが…」

つまりは俺が今まで過ごしていた時代が青神の運命の時代なのか？成熟して一が一番元気な時期。つまりはこの先の未来に青神が成熟しないで進むと大変なことがあったりするのか？

「ん？大空？どうかしたの？まあ、それに神様っていうのは年をとるのが遅いから仕方ないのだけれどね」

「そつえば神様って不老不死なのか？」

「そうね、大体人間と変わらないわよ？」

「は？」

あ、そういえば青神さんは時々電波だったな。ははは……

「言ってることが矛盾だらけじゃねえか！」

「矛盾なんてしてないわよ？ただ力を蓄える時は社に入ってるの。そこでなら神通力もすぐに溜まるし、年をとらないの。だから年をとるのが遅いの」

「遅い…そういうことか」

一年経てば普通は年をとる。でも青神は一年を時が止まった場所にいるわけだ。

「ってじゃあお前は今いくつだよ！」

「あなたと同じよ？」

え、いや、そんな当たり前でしょ？的な感じで言うなよ。

「いや、だって最初会った時は何故か荘厳な話し方だったぞ？あれはなんだったんだ？」

「面白いじゃない」

いや、だからさ？当たり前でしょ？的な感じで言うのを止めないか？

「だったら朱々は？あいつはあんなに小さいってことは…」

「そうね。同じ年よ」

「そうだよな…って、なるか！当たり前のように言うんじゃない！こつちの感覚が間違ってるかと錯覚しちゃうわ！」

「いえ、間違ってるの」

ドーン。

いや、なに？この効果音？

「待てよ…この流れだと…白虎も同じ年か？」

「そんなわけないじゃない。バカなの…いえ、バカ…デラックスだつたわね」

ドーン。

ここに新しい称号、バカデラックスが生まれた。効果音、会って

ないぞ。

チーン。

終わりなのか！？俺はそんな壊滅的なバカだったのか！？

「さつきから何をしてるの？挙動不審よ？バカデラックスV2に昇格したいの？」

「もういいさ…」

「で、一つ問題があるのだけれど…いいかしら？」

「ああ…言ってくれ…」

俺は今、心の体力の回復をしてるんだ…

「昔の大空が可愛いらしくて今すぐ抱きしめたいの。構わないかしら？」

「ああ…勝手に…するなああああ！！！」

「叫んだら来ちゃうわよ？あ、今から出会っておけば大空の深層心理に私という存在が植え付けられるかも…。やっぱり行ってきたも

…」

「いいわけないだろ」

呆れた感じで軽くチョップ。てか、今の俺は危ない状態にいるんじゃないかねえか？

「そしてもう一つ問題。小さい頃の可愛らしい私を抱きしめてみたいと思わない？」

「それは問題とは言わねえ…？ってなんじゃそりゃ！」

「前門の虎、後門の狼…とはこのことよ」

「いや、言い切られても」

「やっぱり抱きしめてみたいわよね？私だもの。小さいながらも気品溢れる容姿をしていたら仕方がないわ」

「いや、小さいお前…鼻水たれてるぞ？」

それはもう絵に描いたように鼻水をぶら下げている小さい青神さんが社の前に居た。

「なあ、もしだぞ？小さい青神が社の扉を開けたらやっぱりヤバいのか？」

神様は神様なわけでどうなるか聞いてないからな。

「運命の力がぶつかって…私が今まで変えた運命に関わった人はみんな神様に昇格ね。まだ生きている人だと大空と灯莉くらいね」

俺がここで消えてしまうのはまだ分かる。神頼みして天罰が当たったみたいなもんだ。でも関係のない灯莉までが消えてしまう。そんなのは許せない。いや、許してはいけない。

「青神…やっぱり小さいお前は可愛いかもしれねえ。ちょっと抱きしめて、でその後遊んでくる。だから…その間暇だろう？ だったら少し昔の俺と遊んでやってくれよ」

「仕方ないわね。早く行きなさい」

「サンキュ」

そう言っただけで社から飛び出していく。

「あなたは何をちてるの？」

態度は今と変わらなずか…。ちょっと笑えるな。

「とりあえず鼻水をどうにかしようか、姫？」

「む？ 立場が分かっているじゃないの。チーン」

「いや、俺の服で拭くな！」

「うるちやい。姫の言うことは聞きなちやい」

そう言いながらも再びたれてくる鼻水。なんだ、あれは？ 鼻の中にスライムでも飼ってるのか？

「じゃあ、姫。俺は今無性に暇なんだけど遊んでくれないか？ 頼むよ」

「まあ、頼むんなら仕方ないわね。それじゃあ…鬼ごっこをちまちよう」

いや、それは危ないだろ。もし青神のいる方に行ったら危なすぎる。

「だるまさんがころんだにしないか？」

「むむ…ちかたないわね。じゃああなたが鬼をちて」

「はいはい。姫様」

近くの木に場所を決め、だるまさんがころんだ開始。よく考えて

みるとだるまさんがころんだなんて何年ぶりだろうか。小さい頃の記憶なんてほとんど覚えてないし、最後がいつかは分からない。でも確かに居たはずの幼い自分はいつの間にか居なくなっている。そんな気がなんとなくした。

「はぢめないのか？」

「あ、ああ、そうだな。だーるまさんがころんだ」

ミニ神（今命名）の動きがぴたと止まる。いや…

「どうしたらその体勢で止まれるんだよ」

バレエ選手顔負けの爪先立ちと上げられた足。

「このくらいは余裕ね」

「じゃ、じゃあ次行くぞ？」

だるまさんがころんだは次第にヒートアップ。ミニ神は次々と無茶なポーズをとり続け、最後の方には。

「作りかけのはち！」

ブリッジを片手で行ったりと物理法則をねじ曲げてきた。

しかし、ミニ神はいつこうに近寄ってくる気配はない。俺が振り向く度にポーズをとるゲームと勘違いしてるのか？

「姫、ちよつとこつちおいで。遊び中断だ」

「どうかちたの？」

「いや、だるまさんがころんだのルールは知ってるか？」

「鬼が後ろを向いてる間に近づくゲームでちょ？」

「そうだ。でも何で近寄ってこないんだ？」

「だって…終わっちゃうから…終わったら帰っちゃうから」

そうか。俺が帰ったらひとりぼっち。前の青神と同じ。社でひとりなんだ。

「今は…今はごめんな。もう行かないといけないんだ」

「やだ！」

「でもこの後ちよつとだけ待っててくれよ。絶対に楽しくなるからさ。それまで待ってくれるか？」

「…うん、我慢ちゆる」

「それまでに鼻水がたれるのは治せよ？」

「うん！」

「じゃあ、またな」

「またな！」

元気がいいというか…無邪気という言葉が似合う。そんな女の子に別れを告げる。

ミニ神にバレないように社へと戻る。

流石の青神ももう移動をしてるか？と思っていたのだが…

「大空、遅かったわね」

「いや、俺が遊んでる間に逃げるんじゃないか？」

「え？大空が遊んでる間に私も遊んでいたわよ？それにあの頃の私は社には入らないわよ？早く大きくなりたかったから」

「あーうん。これはむしろ俺が悪いのか…」

変に格好つけたせいで言い方が遠まわしになっていたような気がする。

「って悪くねえ！青神が最初っからそう言ってくれればいいんじゃないか？」

「言おうと思ったら大空がどうしても小さい私と遊びたいって言うたから」

「安全だって分かっているとそう聞こえたのか…」

「違ったの？」

「いや、いいんだ。うん、いいんだ。で、このままここにいていいのか？」

「そうね。じゃあ帰る？」

「あ、いやそんな簡単に帰れるもんなのか？」

「社にいたから力が溜まるのも速いのよ。数ヶ月分なんてあつという間」

「ならさっさと帰ろう。このままだって消えてしまっても笑えねえ」「分かったわ。私に捕まってるね」

そして…自分たちの時代に戻ってきた。戻ってきて思い出した。

「テストだったな…」

「まあ、頑張りなさい。私は余裕だから見下してあげる」

「さいですか…」

タイムスリップは結局三神に会うということだけで終わった。

でもこのことも青神の言う運命の一部だとすると青神の幼い記憶には俺の姿があるのだろうか？

「って遅刻するって！」

考えても仕方ない。とりあえず魔王退治にでも行こうか。…レベル上げをもう少ししたかったけどな…。

さっきまで考えていたことはすっかり忘れ、紙に字がかかれただけの魔王に挑む。神と紙だけにはご注意ください。

これは…切実なお願いです。と偶像の神に願う俺だった。

慌ただしいのが常（ノースローライフ）

なんとも不思議なタイムスリップをしてから一週間もとい、悪魔のテストから一週間。

次々と返ってくるテスト達に俺は倒れそうになりながら残すは英語だけとなっていた。

ここまで赤点は一切なし。問題はこの英語：所謂イングリッシュ。英語の先生に名前を呼ばれて答案を取りに行く。

緊張は俺の中で最高潮。赤点は29点以下。

受け取った答案の点数の部分を守る見る。

「キターーーー！」

俺は某掲示板並みに叫んだ。何故って？そりゃ：俺の点数は30点。

赤点を免れたのだ。そう確信した。こんにちは夏休み。ハロー夏休み。

「大空。大問2の4番採点間違ってるわよ？」

「黙ってる」

「でも間違ってる…」

「黙ってる。俺の夏休みが消えるんだぞ？」

「んー？はっ…つまりは私と大空との甘酸っぱい時間が減ってしまふの！？」

「甘酸っぱい時間はいらないけどそうだ」

「ところで大空。採点が間違っているそうじゃないか？どうしたい？」

「守和：友達無くすぞ」

「安心しろ。今すぐには言わない。それでは後々に活用出来ないからな」

「どっちもやめてくれ…」

「先生ー大空の採点間違ってるーす」

「くっ、どこの誰だ？俺の赤点を誘うのは…」

教室を見渡す。声の出所は…海斗てめえか。そもそも自分の授業はどうしたんだよ。

「天月、本当なのか？」

「…本当ですよ」

「ほう…英語教師をなめるんじゃない。どさくさに紛れて”死”という単語をいれおったな」

「ちょ、それは言い掛かりですって！」

「ほらまた！赤点決定！」

「ギャー！ー！」

海斗…絶対殺す。

「でも偉いよ大空君。赤点なのに正直に言うなんて」

「灯莉…」

海斗…ちよつとナイス。

「大…2の4番点数上が…は…よね…」

「青神、ぶつぶつ言うのやめろよ」

「あ、うん、まあいいわよね。甘酸っぱい時間は仕方ないわよね」

こうして悪魔のテスト返却は無事には終わらずに俺の夏休みを削ることになった。

テストの後から夏休みはあつという間だった。なんてことをいつても俺はまだ夏休みではないのだが。これから10日間は学校でみっちり勉強だ。

だというのに…

「青神！朱々！なんで誰も起こしてくれねえんだよ！」

遅刻しかけていた。ちなみに遅刻は補習一週間追加だ。

それは朝のこと。

「大空ー朝ご飯はまだなのか。お腹空いた」

「んー、ああ作るか…って今何時だ！？」

「8時」

「後30分じゃねえか！なんで誰も起こしてくれねえんだよ！遅刻

しまう」

「今日から夏休みと聞いた」

「俺は違うんだ」

「え…じゃあ、毎日1日中遊んでくれたりはしないのか？」

「すまん朱々。夏休みがあってもそれは無理だ」

その頃青神は寝ていた。

「あ…大空…好きよ…」

朝からなんともこそばゆい寝言であった。

急いで家を飛び出したものの時間はギリギリ。本当にギリギリ。学校の校門前の並木道にさしかかったところだ。

そう、そこにいたのはいつぞやの寝ぼけている女の子。

とは言っても今から声をかけてる余裕はない。夏休みがさらに減っていくなんてのは許されない。

分かっていた。遅刻は許されないことを。

知っていた。声をかけたら遅刻することを。

それでも声をかけていた。

「大丈夫ですかー？」

「……………かつどーん」

今のは寝言か？寝言なのか？有り得ないだろ。すやすや道で眠る女の子がかつどーんって…あっても良さそうだな。

一人納得しつつもう一度声をかける。

「てんどーん」

「……………うなどーん」

「返事！？」

「はっ！うなどんは！？」

「ねえよ」

「あなたは…確か…うなぎ屋さん？」

「会ったこともなければうなぎ屋でもない」

「そう…お休みなさい」

「ちよっと待って！」

「え…うなどん？」

「いや、違うけど」

「お休みなさい」

「聞きたいことがあるんだ」

「えっと…蒲焼きおかずにうなどんは食べられます」

「うなぎ好きだな…」

「はいー大好きです」

「君はここで何をしてるんだ？前にもここで眠ってるのを見たんだが」

「寝てるんです」

「…いいのかそれで」

「あーでも補習があつたようないような？」

「あります。自分も今から行くところだ」

「なら、一緒に行きましょうか？私となら…大丈夫です」

「意味が分からん」

とまあ、うなぎ大好きな不思議少女と共に遅刻を伝えるに職員室に行くのだった。

しかし、職員室で待っていたのは説教ではなかった。

「大空…横にいるのは…」

「ああ、朝道で会って話しかけたやつ。名前は知らん」

どうだこの態度は？遅刻したやつの態度とは思えないだろ？こうも偉くなれるのは横にいるやつのせいらしい。

うなぎ大好き少女が来るなり教師総立ちで挨拶。そして何故か応接室に連れてかれてソファに座らされている。

「大空、少し別で話をしよう。こっちの応接室にこい」

「は？いや、なんでって引っ張るな！」

「いいから来い」

引っ張られるまま隣の部屋に行く。

「どこであの子と会った？」

「どこって学校の前の並木道だよ。そこで寝てた」

「ふう…。いいか？あの子はこの学校のオーナーである人の子どもだった子だ」

「オーナー！？」

それで総立ちか。

「いや、でも”だった”ってなんだよ」

「今あの子は病院の集中治療室にいるんだよ。自動車と事故に遭ってな。なのにあの子を見たという生徒がちらほらと」

「いや、俺は入学式に見たぞ？それに事故で入院中の同級生なんて聞いたことがない」

「なんでお前と同級生なんだ？あの子は3つ上だ」

あーぐるつと回って同じ学年カラーなんですな。

「すみません。勘違いです」

「なんなんだ？あと、お前が謝って思い出した。白虎は元気か？暇なら遊びに來い、と伝えておいてくれ」

「なんで謝って思い出したんだよ…」

「いや、なんとなく」

引っ張ったいてやりたいところだが必死に右腕を抑えこむ。静まるんだ…。

「今日のお前はいつも以上に挙動不審だな」

「いつも挙動不審じゃねえけどよ…ただなんでだったんだ？まだ死んだわけじゃないんだろ？」

「それがな…オーナーが自分の娘の事故を恥と思っただらしくてな。それで養子に入れた」

「待てよ、それはおかしいじゃねえか。養子に入れる方も受け入れる方も間違ってる」

「まあ正論だな。でも複雑な理由があるんだ」

「複雑な理由？」

「そこはお前が踏み込むところじゃない」

「まあ…そうだろうけどよ」

「というわけだもう戻っていいぞ」

「はいよ…つとそうだ。今自分の中で一番嫌な可能性を見つけたんだが言ってもいいか？」

「教師に向かつてタメ口じゃなければ受け付けるが？」

この三十路の分際で何を言うのだろうか。

「三十路に罪はないっ！」

「いや、心を読むなよ…。とにかくだな、これは神様の所為じゃねえかなって。こんなこと出来るのはあいつら神様くらいだろ？」

「青神に白虎か…」

「まあ…実質あと2人いるんだけどな」

「2人？まあ、その可能性は高いな。それこそ白虎の出番だろう？」

「ああ、とりあえず聞いてみるさ。で、俺は補習をサボってるんだが…行った方がいい？」

「あ、もう今日はいい。明日からしろ、明日。今日はあの子にも話を聞きたいしな」

心で静かにガッツポーズ。

「…そうだ、明日は一度職員室に寄れ。決定だ」

「なんでだよ…」

「いいから寄れ。担任の言うことはしっかり聞くべきだと思うが？」

「はいはい。寄りますとも、寄らせてもらいますとも」

「分かればいいんだ」

一つだけ言っておくことがある。悪い予感しかないのはなぜだろう。

そんな予感を抱えたまま翌日の補習は来た。

「でだ、なんでこいつがいるんだ？」

「もちろんお前と一緒に補習を受けるためだ。何分テスト自体を受けてないんだ」

「こいつが補習を受けることには問題ない。なんで俺と2人きりなんだ？」

しかも会議室で。

「もちろん彼女が補習を受けるのにどこかの教室でやるのか？後で問題になったら大変じゃないか」

「だから！なんで俺も一緒なんだよ！」

「1人だとかわいそうだよ」

「いや、まあそうだろうけど、わざわざ俺がいなくても担任がいりやいいだよ」

「私は彼女の担任でないんだから関係ないだよ？」

「俺はもつと関係ねえ！」

「私は…邪魔です？」

「いや…えっと…」

「もしかして嫌われてます？さっきからこいつとか…。なら1人でも…」

「あーもう！分かったよ！ここでこいつと補習を受ける！」

「あの…こいつはちよつと嫌だった…」

「いや、名前知らねえし」

「天月大空…」

「それは俺だな」

「はい、素敵な名前です」

そう言つてにこりと笑う。む…こうして見ると何気に可愛いらしい顔をしている。青神や灯莉とはまた違う清楚さと言つのだろうか。

「で、お前の名前」

「私…ですか？」

「もちろん。知らねえからなんて呼べばいいのか分かんねえだよ」

「あ、神無月魅霊かなづきみれいと申します」

「そっか。なら早速補習とやらを受けるか」

「咲子先生が授業を？」

「なんで私が…と言いたところだが、私しか手が空いてないらしい。ったく夏休みに予定なんてありやしないのに」

「担任よ…俺で良かったら相手になるぜ？」

「黙れ低収入。あ、学生だから無収入か。かといって将来性も皆無

か。願ひ下げだな」

「言いたい放題だな、おい」

「いや…私が養つていくとして家事全般を任せるなら…。よし天月、婿に來い」

「めんどくせえ…」

「せっかく働かなくて済むものにもつたいない奴だな」

「その裏表のある性格をまずはなんとかしろ」

「クラスからは信頼されてるだろ？お前には表側だ。それでいいじゃないか」

「なんで表側がいいんだよ。優しい担任のほうがいいに決まってるだろ」

「そ、そうか…ただ、考えてみる。常に裏でいるのはつらいとかだな？どこかでリックス出来ると違うと思わないか？その…」

「だから裏表を無くせつて言ってるだろ。なんで裏表があつて信頼されてんだよ。それこそ生徒も裏表かもしれねえだろ」

「いや、そういうことじゃないん…」

「とにかく！」

「あの…私は邪魔だったりするんでしょうか？」

担任はどうか知らないがとてつもなく申し訳ない気持ちだ。ていうか気まずいならもつと早く止めるよ。

「なら、始めるか。2人とも教材を出せ」

「咲子先生…教材がないです。そもそも貰つてないです」

「そうか、なら天月にもらえ。そいつには教材はもういらなからな」

「どういうことだよ！」

「お前には教材の内容を暗記させるからな」

「いや、えつと…まじ？」

「ああ、大マジだ。毎日やれば出来る。バカはこうでもしないと頭は良くならない」

「冗談にも程があるだろ、と言おうとしたその時。

「冗談じゃないからな。私はこれで教員試験を乗り切った」

「天月君頑張ってください」

「魅霊…応援しないでくれ…止めてくれ…」

「いきなり、み、魅霊だなんて…こんな人前で…恥ずかしいです」

今時こんな奴が存在していたとは思わなかった。こいつ程の恥じらいが家にいる2人にあつたら大分違うだろうに。

「こんな時にいちやつくな。本当に覚えさせるぞ?」

「いや、どこが嘘だよ…」

「覚えさせところだ。バカの頭が良くならないのと私の教員試験は本当の話だ」

「つまり担任は本当のバカだつてことか?」

「あー、まあそうだ。悪いか?今はお前とじゃ月とスッポンだがな」

「くそっ」

「悔しかつたら教材の1つや2つ覚えてみる」

「そんな軽い挑発に乗るバカじゃないんでね」

「天月君!やりましょう!私も手伝いますから!」

「ということだ。嘘から出た実だ。頑張れ天月」

「あーもう!調子が狂う!」

「さて、天月いじめはここまでにして勉強するぞ。補習の意味がなくなるからな」

「私にはいじめてるつもりはないんですけど…」

なお悪いわ!と心は叫んでいるものの実際言おうとすると疲れきった体が応えてくれないというんだから驚きだ。魅霊につつこんでいたらキリがない。

「どちらにせよ教材が足りないのは事実。天月は見せてやれ。で、早速だがここの問題…」

さあ、補習だ。担任様のありがたい授業を話半分に聞きながら時は過ぎていく。

気付けば時計の針は12時を回り、外の日差しは高くなっていた。なんていうか…絶対部屋から出たくない。

「さて、今日はここまで。さつさと帰れ。ここで涼もうなんて思っているなら間違いだ。もう少ししたら職員会議だ。この部屋は使ったんだ」

「あ、そう。んーじゃあ嫌だが帰るとしますかね？」

「はい、そうしましょう」

「いや、私がそう言ってたよな？」

なんとなくで担任と別れを告げて、灼熱…とまでは言わなくとも炎天下の空の下に出る。

「魅霊はこれからどうするんだ？俺はコンビニに寄って帰ろうと思ってるんだけど」

「私も着いて行きます」

「そうか。ならアイスの1つくらいなら奢ってやるよ。そうと決まったら行くか」

「着いて行きます！」

「ははは…そか。あ、そういえばお前って体がもう1つ病院にあるのか？」

「どうなんでしょう…。自分が病院にいることすら聞いて分かったくらいですし、実はまったく別人だったりするのかもしれないですね」

「別人って有り得ないだろ。そんな世の中に瓜二つの人がいたら大変じゃねえか」

「それもそうですね。ところでコンビニを通り過ぎたんですが…」

あ…本当だ。話しているといつの間にか自分の家の前に着いていた。

「しまったな…とりあえず上がっていくか？アイスくらいならあったはず」

「それならお言葉に甘えて…？そちらの小さいお方は？天月君の妹さん？」

ドアを開けてこっちをジッと見つめている朱々がいた。

「朱々なにしてた？」

「なにも…」

そう言つとドアボタンと閉めて家に戻っていく。

「まあ、ああいう奴なんだ。気にするな」

「可愛いらしい妹さんですね。私は一人っ子でしたので羨ましいです」

「いや、あれはなんというか…まあ妹ではないんだが。居候？なのか。ああ見えて俺と同じ年だしな」

「それは失礼でした。まさか同じ年なのに妹なんて…」

「あいつは気にしないって。それより早く中に入ろうぜ？暑くてたまらん」

「そんなに暑いですか？」

「お前…暑くないのか？」

「全然」

一回死にかけると関係なくなるのか？それともこれは病院にいるはずの魅霊がいることと関係あるのか？

「それではお邪魔しま…」

「大空！女を連れ込むとは良い度胸じゃない。私というものがありながらそれはないんじゃないかしら」

「天月君の許嫁の方ですか？これは失礼しました。私は神無月魅霊と言います」

「あら、この子はなかなかの礼儀を知っているじゃない。それに私と大空の関係をなんて言つた？」

「え、あ…許嫁と」

「い・い・な・ず・け。良い響きじゃない！」

「俺もお前も相手の親も見たことないのになんで許嫁なんてことになつてんだよ。それと、とりあえず挨拶しろ」

「そうね。私は青神龍美。そして私と大空は運命に決められた許嫁なの」

「まあ！なんてロマンティックなんでしょう！」

「そうでしょう？私と大空は結ばれる運命なの」

「お前が運命とか言うとお洒落にならないから止めろ」

ていうか何で共感出来てるねん。魅霊の思考は若干青神寄りの電波気味らしい。

「大空…私とは遊びだったの？体が目当てだったのか？」

「朱々に限って体目当てはないだろ」

「む…」

自分の胸に手を当ててごらんさい。そこには不毛の大地が広がっている。そう平らな平原が見えてくるように…。

「滅殺！」

そう言うとき朱々は俺の両目に指を突き立てる。あれ？これって目潰しってやつでは？

「いてえ！いきなりなにすんだよ！」

「いきなりではない。しっかり合図と共に放った一撃」

「いきなりの意味が違うだろ。なんで急に目潰しをするんだ、と聞いている！」

「言葉の重さを感じるべき」

あーそうですか。つまりは答えてもらえそにないようです。

「なんだか賑やかですねー」

「そうか？どこもこんなもんだろ。」

まあ、確かに騒がしいかもしれない。そんな環境に毎日いるから感覚なんて麻痺しまくりなのかもしれない。

「そういえば白虎はどこにいるんだ？」

「白虎なら三十路の所に行ったわよ。昨日大空が三十路のことを言うてからずっと楽しみにしてたみたい」

「そんなに楽しみなのか？だったら向こうに住みゃいいのに。わざわざこっちに来なくなっちゃっていいだろ」

「三十路も白虎とずっといたら永遠に独身じゃない」

「それに言ってた。咲子の家には発泡酒も焼酎もある。なぜ大空は酒を買ってこんのじゃー、って」

「いや、未成年だし」

「白虎さん？」

「ああ、白虎。そのうち帰ってくるだろうから気にするな。っていつまで玄関で話してるんだよ。中に入って」

「あら、大空？私以外の女をこの家にいれるつもり？」

「待て。それでは私は女じゃないみたいに聞こえるだろ」

「私たち以外の女をこの家にいれるつもり？」

「わざわざ言い直すな。別に灯莉だったら何も言わないだろ？それと一緒にねえか」

「何を言ってるの？灯莉は私の客でしょ？」

「あーもう面倒くさい。青神の昼飯は抜きでいいか？」

「な、何を…」

「私は問題ない」

「朱々…？」

「業に入っては業に従え。ここは天月君の家ですので私には問題ないです」

「しょ、初対面よね？」

「満場一致で昼飯に抜きになるんだが…それでも魅霊が家に上がりのはだめか？」

最初は頑張ったのだろう。悶々としているうちに吹っ切れた感じになり。

「…もう！ならいいわよ！勝手に上がりなさい！」

「まあ…でももう昼時か。魅霊は予定あるのか？」

「いえ、なにも」

「じゃあ食っていくか？つていつでも何か作れたっけな…」

「お、お構いなく！別に私はそういうわけじゃないのです」

その時、間抜けなお腹の音が鳴った。

「腹減ってんじゃない」

「大空、今のは私よ」

「紛らわしいわ！」

「冗談に決まってるじゃない。正真正銘その子よ」

「どっちゃねん…」

「さあ、今日のお昼はどのカップ麺にしようかしら」

「本当に自由だな。それに今日は客がいるのにカップ麺はないだろうよ」

その時だ。魅霊の目が怪しく光った。気がする。

「か、カップ麺があるのですか？」

「あ、ああ…」

青神が鼻歌混じりでもってきたのはコシのある麺が売りのコシ麺どう？堂。

「それをください！」

そんなお嫁にくださいとでも言わんばかりに言わなくてもいいだろう。

「な、あげないわよ！これは私の大好物。大空にも匹敵する好物なのよ！」

俺への感情ってそんなもんだったんかい。って別に嘆くことでもないか。

「お願いします！」

「いやよ！」

「別にいいじゃねえか」

そう言って俺が青神からカップ麺を取り上げる。

「なに…？私の…カップ麺を奪った…わよね？」

フラッシュバック。最初のテスト後の出来事が蘇る。既に朱々は飛ぶ準備万端。

「分かった分かった！返す！返す！」

「ふふふ…ふふふふふふふふふふつ！」

「あの…それ…欲しいです」

「魅霊、諦めてくれ。この辺一帯がクレーターになっちまうんだ」

「クレーター？」

「ああ、クレーター」

「お月様でしょうか…」

…どうツツコミを入れたものか。

「ああ、お月様は綺麗だ。私も毎日見ている」

「なあ…なんでちよこちよこ話が合った？しかも話がすり変わったのにお構いなし」

「月はいい…」

「そうですね…」

「はいはい、そうですか」

「どうやら俺が話すことは聞こえてないらしい。」

「じゃあ飯はカップ麺でいいのか？」

「もちろん！むしろお願いします」

「さっさと作りなさい」

あの一瞬、カップ麺くらい自分で作ろうぜ？熱湯入れて5分待つことも出来ないのか？

基本的に出来ない、というよりしたくないようなので結局俺がやる羽目に。

ただ、ひとつだけ問題が発生した。今ここに居るのは4人。カップ麺が4つ。普通なら数は合っているはず。なのに数が合わないと言い出す4人。

「足りてるよな…」

「足りてないわよ。むしろあなたの脳みそが足りてないわ」

「大空…前にもいったけどカップ焼きそばはラーメンではないっ！」

「天月君にはがっかりです」

いや…なんでそこまで言われてるんですか？

そう。ここにあるのはコシ麺どう？堂が2つ。カップ焼きそばが2つ。さらにコシ麺どう？堂をとれば青神がキレルオブション付きだ。

「い、いーじゃん、上手いじゃんカップ焼きそば」

「だから数が足りないの。カップ焼きそばがあと1つ足りないのよ」

「カップ焼きそばはラーメンじゃないだろ！」

「カップラーメン…およよ」

「あーもう！チャーハンだチャーハン。チャーハンを作る。誰がなんて言おうと今日の昼飯はチャーハンだ！」

「却下」

「不可」

「嫌です」

もうやだ…。

結局俺がコンビニまで買いに行かなければいけなかったのだった。買ってきたカップ麺の種類は5つ。とんこつ、醤油、塩、味噌、キムチ。それを3つずつ買っていく。とにかくこれで文句を言われることはない。大丈夫どうせ青神が全部食べてくれるだろう。

そんなことを思っただけで帰ってきたはずなのに。

「なんで…誰もいねんだよ！なんだ？隠れてるのか？」

そう思っただけで部屋という部屋を探して回ったが誰もいない。

「今までのことが全部夢だったってオチなら嬉しいけど…」

残念ながらそうではないようだ。

玄関から青神の笑い声が聞こえてくる。

「美味しかったわね」

「絶品…」

「でも良かったんですか？咲子先生に払わせちゃって」

「問題ない。白虎のおかげで一生お金には困らなくなったからな」

「お金にはな。もっとも恋愛が出来ないからその代わりというなら安いもんじゃな」

「暑いわ。早く家に入りたいわ…ってドアが開かない」

「鍵がかかっているんだ」

「ていうことは天月君が帰ってきてる？」

「青神：鍵を閉めないって危ないぞ」

「まあ、なんともないなら大丈夫じゃろ。こら大空！鍵を開けんか」

「いいか？よく聞け。まず俺はお前達の飯を買いに行ってたんだ。なのにてめえら…」

「あ、青いの！なんとかせい！とてつもなく危ない氣が出ておる」

「私にも無理ね…。朱々はどうかしら？」

「朱々ちゃんならさつき飛んで窓へ行きました。ってあれ？飛んで…？朱々ちゃん飛んでましたよ！？」

「あー朱い人にはキツく言っておかなければのう。気にするんではない。運動神経が良すぎて跳躍が飛んでるように見えたんじやろ」

「よ、良かった…」

「おい、大空。さつさと開けないとただじゃすまんぞへっ。何があっても開けるもんか。」

そう決意したのも束の間。

「そうか、開けないか。ならお前の成績に1を付けざるを得ないな。残念だが来年も1年生をやるんだな」

「がーっ！いやだーっ！」

ガチャリ。

「ガチャリ？って朱々！なんだそのしてやったりって顔は？そのVサインをやめろ！」

その時ドアが開いた。

「大空…？よくも私を締め出してくれたわね…」

「いや、そもそもお前達が悪いんであつて…」

「うるさい！大空が何してるかなんて知らないわよ！」

「そ、そんな…」

俺は決して自分の私利私欲のために動いていたわけじゃなかったはずだ。むしろみんなの為に働いていたはずじゃなかったのか？

なのにだ。この扱いはなんなんだろうか。

「なあ…」

「喋らないでくれるかしら？唾が飛ぶの」

「さつきからなんなんだよ！どうしてそんなに俺の扱いが酷いことになってんだ？」

「そ、それは…」

「青いの。話してもよからう。大空にら知る権利がある」

「いや、そんなに重い理由があるのか？」

「実はね…私の父上と母上が帰ってくるのよ」

「帰ってくるってどこに居たんだよ」

「知らないわよ未来かもしれない。過去かも。もしかしたら現代の遠くかもね」

「それでなんで俺への扱いが酷くなるんだ？」

「単なる八つ当たりだ」

「朱々！黙ってなさい！」

「そういうわけだ。多少は多目に見てやってくれ」

「多目に見るも何も、親が帰ってくると八つ当たりしたくなるものなのか？」

「考えてもみる。願いを叶えるでもなくだらだと主の元にいるんじゃないぞ？もしかしたら無理やり連れて帰るかもしれない」

「ねえ…大空…止めてくれるわよね？この家に居させてくれるって言ったわよね？」

「あ、主？願いですか？」

「こつちの話だ。気にしないでいい」

「そうだな。すまん、魅霊。今日はひとまず帰ってもらえるか？」

「大空、それについて私から話がある。この子の体は病院にもあるんだ。つまりこの子を養子に受け入れた家庭はこつちのこの子のことを知らないわけだ。まあ…ぶっちゃけた話、この子には帰る家がない」

「まで。その先は言うな」

「お前の家にこの子を預けるから」

「既に決定事項！？」

「まさか大空…私がいなくなった穴をその子で埋める気？」

「そんなことひとことも言っただけだったよな…」

「まあ、そういうことだ。後はよろしくやってくれ」

「いや、だから待て」

「また遊びにくる。次は白虎に酒でも持ってくるさ」

「楽しみにしておる」

「だから勝手に別れを…」

その時には既に担任の姿はなくなっていた。

「で…当面の問題が増えまくってるわけだが…」

「そうね。とにかく私の両親は明後日に帰ってくるわ」

「また急だな」

この前のタイムスリップと何か関係があるのだろうか。

「多分、いえ、間違いなく私の両親がこの現状を見たら私をここに居させないわね」

「それはまあなんともおつかない両親だな」

「いや、私の記憶じゃとそんなに聞き分けのないような人物ではなかったはずだがのう」

「そんなわけない！あの父上に母上…ああ！恐ろしいわ！」

「どっちなんだ？対応の仕方に困るじゃねえか」

「多分…青神にとつていい記憶がないんだと思うぞ」

「どういうことだ？」

「そのまんまだ。両親と居て楽しい記憶がない。だからこうして怯えている」

「そういえば昔はいろんな時代を飛び回ってたんだっただけ。そういうのが関係あるのか？」

「はあああつ…恐ろしい…なんで今帰ってくるの…」

「当の本人がこんなんじゃないかも分かんねえよ」

「あの…もしかしたら私は邪魔でしょうか？」

「そうだ。白虎。魅霊の話は聞いたか？」

「さっき咲子に聞いたが…普通に考えたら起きない出来事じゃのう。しかし、今回の場合は人を蘇生するのに近いような現象じゃしな。

並み大抵な神通力で出来るようなもんでもないしのう。中でも一番は分からないのは彼女が何も知らないことじゃのう」

「普通は知ってるのか？」

「普通も何も誰かが願いを込めたのなら多少のコミュニケーションはとるじやろう。かといって他の神がこの魅霊という子を生き返ら

せる意味もない、ということじゃ」

「じゃあどうするんだよ」

「儂が聞きたいくらいじゃ。それに大空はこの子をどうしたいのだ？」

そうだ。もし目の前にいる魅霊が消えたなら元通りだ。それでは魅霊が、俺の前で首を傾げている魅霊が不憫すぎる。誰かに生み出されて勝手に消されるなんて許されるはずがない。

ならどうする？いくら考えてみても答えは見つからない。それは答えが魅霊が消える、その一択しかないように思えた。

って俺がこんな考え方してたらダメじゃねえか。大丈夫。なんとかなる。今はこれしか言えない。

「魅霊。お前は…いつたい何のためにいるんだ？」

「私ですか？何ででしょう？哲学的です…」

「まあ…いいか。ただこの世界にはお前が2人居るわけだろ？どっちが本物なんだ？いや、どっちも本物なのか？」

「分からないです。でも私は今ここに居て、天月君というところだけは分かります」

「大空、少なくともこの子は本物だ。神通力で出来た仮の姿なら分かるから」

「向こうは事故からそのまま…ならどちらも本物。…こりやもう1人の魅霊の目が覚めるのを待つのがいいのか？」

「三十路に聞いた話じゃ三年眠ってるのよね？だったら待ってもどれだけかかるか分からないじゃない」

「だからといって出来ることもないんだよ」

「だったらいいじゃない。向こうにもこの子が居て、こっちにもこの子が居る。問題ないんじゃないかしら？」

「ははっ、それもそうだな」

「また家がうるさくなる…」

「いや、朱々からしたらまたじゃねえだろ。とりあえず魅霊もそんなんでいいか？」

「はい。私はなんでも」

めっちゃ良い子だ…青神も朱々も白虎も見習って欲しい。

その時、家のインターホンの音が鳴った。

「ちよつと出てくる」

「待って！」

「青神？」

「父上と母上…もう…」

まさかもう来たのか？いくらなんでも早すぎる。

俺からすれば大した問題ではない。だが…少なくとも青神の両親は家に上がるだろ。しかしだ。現在天月家の状況は酷いもので部屋は散らかりまくりになっている。他人様に上がってもらうには失礼極まりない状況である。

「朱々！部屋を片付けろ！」

……………。

「朱々様！部屋を片付けてくださいまし」

「仕方ないな」

「青神は来い。多少は時間稼ぎをするぞ」

「父上…母上…」

こいつは大丈夫か？最早生きてるのかどうかも不安になるようなほどだ。

というか時間稼ぎにこいつを使っても何にもならないような気がする。かといって他に頼れそうなのは…

「白虎。きみに決めた！」

「はあ？」

「いや、だからきみに決めたって」

「何をじゃ？」

「部屋が片付くまで青神の親の引き止め」

「なんで儂が？」

「なんでそんなに乗り気じゃねえんだよ。青神は使い物にならねえし、青神の親見たことあるのはお前ぐらいだろ？」

「普通にめんどそうだったんじゃが…。それに青いのの両親ならお主でも分かるとは思うんじゃよ」

「あ…」

青神の親。ということは青髪蒼眼。明らかに浮き世離れした2人が歩いてるに違いない。

「ど、どっちにしてもお前がいたほうがなにかと助かるんだって」

「仕方ないのう…」

「朱々と青神は片付けを頼んだぞ！」

朱々は敬礼で分かったと言っているようだったが青神はもうだめといった格好で野垂れ死んでいた。

「…白虎いくぞ」

「ふう、分かっておる」

靴を履き、ドアを開け、外へ出る。うん。ここまではよかったんだが…。

青髪蒼眼の男女がそこにはいた。男の方は髭をしっかりと蓄えてつて髭も青かよ。とにかく年寄りに見える。女の方もそれなりの年に見えたが、それを差し引いても綺麗だった。目元なんかは青神にそっくり…。間違いなく青神の両親です。

「あ、ああああの？どちらさまでしょうか？」

「噛んだあ！俺、今噛んだ！」

「うふふ、青神と申します。実は今日、娘に会う約束をしていました」

「娘…さんですか？」

「はい、娘の龍美はいらっしゃいますか？」

「あ、はい龍美さん。うん、きっといるんじゃないかな？うんうんいると思います。ちょっと見てきます。少々お待ちください」

白虎に後は頼んだと小さく囁く。

「ったく…。それにしても久しいのう。蒼龍、お主はそんなに髭を生やすようになったのか？暑苦しくてかなわんわ」

「ああ…髭か。久しく剃ってないな。そんな暇も無いほどに忙しく

ってな」

「それにしても白虎様がここにいらつしゃるとは思いもありませんでした」

「いろいろあつてのう。まあ、それなりに楽しんでおる」

「それは良きことで。つまりはここには2人の神が仕えてるんですの？ということは2人も器がいらつしゃる…これはなんという巡り合わせ。ええつと西洋の言葉で…らっきーとでも言うのでしょうか？」

「器とな？はて、なんのことじゃ？」

「今回はそのことで来たのだ。龍美にも話さなければならぬであろうことだ。どうせなら同時に話そう」

「そういうことなら暫し待つとしようかの。ただその器。多分1人しかおらん」

「ふむ。どうということだ？」

「青いのもいる所で話したい。先ほどの話と合わせて話そうではないか」

「そうか。ならばそろそろそちらに失礼させてもらいたい」

「立ち話になってすまんのう。中に青いのもいるだろう。さあ中へ「ちよい待ち！」

「ふむ、先程の少年。どうかしたのか？」

「いや、なんと言いますか…少し目を離したら…青神が逃げ出してしまつて…」

「まったく…青いの…」

「そうか。問題ない。3分あれば連れ戻そう。竜宮よ。少し離れてもらえるか」

「はい。ではお願いします」

「では失礼して」

軽く頭を下げると青神父は消えた。というか消えた。なんというか消えたと言えない。何が起きたか全く分からない。そう思っていたが、あることを思いだす。前に遅刻しそうだった時に青神が

使ったやつだ。青神の親なら難なく使えるんだろう。

3分も経ってないんじゃないかといううちに青神を腰に抱えて戻ってきた。

「青神：何がそんなに嫌なんだよ」

「うーっ」

「うーってなんだよ」

「むーっ」

「いやだからなんだよ」

「逃げれないわね…。大空？今から私の父上と戦ってその間に逃げる！的になかつこいい役をやりたくはないかしら？」

「絶対やんねえよ」

「すまないが少年。中に失礼してもいいか？」

「ああ…多分。朱々が綺麗にしてくれてるはずだから…」

元々夏休み前は朱々が家の掃除やら洗濯やらはやっていた。ただそれじゃあんまりだということで夏休み中は俺がやると言ったにも関わらず、補習やらで何も出来なかったから散らかっていたわけで、実際朱々にやらせれば完璧に終わるはず。

「それではお邪魔します」

「ど、どうぞ」

青神は抱えられたままなんだな。写メに撮っておきたいくらいに笑える。

もしここでパシャリとかしたら駄目なんだろうと分かっているとしてもしたくなるのは仕方ないと思う。

家の中は俺が思っている以上に片付いており、これは朱々にラーメンを奢らなければならないと思わせるくらいに綺麗になっていた。

「ど、どうぞそちらにお座りください…」

「ああ、すまない。よっこらせつと。でだ、白虎よ。先程の話の続きだ。まず何故私たちが来ることになったかだが…まず龍美。お前の様子を見に来たことが1つだ」

まあ…親なら当たり前のことなんだろう。息子を置いて世界一周

に行く親もいるが。

「次が大切なんだが…龍美よ、どうしてお前の神通力を溜めることよりも成長を促したか覚えているか？」

「ええつとですね？私的にはうる覚えなのですが…確か来るべき時が…なんとか…」

「…ある程度予想はしていた。きちんと話をしたはずだったんだがな。まあ、器の子にも話しをするつもりだったから良いだろう。器は君かい？他の器は今？」

「あ、そちらが言う器が何か分からないけど多分そうっす」

「あんまり堅くならなくてもいい。だいたい今はこっちが客なんだ。そっちがオドオドする必要もないだろう？」

「確かにそうなんっすけど」

「それにそんな話し方もなくていい。もっとフランクでいいから…そう言われてもな…」

「器が分からないとおっしゃいましたね？簡単に言ってしまうば神に選ばれた人間、ということになりますね。ここには一見して3人の神がいますので少なくとも3人は器がいらっしやるのではないかしら？」

「それがのう…青も朱も儂も大空…この男1人に仕えているんじゃ」

「ほう…興味深いな」

「なんか悪いことしたか…？特に心当たりはないのだが、白虎が何故か俺の名を呼び、謝り続けている。

「困っているようだから言っておこう。普通神様っていうのは1人に対して1人。マンツーマンで関係が成立する。その常識を軽く越えるどころか大きく越えて3人と一緒にいるというのはすごいことなんだ」

「ま、まあ…いろいろあつただけどさ、青神以外は元々他の人のところにいたんだ」

「この場でうちの娘を青神、と呼ぶのは相応しくないと思わないか？」

青神×3。これはなんとも言えない状況ではある。

「そう…だな。龍美以外は他のところにいた」

「それでいい」

「はうつ…！もう一度言つて…お願い！」

あの…お宅の娘さん名前を呼ばれて身悶えてますよーって気にしないんですね。

「気持ち悪い反応するな。二度と呼ばねえぞ」

「はうつ、龍美…名前…初めてよ・ば・れ・た」

「だあつ！気色悪い！」

「まあまあ落ち着いてくれ。君の緊張が大分解れてきたのは非常に嬉しいが、話が逸れるのは困るからね」

「そ、そうだな。朱々…朱雀は元々同級生の女子のところにいたんだが…色々あつてそいつが神様に関係することを全部忘れた。それを願った。で、何故か俺の家に居候」

「違うぞ。大空が自分で来いって言った」

「そうだったか？で、白虎は願い主のところに رفتたのはいいけどそいつの願いがどうしても叶わないので逃亡だっけ？」

「もつと言い方があるじやろうが…まあそうじゃのう」

「というわけだ。だったら最初のところにいたのが器になるんじゃないのか？」

「そう思うだろう？でも違う。それはね、運命がその人物を器とするのを拒んだんだ。そして運命は君を器に選んだ。これだけの神、しかも四神の三角に選ばれるなんて素晴らしい器だ。そうだろ、竜宮？」

「そのとおりですわ」

「不思議だ…四神はどれも違った運命を司り、どれも違った属性を持つ。その能力が適合する場所を求めるのが神という存在だ。ならば君は私たち神にとって安らげる何かなのかもしれないな」

「あの…話が飛躍しすぎじゃないか？」

「そんなことはない。現に四神のうち三人がここにいる。直に玄武

も来るのではないかと疑ってしまっくらいだ」

「玄武？そうだ、友達のところ玄武がいたはずだ」

「なに？それはおもしろくないな。四神が仕える器。この先に起こることも1人で受け入れてくれると思っただが…」

その時だ。何故かチャイムというかなんというか、ピンポンとかいう音が鳴った。

まさかと思う。しかもこの青神の親父さんの発言の後だ。あの海斗が来てもおかしくないと思えた。

俺が扉を開いた先に見たのは…翠髪碧眼。あれ、なんかデジャヴ？

「あの脳みその腐りきったファツキンマスターに愛想を尽かしました。おじゃまします」

「あ、どうぞってなるか！」

「…ちらっ」

「……………」

「…ちらちら」

「……………」

「ボディースーツの一部をめぐったら私の思い通りに動くと思ったのは計算ミス。再演算開始…ぴっぴ、演算完了。結果、私にはまだ恥じらいと萌えが足りなかったと判明。直ちに実行に移ります。データベースと照合した結果最も最適な服装を形成します」

ぴちっとしたボディースーツが光に包まれる。いったいどんな変化が…。

「完了しました」

「って穴が開いただけかよ！しかし…これはこれで…官能的というか…」

「では、おじゃまします」

「いや、なんでそうなる」

「官能的という発言を自己処理した結果…」

「自己処理！？それは都合の良い方に変えたただけだよな！？」

「失敗。次のステップへと移行します」

「今度はなんだ？」

さつきと同じように光に包まれる。

何が来てもこれ以上の厄介事は避けたい。だが俺の予想の遙か上を超えた。

光に包まれたのにも関わらず服装は同じ穴だらけボディースーツ。変わったのは本人…の格好だった。

顔を赤らめ、もじもじしながらあひる座り。そしてトドメのセリフ。

「お兄ちゃん…大人しくしてるから………いれて」

ヤバいなんかきた。なんだよその猫なで声は。なんというか最後の言葉に間をとったのも意図的なのか？ヤバい興奮してき…

「大空…あなたなにしてるのかしら…？」

「あ、青神…」

「龍美」

「龍美…」

「なんで名前で呼んでるの？汚らわしい」

「いや、これはだな…」

「お兄ちゃんにこうしろって言われたの…」

「妹！？妹がいたの？しかもこんなプレイを要求するなんて…。それなら私が…」

「いや、それとこれでは需要が違う、だろ？少年よ」

「青神の親父さん…話が分かるって違う！確かにそうだけど違うんだ！」

「全く面白いことになるものです。あの脳みそ腐りきって　　が

で　　な糞マスターとは大違いです」

なんでこいつは喋りながら自分でピーって音を鳴らしてるのかが不思議でならない。

ただ海斗は最低、という部分は嫌という程伝わった。

「とまあ、いろいろな事情はぶっちゃけ面倒くさいのではらく無期限お邪魔します」

「ああ、超邪魔だな…」

「はっはっはっ！なんだか自分の思惑通りに事が進むと楽しいなあ！そう思うだろ少年」

「こっちとしては悪い意味で思った通りで止めて欲しいです。というか神通力使ってたりしません？」

この青神の親父さんが運命を無理やり変えてもおかしくはない。

「さすがに神の運命は変えられないんだ」

おかしかったらしい。

「とまあ…四神が同じ場所に集うとは思いもしなかった。これは確か…何千年ぶりだ？」

「300年ですよ」

「お、そうか」

この親父さんなんか適当じゃねえか？さっきから時々変な挙動が入るし。

「ともかく今後の由々しき事態を目前にするにしてもこのメンバーがいるならどうとでもなるというものだ。龍美がいなくてもね」

「今後の事態を頼むから教えてくれ。予想通りなら俺の人生が掛かってる」

「むっ…どう話したのか…とりあえず大きな規模の災厄がやってくる。どんな形なのかは私たちにも分からない。自然災害か…隕石衝突、第3次世界大戦かもしれない。ただそれだけの大きな出来事を止めるということは少なからず誰かが無理をしなくてはならない」

「つまり俺が全員の災厄とやらを？」

「そんなことにはならないよ、頑張ってはもらうけれど。少年には溢れかえった運命を受け止めてもらう。たくさんの人に起きるはずだった運命、その行き先を失った運命を君が受け止める。それに就いては特段技術が必要なわけじゃない。基本は神に任せればいい」

「まあ、ならいいんだけど。それで龍美がいなくてもってというのは？」

「おや、さり気なく言っただけがバレたか。どちらかといえば本題

かもしれないな。今まで来るべき未来の為に龍美の神通力を貯めてきたつもりだったんだが…少ない。だからまた少し社に戻ってもらおうと思ってる。これだけの神がいれば問題ないだろう」

「父上…それは…」

「いくら親でもな…勝手過ぎるだろ！そこまで青神…龍美がしないと駄目なのかよ！」

また1人…暗い社に閉じこもって誰とも会わずにいるなんて許さねえ。青神はここにいればいいんだ。

「そうか…君の言い分はよく分かるし、龍美の気持ちも痛いほど分かる。少なからず自分も通ってきた道だからね。だが少年よ。もし自分が未来に行けたとして…未来に見えたのが絶望だったらどうする？」

「絶望？それが関係何かあるのか？」

「もちろん。絶望を見た君が過去に戻ってアクションを起こせたらどうする？」

「アクションを起こす。だとしてもその未来はアクションを起こすことも含めて成り立っているんじゃないかねえのか？」

「どうやらこっちの時間軸事情を知っているみたいだね。ただ君の起こすアクションが過去で何かをするんじゃない、とすれば問題ない」

「具体的には？それが青神じゃないと駄目な理由もだ」

「青神…龍美じゃないと伝わらないと言っただろう？具体的だったな。それは歴史を一度消してしまうということだ。ただそれには生半可な神通力では足りない。だから最も神通力の器が大きい神を探した。そこで…皮肉なことに白羽の矢が自分の娘に当たったのさ」

俺はひとつ勘違いをしていたらしい。それは青神にこの役目をさせるのが嫌なのは両親だって同じだったんだ。親身勝手じゃない。出来るのが青神しかいなかったんだ。

「じゃあ…龍美以外の神に手伝ってもらえたりは出来たりしないのか？」

「それも考えた。しかし、駄目だった。乾電池の並列繋ぎと直列繋ぎを知ってるかい？並列繋ぎだと長持ちする。変わりに電流は下がってしまう。直列繋ぎにすると強い電流を放つ。変わりに消耗が早くなってしまう。神通力も同じことなんだ」

「なら、神通力を青神に集めるとかだったら出来るだろ」

「…神には属性なるものがあつてね。簡単に言えば火の神なら火。水の神なら水の属性。同じ属性というのはほとんどないだよ。神の数だけ属性が存在する。だからこそ神が同じ器に仕えることなんて…？そうか、そうだな！」

「父上？」

「あ、青神生きてたのか」

「今そういうことを言うタイミングじゃないわよ」

「あまりにもみんな話さねえからいなくなつたのかと」

朱々とかは本当にいなくなつてそうだな。と、朱々を探してみると青神の母親に膝枕してもらつて寝ていた。初対面でよく出来るな…つて一応同じ年だよな？

「…いいかな、少年？」

「すみません」

本当に申し訳なかった。

「そういう意味じゃないんだ。君なら出来るんだ。4人の四神が仕える君なら」

「えつと？」

「君に神通力を送るんだ。そうすれば多分…君の中で属性が消える。純粹な神通力の形となるんだ。それなら龍美に集めるのに抵抗はないはずだ」

「だいたい分かった。とりあえず龍美はここに居ていいんだよな？」

そう、問題は解決した。…はずだった。

「それとこれは話が別。年頃の女の子を男と同居？許されないんだよ少年！いいか？龍美は私と結婚するんだ！娘は私の元からは絶対に出さない！」

ドラマで見るような展開が待っていた。しかも昭和のドラマ感が漂っている。いや、平成生まれだから知らないけど。

「父上…私はここにいます」

「龍美い！お父さんを見放すというのか？小さい頃はあんなにも私のことを…。もういい！そんな不良娘は知らん！」

「あらあら…そんなことを言っている…」

穏やかに話していた青神母だったはずなんだ。なのに。

「怒りますよ？」

威圧感が半端ではなかった。というか正直震えてしまったくらいだった。

多分男にしか伝わらないような威圧感。証拠に震えているのは俺と親父さんだけだった。

その後親父さんは拗ねていたようだったが何か言うことはなかった。

「で…災厄はいつ対処しなくちゃいけないんだ？」

「まあ…時がくれば分かる。むしろ時が来なければ分からないことだ」

「なら今日来た意味は果たせたのか？」

そしていつ頃帰るんだ？ぶぶ漬け食っていくか？

「大体な。しかし、一番の目的は娘と会うことだ。果たされたといえば果たされたが…娘との再会がこんな辛気臭い話をして終わり、なんてのは勘弁して欲しいものだ」

「勘弁…してくれ…」

外の景色も暗くなってきた。今日から居候が増える、いや増えてしまうのに青神の両親も泊まっていくとなったら大所帯もいいところだ。

「大丈夫だ。私たちは近くにホテルを借りてるし、今日明日くらいは龍美がこっちに来れば問題ないだろう？それにしばらくは夏休みなのだろ？丁度いいじゃないか」

確かに…それに親子団欒を邪魔したいわけじゃない。

「よし、十分に親孝行してこいよ！」

「いや」

「そうだよな。久しぶりに会えたんだから話したいこともたくさん……って、なんですと？」

「いや、って言ったの。あなたは耳まで腐りきってしまったのかしら？」

「普通行くだろ！」

「行かないわよ。私が大空から離れてる間に先を越されたらたまったものじゃないわ」

「そういう問題じゃねえだろ。ていうか見ろ、親父さんマジ泣きしてるぞ」

「知らないわよ。大体どの面下げて……」

「そうか、龍美……そんなに少年の前で昔のことを話して欲しいか……」

「あ、それはちよつと……」

「そうだな、まずは五歳の時からいこうか。あれは……縄文時代に行った時か」

「私……なにかしたかしら……」

「勝手に1人で森に入っていつてな……」

「あーっだめ！だめ！だめよ！行くわ！私今からホテルに行くわよ！」

「やっと分かってくれたか、娘よ！」

「母上、一緒に別の部屋を借りるわけにはいきませんか？」

「そうね、卑劣な手段を使うような人と同じ部屋は嫌よね。なんなら別のホテルで部屋を借りましょう」

「早速準備してきます」

「急がなくてもいいわよ？」

「お父さん……寂しくて死んじゃうぞ……」

「さて、夕食の準備をするか？買い出しに行く時間はないし……何かあったか？」

親父さんに構ってたら時間がいくらあっても足りない。

「確か：野菜とお肉が少しあったはず」

そう思った時台所から不気味な匂いがした。それは香辛料が効いているようで甘ったるく、かといって軽い酸味が後をつくような匂い。

恐る恐る龍美様をルック。しかし、料理をしている様子はない、
というかあれは料理か？

よくよく見てみれば姿が見えないのは魅霊の姿だった。

まさか：な。なんだかんだで料理とか出来そうな気が：しただけ
だな。今この場を見る限り奴しかいねえ。

慎重に慎重を重ねて台所を覗きこむ。おっと今時だからな、キツ
チンと呼ぼうか。

どうやらこの匂いは頭を直接刺激してるようだ。思考回路がぐっ
ちやらぐちやらぐちやだ。もう自分が何を言ってるのかも分からない。

「魅霊：それはなんだ？」

俺の質問は的確だったはず。そのフライパンの上に乗ってる何か
の正体を尋ねたはずだ。なのに、

「料理です」

料理と言いやがった。あれが人の食い物だと？笑止！

その何かが料理というなら龍美の方がよっぽどそれらしく思える。
爆発して真っ黒だが、失敗して黒くなったということは分かるから
だ。ただ：それは何を調査したんだ？

「はっ：！まさか災いはこのことか！」

「そんなわけあるかいな！」

後ろから無玄にハリセンでツッコまれた。

「なぜ関西弁！？」

「ハリセンがあつたからに決まってます」

「知らねーよ！ハリセン買った覚えもねえよ！」

「私が持って来たのだから当然でしょう？」

なぜ当たり前のようにそれを言うのか。

「まあいいや、丁度良い。無玄ならあの料理（飯）もしくは料理と

いう名の何かを分析出来るだろ？」

「あなたは馬鹿ですか？紛れもなく料理ではないことは一目瞭然、百花繚乱」

わお、咲き乱れたよ。

「豪華絢爛」

煌びやかだな！

「いや…料理じゃないことは分かってるんだが、これが本当は何なのか気になるんだ」

「…仕方ありません。スキャン開始。対象物質の構造を読み取り中」
おお、無玄の目から光が出ている。ただこいつは本当に機械なんだろうか。神で機械っておかしくないか？まあ…こいつらの存在にツツコンでいたら埒が明かないか。

「読み取り完了。スキャン結果から申しますと、スプーン三杯で癌になり、五杯でもれなく天国…いえ、地獄に行けます。…？地獄に落とされます」

「そんな代物がここに！？」

「私そんなもの作ってません！これは料理です！」

「じゃあなんだ？材料を言ってみろ。冷蔵庫を見る限り家の食材は使っていないみたいだし」

「企業秘密です」

そつと人差し指を唇に添えればほら可愛い…

「違う、違う！それは言わないんじゃないって言えないんだろが！」

「そんなことはありませんよ。ちよつとは料理から想像するのかないんですか？」

「ここから何を想像しろと？むしろ地獄が創造されてんじゃないか…！」

「そんなものを創つたらみんな地獄の空気に触れて死んでしまいます」

「死ぬんだよ！こいつを食ったら死ぬんだよ！」

「ひどいです！そこまで言うなんて」

「本当に大空は甲斐性がないわよの。女の子の手料理は有無を言わず食べるべきよ」

「まだいたのか？」

鈍い音が響いた。というか殴られた。今のはダメですよ、分かります。言った瞬間にやつちやつたって思ったからな。

「だが、食ったら死ぬような代物だぞ？」

「分析結果から言うと…スプーン二杯なら余裕、というかもう二杯くらい食べてみてくださいよ、ニューマスター」

「いや、でも…」

「さつさと食わんかわれえ！どたま撃ち抜くぞ糞マスター」

「とうとう故障しだしたか。変な言葉を喋ったぜ？」

「元々機械でも何でもない神なのでそりゃ口調なんていつでも変えられるのです糞マスター」

糞部分が定冠詞みたいになってきた。いや、そう思うと気分が軽くなつて…こない。やつぱり心に響く。

「ていうかお前は機械じゃないんだな」

「は？こんな高性能でハイクオリティーな機械があるはずないですよ」

「すよう、って言ったな？言ったよな？しかも意味が重複してるから」

「それだけ高性能な機械なのです。ドジ機能付き」

「アーユーオーケー？とでも言いたげな顔でこちらに腕を突き出し親指を立てる。

とりあえず親指をあらぬ方向に曲げておく。

「折れてまうやろー！」

「そんなどっかの芸人のネタみたいに言うなよ！」

「そろそろ私の料理を食べてくれませんか？」

「あ、やつぱり？」

この後の出来事は恐ろしすぎて話すのも躊躇われるため一言だけで表そうじゃないか。

死にかけた。

これほど十分な表現は他に見つからない。

ああ、大切なことを忘れていた。

スタツフが後でおいしく頂きました。

ツツコミたいことは幾つかあるが、言っとなければいけないかな。

だいたい今ここはどこか？それはだな、絶賛臨死体験中だ。だからこそ別次元であるところに話しかけているのだらう。

ぶっちゃけた話をしようじゃないか。

スプーン1杯から記憶がないんだ。話すのも躊躇われる以前に記憶がないから話せない。あの一言はもちろん現状を見れば分かるだろう？

なんて臨死体験のぶっちゃけ相談会を開いている間に龍美の声が聞こえてくる。こういうのはその声が聞こえるままにしないと駄目なんだよな。ぶっちゃけた話。お、ぶっちゃけ相談会はまだ続いたみたいだ。

この臨死体験もおしまい、というわけだ。次の相談会はぶっちゃけ死んだ時だろうな。それまで楽しみ待っててくれ。

「まだ起きない…蹴っていいか？」

「朱いの少し待て」

「そうよ、起きてから蹴りなさい」

「それはちよつと違うんじゃないかと思うんですが…」

「データ収集完了。スプーンもう1杯で蘇生」

「誰が喰うか!!」

アブねえ。もう1杯喰ったらマジで死ぬぞ。それだけの殺傷能力をヤツは持っている。

スタツフはまだ頂いていないようだ。

「魅霊はキッチンに二度と入るな。ついでに龍美もだ…ってなんでニヤニヤしてんだ？」

「いやー？もう龍美なんだ？恋人なんだ？」

「それなら俺はここにいる全員と恋人だな」

青神以外はみんな名前で呼んでいる、という意味だ。そうだったはず

「ここにいる全員！？ま、まあ…私が一番ならいいけど…」

「おい、誰かこいつを止めてくれ」

おもむろに無玄の目が光り出す。

「レーザー出力上昇中…50…60…75%まで上昇」

「そんな止め方するな！」

「うふふふ？私は…大空の一番の…恋人…ふふっ」

「止めてくれえええ！」

悲痛な叫びが天月家に響き渡った。

「…ふう、龍美はやっと行っただか」

あの後、青神夫妻がなんとか龍美を止めて連れて行ってくれた。

そして夕飯は無難にカレーとなった。というよりもそれくらいしか作れなかったというのが真実。

「つ、疲れた…」

「私がいなければ疲れは倍だったのでしょうか」

「なんでだよ…」

「私は常にマイナスイオンを発してますので」

「どこぞの空気清浄機か！？」

「うるさい…お主らは静かに出来んのか？」

「私を含むのはやめてほしい。むしろ今日はほとんど喋っていない」

「そ、それは私もです。元々話すのが得意ではないですけど…途中から何がなんだかで隠れてました」

「そつえば途中からいなくなってたよな？どこに隠れてたんだ？」

「最近気付いたんですけど気配っていうのでしょうか。それが消せるようになったんです。ほらっ」

確かに魅霊の姿が消えてしまった。

試しに魅霊が居た場所に手を伸ばす。

「あふう……」

柔らかな感触と共に艶やかな声が聞こえてきた。この感触は……この感触は……？

「あんっ……はあ……んっ」

「いや、まさか……」

「マスターの手に乳房が触れているのを確認。疑心暗鬼なもの、ある程度把握しつつも揉みしだいている様子」

「いや、これはだな？」

「言い訳……無用」

「儂直々に鉄槌をくだしてやろうではないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9708/>

青き龍に願いを込めて

2011年5月2日07時40分発行